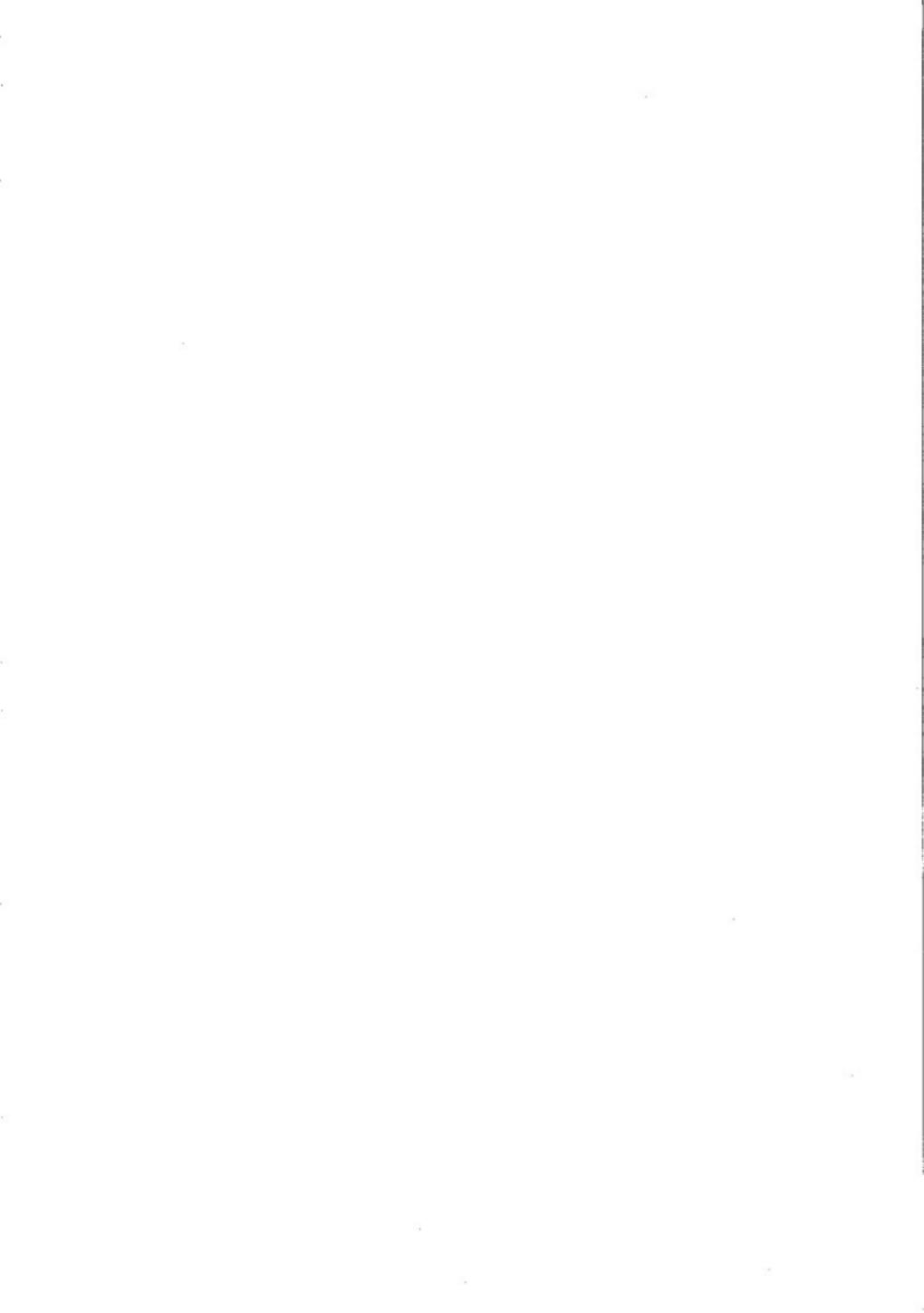


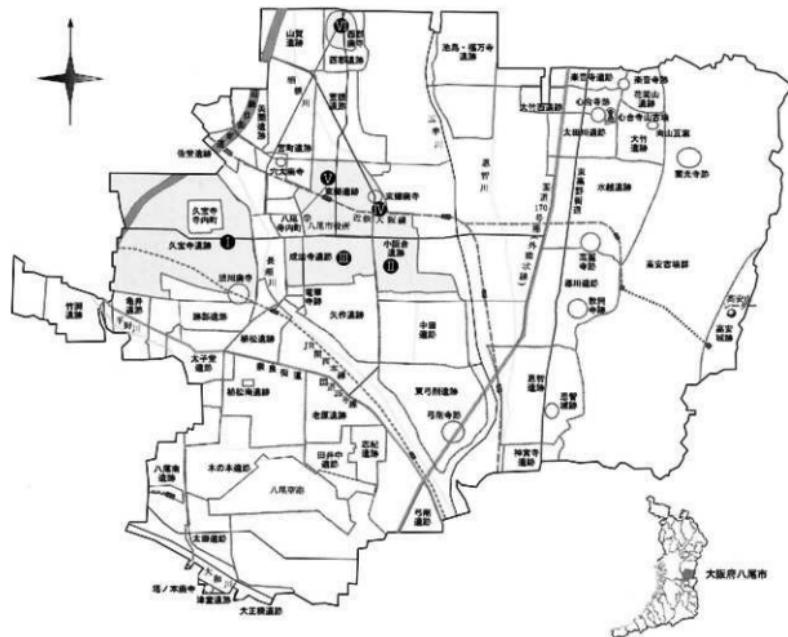
- I 久宝寺遺跡（第73次調査）
- II 小阪合遺跡（第32次調査）
- III 成法寺遺跡（第20次調査）
- IV 東郷遺跡（第68次調査）
- V 東郷遺跡（第69次調査）
- VI 西郡廃寺（第3次調査）

2009年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



- I 久宝寺遺跡 (第73次調査)
- II 小阪合遺跡 (第32次調査)
- III 成法寺遺跡 (第20次調査)
- IV 東郷遺跡 (第68次調査)
- V 東郷遺跡 (第69次調査)
- VI 西郡廃寺 (第3次調査)



2009年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成8・18・19年度に行いました民間開発事業に伴う発掘調査の成果を収録したものであります。

小阪合遺跡第32次・東郷遺跡第69次調査では弥生時代後期～中世、西郡廃寺第3次調査では弥生時代後期末～奈良時代、東郷遺跡第68次調査では古墳時代中期～平安時代、久宝寺遺跡第73次調査では奈良～平安時代、成法寺遺跡第20次調査では中世～近世の遺構や遺物が確認されています。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎健二

序

1. 本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成8・18・19年度に実施した、民間開発事業に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成21年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I 荒川和哉・原田昌則・尾崎良史、II 坪田真一、III 河村恵理、IV・V 成海佳子・河村、VI 高萩千秋で、全体の構成・編集は坪田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』(平成19年度版)をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
1. 本書で用いた方位は磁北、又は座標北(国土座標第VI系〔日本測地系〕)を示している。
1. 遺構については下記の略号で示した。

掘立柱建物 - SB 井戸 - SE 土坑 - SK 溝 - SD 小穴・ピット - SP
落込み - SO 自然河川 - NR

1. 遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、瓦が斜線、その他が白を基調とした。
1. 土色については『新版標準土色帖』1997年後期版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

序

I 久宝寺遺跡(第73次調査).....	1
II 小阪合遺跡(第32次調査).....	25
III 成法寺遺跡(第20次調査).....	51
IV 東郷遺跡(第68次調査).....	67
V 東郷遺跡(第69次調査).....	77
VI 西郡廃寺(第3次調査).....	93
報告書抄録	

I 久宝寺遺跡第73次調査(KH2007-73)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南久宝寺一丁目地内で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第73次調査(KH2007-73)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成19年9月20日から10月25日(実働22日)にかけて、荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は約304m²である。
1. 現地調査においては、飯塚直世、梶本潤二、川崎純弘、竹田貴子、田島宣子、鷹羽侑太、中野一博、玉野富士江の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成19年12月28日に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－山内千恵子、遺構図面レイアウト・トレース－荒川、遺物図面レイアウト－原田昌則、遺物図面トレース－山内、遺物写真撮影－尾崎良史・北原清子、遺物図版作成－尾崎・北原が行った。
1. 本書の執筆は、荒川・原田・尾崎が行った。文責については、目次に示した。編集は、原田が行った。

本　文　目　次

第1章　はじめに(荒川).....	1
第2章　調査概要.....	2
第1節　調査の方法と経過(荒川).....	2
第2節　層序(荒川).....	3
第3節　検出遺構と出土遺物.....	4
1) 第1面(荒川・原田).....	6
2) 第2面(荒川・原田).....	10
3) 第3面(荒川・原田).....	11
4) 遺構に伴わない出土遺物(原田).....	17
第3章　まとめ(原田・尾崎).....	23

挿図目次

第1図 調査地周辺図	1
第2図 調査区設定、地区割図	2
第3図 地層断面図	5
第4図 S P 1101、S P 1102、N R 4101断面図	6
第5図 第1面遺構平面図	7
第6図 S D 1101、S D 1102、S D 3105、S D 4103出土遺物実測図	9
第7図 第2面遺構平面図、S P 1201断面図	10
第8図 S D 3202出土遺物実測図	11
第9図 S P 4302出土錢貨拓影	12
第10図 第3面遺構平面図	12
第11図 3区 第3面 S D 3301、S D 3303、S D 3305出土遺物実測図	14
第12図 4区 第3面 S D 4302、S D 4311、S D 4315、S D 4316、S D 4323、S D 4325、 S D 4326、S D 4329、S D 4333、S D 4334、S D 4335、S D 4338出土遺物実測図	14
第13図 S P 2301、S O 3301断面図	17
第14図 S O 3301出土遺物実測図	17
第15図 1区 VII層、2区 VII層出土遺物実測図	18
第16図 3区 VII層出土遺物実測図 - 1	19
第17図 3区 VII層出土遺物実測図 - 2	20
第18図 4区 VII層出土遺物実測図	21
第19図 1・3・4区 VII層出土埴輪類実測図	22
第20図 3・4区 VII層出土製塙土器実測図	22
第21図 「#」?「×」?の線刻土器(VII層出土133~135)	24

表目次

第1表 各調査区遺構検出面对照表	3
第2表 第3面 溝(S D)一覧表	9
第3表 第3面 溝(S D)一覧表	11
第4表 第3面 溝(S D)一覧表	16

図版目次

図版 一 調査地全景	
3調査区 機械掘削状況	
2調査区 人力掘削状況	
図版 二 4調査区 北壁西部	

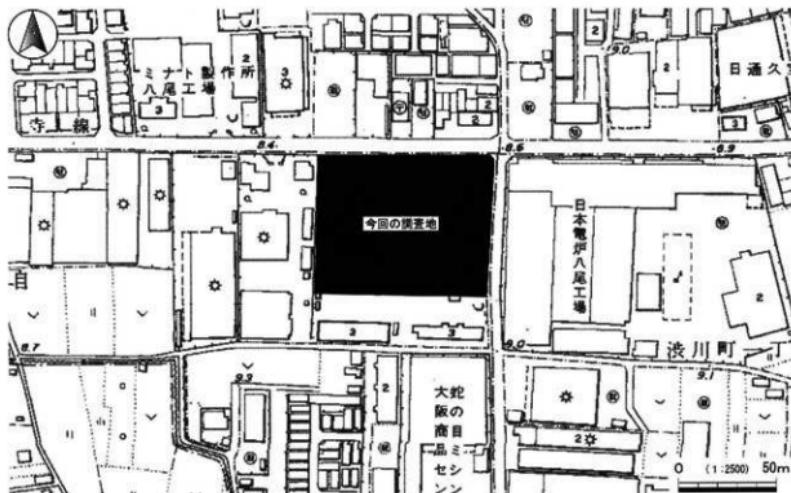
- 3 調査区 北壁Ⅰ層～Ⅶ層上部
- 1 調査区 東壁Ⅶ層
- 図版 三 1 調査区 第1面
- 2 調査区 第1面
- 3 調査区 第1面
- 図版 四 4 調査区 第1面
- 1 調査区 S P1101半截
- 1 調査区 S P1101断割り
- 図版 五 1 調査区 S P1102断割り
- 3 調査区 南壁第1面遺構部分
- 4 調査区 N R4101断面
- 図版 六 1 調査区 第2面
- 3 調査区 第2面
- 1 調査区 S P1201断割り
- 図版 七 2 調査区 第3面
- 3 調査区 第3面
- 4 調査区 第3面
- 図版 八 4 調査区 北部第3面
- 2 調査区 S P2301断面
- 3 調査区 S D3301杭列
- 図版 九 3 調査区 S D3301側板
- 3 調査区 S D3303土師器皿出土状況
- 3 調査区 S O3301耳環出土状況
- 図版一〇 4 調査区 S P4302錢貨出土状況
- 4 調査区 S P4302断割り
- 4 調査区 S D4333、S D4334断面
- 図版一一 S D1102、S D4103、S D3105、S D1107、S D3202、S P4302出土遺物
- 図版一二 S D3301、S D4326、S D4329出土遺物
- 図版一三 S D4333、S D4325、S D4338、S O3301、1区Ⅶ層出土遺物
- 図版一四 1区・2区・3区Ⅶ層出土遺物
- 図版一五 3区Ⅶ層出土遺物
- 図版一六 3区・4区Ⅶ層出土遺物
- 図版一七 4区Ⅶ層出土遺物
- 図版一八 1・3・4区Ⅶ層出土埴輪類、3・4Ⅶ層出土製塙土器

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市北西部を中心とする東西約1.8km、南北約1.8kmの広い範囲に及ぶ縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。現在の行政区画では、北久宝寺一～三丁目、久宝寺一～六丁目、西久宝寺、南久宝寺一～三丁目、神武町、渋川町一～七丁目、龍華町一～二丁目、北亀井町一～三丁目、および東大阪市大蓮東五丁目・大蓮南二丁目が遺跡の範囲である。南は跡部遺跡・亀井遺跡、西は亀井北遺跡・加美遺跡、北は佐堂遺跡と隣接し、遺跡範囲内には、久宝寺寺内町遺跡、渋川廃寺が所在する。

久宝寺遺跡が立地する中河内地域は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南部にあたり、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北ないし西方向に放射状に流れている。久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた沖積地上に展開する遺跡で、遺跡範囲内の現地表の標高は、海拔6.6～12.0mを測る。

今回の調査地は遺跡の東部の府道(加美旭町久宝寺線)沿いに位置している。調査地周辺では、八尾市教育委員会(以下、市教委)・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、八文研)による発掘調査・試掘調査等が行われているが、遺跡の西部・南部に比べてその件数は少ない。今回の調査地の北西約200m地点で八文研により行われた第3次調査(KH88-3)では、古墳時代前期の方形周溝墓、平安時代の水田・自然河道が検出されている(西村1989)。



第1図 調査地周辺図

第2章 調査概要

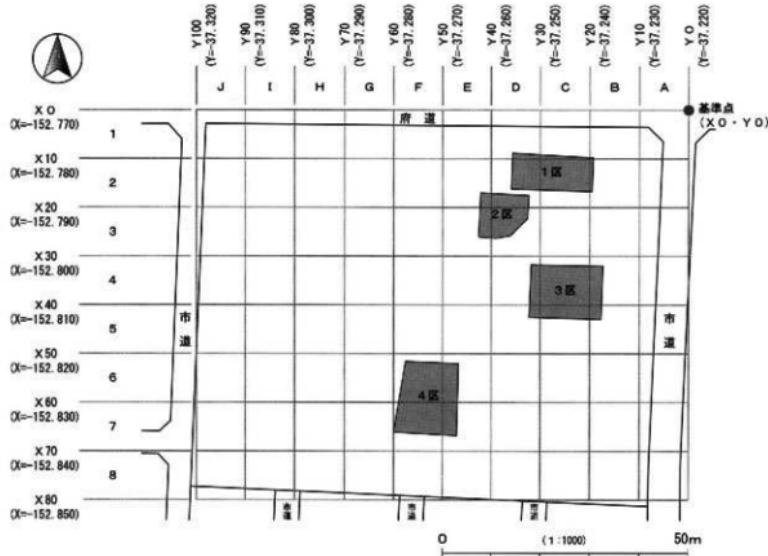
第1節 調査の方法と経過

本書で報告する久宝寺遺跡第73次調査(KH2007-73)は、共同住宅建設工事に伴い実施したものである。調査地は八尾市南久宝寺一丁目地内の府道(加美旭町・久宝寺線)の南沿いに位置しており、東西約93m・南北約75mの長方形を呈している(第1図)。

調査区は調査地の中央部以東に4箇所の調査区を設定し、北から1区～4区と呼称した。1区は東西13.5m・南北4mの長方形、2区は東西7m・南北6.5mで、南東部分の角が取れた五角形、3区・4区は建物部分に設けられた調査区で、3区が東西12m・南北10m、4区が東西10m・南北12mの長方形である。

調査地内の地区割りは、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図に記された国土座標第VI系(日本測地系)により、調査地のほぼ全体を覆う東西100m・南北80mに10m四方の方眼を設定し、その北東隅を基準点(XO・YO)とした。

地区名については、東西は基準点から西へA～J、南北は南へ1～8を付し、1A区～J8区で表記した(第2図)。調査用いた標高は、顯証寺境内(久宝寺四丁目)にある大阪府の水準点(T.P.+9.38m)を基準点とした。調査の掘削については、各調査区とともに、オープンカット工法によるため、安全面を考慮して法を付ける掘削方法を行った。そのため、設定された調査区と同



第2図 調査区設定、地区割図

表1 各調査区遺構検出面対照表

検出面番号	帰属する層準	1区	2区	3区	4区
第1面	VII層の上面	第1面	第1面	第1面	第1面
第2面	VII層中の任意の面	第2面		第2面	
第3面	VII層最下層～VII層の上面		第2面	第3面	第2面

じ面積を確保するために、調査区の各辺から1.5m幅を広げて掘削した。各調査区ともに、奈良・平安時代の遺物を含む地層(VII層)の上面までを重機により掘削し、この面で平面精査を実施した結果、全ての調査区のVII層上面で遺構が検出されたため、この面を第1面とした。1区・3区では、VII層中で遺構が検出されたため、これを第2面とした。2区・3区では、主にVII層の下位のVII層上面で遺構が検出されたため、これを第3面とした。第1表に検出面番号とこれに対応する各調査区の遺構検出面を示した。本書では、各調査区での検出面の名称は用いず、第1面～第3面の検出面番号で記載する。

遺構名については、遺構略号+調査区番号+検出面番号+遺構番号(2桁)で表記した(例、S D 4301=4区第3面の溝1)。

調査の結果、奈良時代後期の落込み1箇所、平安時代前期の小穴4個、奈良時代後期から平安時代前期の溝64条、平安時代前期以降の自然河川1条、中世の小穴1個、中世の溝1条を検出した。出土遺物は遺構内および遺物包含層であるVII層を中心として、土師器、須恵器、黒色土器、綠釉陶器、灰釉陶器、中国産磁器、埴輪、製塙土器、屋瓦、鉄製品、石製品、歯骨等の多種・多岐にわたる遺物が出土しているが、細片化したものが大半を占めている。総量はコンテナ(60×40×20cm)15箱を数える。

第2節 層序(第3図、図版二)

各調査区で確認された地層は、各調査区で砂礫の混じりや色調は若干異なるが、概ね対照できる。確認された各地層を、堆積相・相対年代など任意の基準で、以下の9層に分類し層序とする。地層の厚さ・上面の標高については、第3図に示しているので記載は省略する。

I層：上位よりバラスト主体・2.5Y3/1黒褐色砂質シルト(コンクリート塊混じり)・2.5Y6/6～10YR6/6明黄褐色砂質シルト(ブロック土混じり)。調査地南部で厚く堆積する。現地表面である上面は、4区が他の調査区より40cm前後高い【住宅展示場解体時の整地層・搅乱埋土・客土による盛土】。

II層：2.5GY3/1～5GY3.5/1暗オーリープ灰色の礫混じり粗粒砂質シルト。3区東部では上面が乱れており、盛土施工時に重機等により搅乱されたと推測される。上面は、1区～3区より4区の方が20cm前後低い【旧水田耕作土】。

III層：7.5Y4/1灰色～7.5Y4/2オーリープ灰色ないし7.5GY4/1～10GY4/1暗緑灰色の礫混じり粗粒砂質土～粗粒砂質シルト(ブロック土を含む)【近世・近代の水田耕作土・遺構埋土】。1区西部では、水田耕作土の下位に10Y5/1～10Y4/1灰色礫混じり粗粒砂質土～粗粒砂質シルト(粘土質シルトのブロックを含む、斑状の酸化鉄・斑点状の酸化マンガンが沈着)が見られる【島畑盛土・畑耕作土】。上面は、II層と同じく1区～3区より4区の方が20cm前後低い。下面にはIII層を耕作土とする水田耕作により形成された耕作溝と見られる凹凸が確認される。

- IV層：7.5GY4.5/1～5.5/1・10GY4.5/1緑灰色の極粗粒砂～極細粒砂。シルト質土の葉層を挟み、板状葉理が見られる。下部に2.5GY4/1暗オリーブ灰色泥質極細粒砂・10GY4/1暗緑灰色細粒砂～極細粒砂の薄層が堆積する。調査地の北東ほど粗粒である。Ⅲ層を耕作土とする水田耕作により上面は攪拌されており、攪拌が深く及んでいない部分の上部では礫（径15mmまで）が堆積する。1区・3区では、所により細粒砂質シルトの偽礫（径20cmまで）を含む【洪水堆積層】。
- V層：10GY5/1緑灰色ないし10Y4/1灰色（1区・3区・4区東部では酸化鉄分が染み状に沈着しており10YR4.5/3にぶい黄褐色）の細粒砂質シルトないし細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト・シルト質粘土（細礫～中粒砂を含む）【中世の水田耕作土・遺構埋土】。
- VI層：5GY4/1暗オリーブ灰色・7.5GY4/1暗緑灰色の細粒砂～極細粒砂ないし泥質細粒砂～極細粒砂。3区では、粗粒砂～中粒砂・細礫混じる極粗粒砂～粗粒砂の薄層との互層（斜交層理）をなす部分が確認される。SD3102は本層を切る【平安時代前期以降中世には下らない時期の洪水堆積層】。
- VII層：2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色ないし10GY4/1暗緑灰色の細粒砂質シルト～極細粒砂混じる粘土質シルト・シルト質粘土（径15mmまでの礫～粗粒砂を、所により炭化物を多く含む）。奈良時代後半～平安時代前期以前の遺物を多く含む。上面は、1区西部・2区が、他の所より20cm前後高い【平安時代前期の整地層（1区・2区の上部）・耕作土（2区～4区）・遺構埋土】。本層の上面が第1面、本層中の任意の面が第2面、本層に帰属する単層の最下層の上面が第3面の一部である。
- VIII層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色ないし10GY4.5/1緑灰色の泥質中粒砂～極細粒砂ないし極細粒砂混じる粘土質シルト。3区では、5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～極細粒砂・5GY4/1暗オリーブ灰色泥質極細粒砂の葉層を挟む。3区南西部・4区で確認された。3区南西部・4区では、本層の上面が第3面である。
- IX層：1区・2区北東部・3区では、10Y4/1～5/1灰色ないし7.5GY5.5/1緑灰色砂礫（径10mmまで）。2区南西部では、10Y5/1灰色中粒砂～極細粒砂（IX-2層）【河川堆積層】。4区では確認されなかった。2区北東部では7.5GY4/1暗緑灰色細礫～極粗粒砂混じる細粒砂質泥が、3区では5GY4/1暗オリーブ灰色砂礫質泥ないし7.5GY4.5/1緑灰色泥質細粒砂～極細粒砂（IX-1層）が、X-2層の上位に堆積する。2区・3区北東部では、本層の上面が第3面である。1・2区ではV様式甕が少量出土することから、形成された時期は弥生時代後期後半が推定される。

第3節 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、各調査区ともに、I層からVI層までを機械掘削で除去し、VII層上面を第1面として遺構検出を行った。次いで、VII層を構成する単層を遺構・遺物の有無を確認しながら、1層ないし数層ずつを主に機械（一部、人力併用）で除去した。1区・3区のVII層中で遺構が確認されたため、第2面とし遺構検出を行った。最後に、VII層を構成する最下部の単層上面ないしVII層上面（礫層が見られない部分ではIX-1層上面）を第3面とし遺構検出を行った（第1表参照）。以下に、各検出面で検出された遺構とその出土遺物について記す。

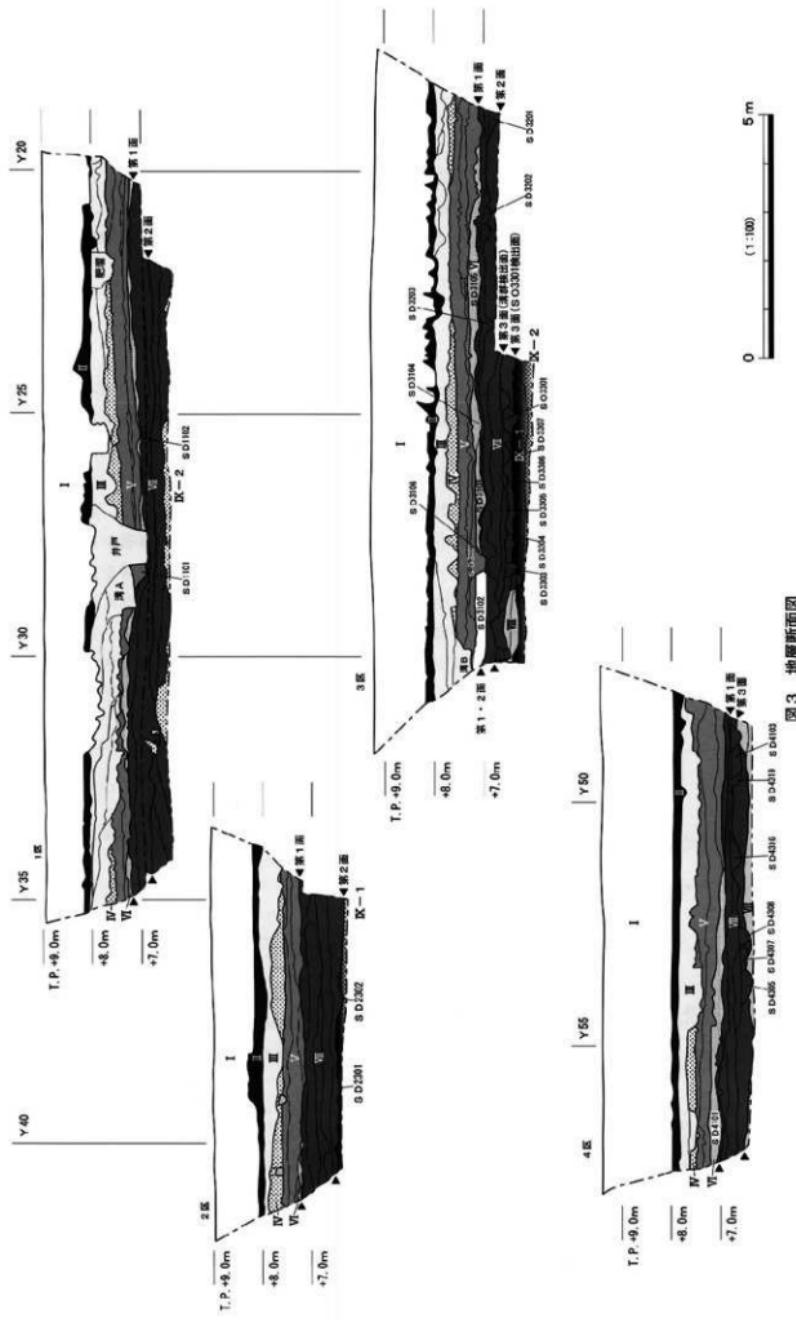


圖 3 地層斷面圖

1) 第1面【平安時代前期から中世】(第5図、図版三・図版四)

第1面は、VI層までを除去した主にVII層上面である。実際には所により薄く堆積するVII層最上部の緑灰色～暗緑灰色粘土質シルトまでを除去して遺構検出を行った。第1面では、中世の小穴1個(S P4101)、溝1条(S D3101)、平安時代前期の小穴2個(S P1101・S P1102)、溝13条(S D1101・S D1102・S D2101・S D2102・S D3102～S D3107・S D4101～S D4103)・自然河川1条(N R4101)が検出された。

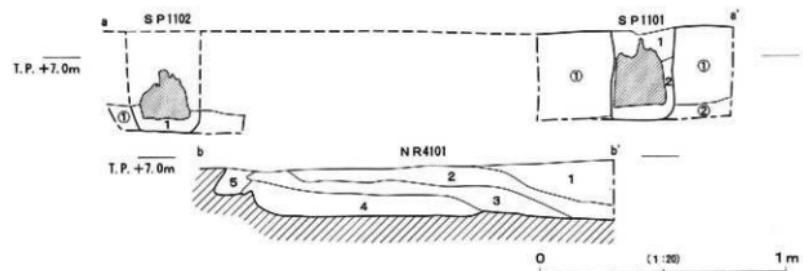
小穴・柱穴(S P)

S P1101(第4図、図版四)

1区西部(2D区)で検出された。径0.25mの円形の穴で、検出面からの深さは0.37mである。埋土については、第4図に示した。柱穴の底には柱根が残っていた。埋土からの出土遺物は土師器・須恵器の細片である。

S P1102(第4図、図版四)

1区西部(2D区)で検出された。S P1101が検出され、柱穴と判断された時点で、周辺を平面精査したが、VII層上面では平面的に検出できなかった。さらに調査区の西部のVII層を10cmずつ2回に分けて掘り下げ、平面精査したが小穴・柱根は検出されなかった。さらにVII層を掘り下げた時点で柱根が出土したため、S P1101が検出された面から約30cm下の面で、ようやく平面的に検出された。柱根が出土した1区西端では、VII層がグライ化し水が染み出していたため、VII層上面では平面的に検出できなかった。検出部分では径0.3mの円形の穴で、平面的に検出された面からの深さは0.1mである。埋土については、第4図に示した。埋土からの出土遺物は土師器・須恵器の細片である。

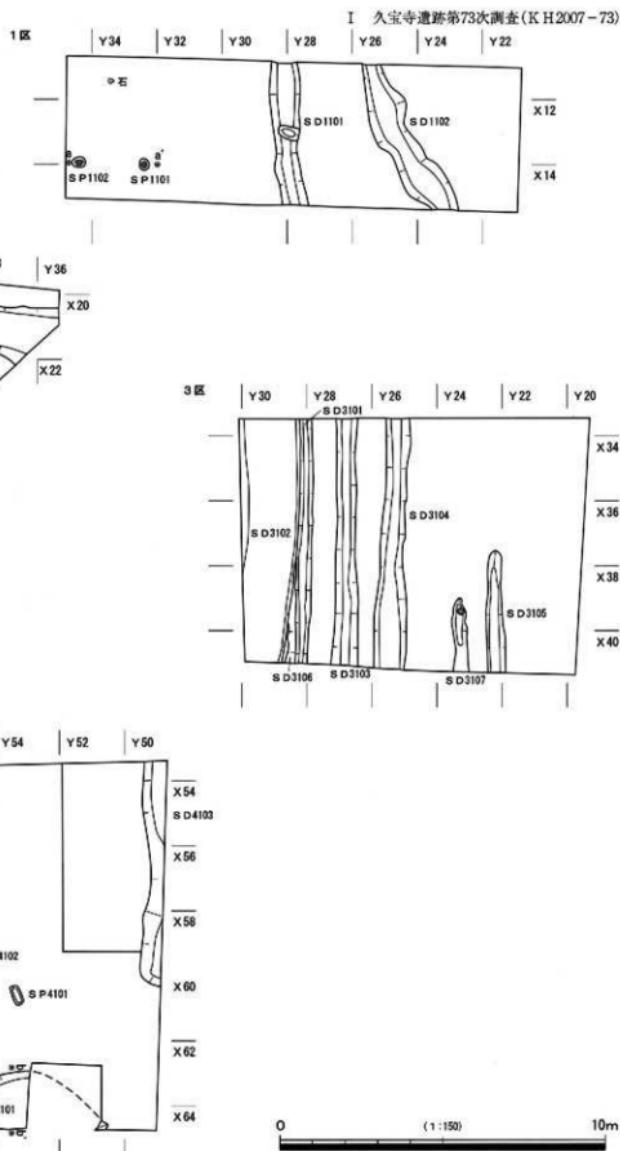


S P1101・S P1102埋土
1 50Y4/1縫オリーブ灰色細粒砂～縫粗粒砂混じる粘土質シルト・50Y5.3/1縫オリーブ灰色砂質(中粒砂～径5mm)混じる細粒砂質シルトのブロック
2 50Y3.5/1縫オリーブ灰色粗粒砂～縫粗粒砂混じる細粒砂質シルト
① 50Y3.5/1縫オリーブ灰色(上部は2.5Y4/2縫灰黒色)砂質(粗粒砂～径7mm)混じる細粒砂質シルト
② 50Y4/1縫オリーブ灰色砂質(粗粒砂～径5mm)混じる細粒砂質

N R4101

- 1 2.50Y4/1縫オリーブ灰色細粒砂質泥・2.50Y5/1縫オリーブ灰色中粒砂～縫粒砂・2.50Y4/1縫オリーブ灰色泥質細粒砂(葉理)の薄層の互層
- 2 2.50Y6/1縫オリーブ灰色細粒砂～中粒砂(葉理)・2.50Y4/1縫オリーブ灰色細粒砂質泥の葉層を挟む
- 3 10Y7/1縫白色粗粒砂～中粒砂・2.50Y6/1縫オリーブ灰色粗粒砂～中粒砂の薄層の互層・2.50Y4/1縫オリーブ灰色細粒砂混じる粘土質シルトの偽被(径1.5mまで)を含む・2.50Y4/1縫オリーブ灰色泥質細粒砂の葉層(木本の植物遺体を含む)を挟む
- 4 50Y4/1縫オリーブ灰色泥質細粒砂の薄層(木本の植物遺体を含む)・2.50Y5/1縫オリーブ灰色細粒砂～縫粗粒砂の薄層・葉層の互層・10Y4/1縫白色泥質の葉層を挟む
- 5 2.50Y4/1縫オリーブ灰色縫粗粒砂混じる粘土質シルト・2.50Y4/1縫オリーブ灰色泥質細粒砂が斑状に混じる

第4図 S P1101、S P1102、N R4101断面図



第5図 第1面遺構平面図

器の細片である。ちなみに、S P 1101・S P 1102の北側で、拳大の石1個が検出された。S P 1101・S P 1102は、柱根が残ることから、建物あるいは櫛を構成する柱穴と考えられる。

S P 4101

4区南部(7F区)で検出された。長辺0.6m、短辺0.3mの丸みを帯びた長方形の穴で、検出面からの深さは0.05mである。埋土は、V層に砂・砂質シルトが葉層状・マーブル状に混じるものである。埋土からの出土遺物は、瓦器・土師器の細片が1点ずつである。出土遺物と埋土から、上位からの攪拌により形成された中世の遺構が残ったものと考えられる。

溝(S D)(第5図、第2表、図版三、一一)

第1面で検出された溝は、南東-北西方向に伸びるS D 1102、東西方向に伸びるS D 2101を除き、全て南北方向に伸びる。各溝の規模・埋土・埋土からの出土遺物、および図化した出土遺物の遺物番号については第2表に示した。

これらの溝のうち南北方向・東西方向に伸びるものは、大きく2種類に分けられる。

- ① 断面形状は浅い皿状。深さは浅い。埋土はVI層最上部の窪みにVI層の砂・泥質砂が堆積する。【S D 2102・S D 3103～S D 3107・S D 4101・S D 4102】
- ② 幅は①より広い。断面形状は①以外の形(逆台形・深い皿状)。深さは①より深い。埋土はVI層以外。【S D 1101・S D 2101・S D 3102・S D 4103】

①は一部に葉理の見られるVI層で充填されており、機能時の状態で洪水により埋没したもので、その底面には耕作痕である小さい凹凸が見られることから耕作溝と考えられ、その形状から畝間溝と考えられる。なお②のうちS D 4103は第3面に属する遺構の可能性がある。S D 1101・S D 2101・S D 3102はそれぞれ埋土が異なるため、時期差がある可能性がある。S D 1101は、溝を挟んで西側が高く、東側が低い。溝の西側ではS P 1101・S P 1102が検出されており、宅地と宅地の外側とを区画する溝であったと推測される。

S D 1101は、埋土が中世の水田耕作土であるV層であるが、VI層最上部が溝に沿って落ち込み、その東側が低くなっていることから平安時代前期(VI層の整地時)に形成されたものであることがわかる。また、溝の部分では、VI層が切られていることから、VI層の堆積後に溝状の窪みとして残っていた部分が中世に再掘削されV層が堆積したと推測される。S D 3101は埋土・層位から中世のものと判断でき、それ以外の溝は、出土遺物・層位からみて平安時代前期を中心とするものである。第1面で検出された溝から出土した遺物のうち、図化したものについて以下に記す。

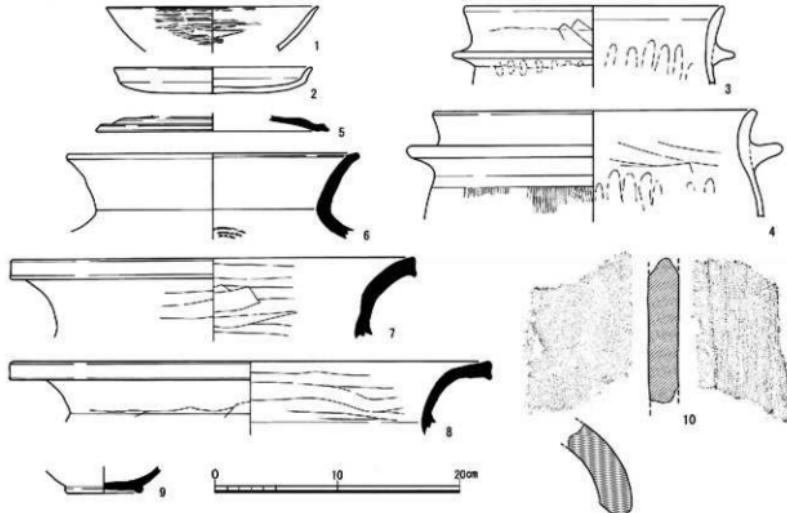
S D 1101出土遺物(6・7) 共に須恵器である。6は壺Bの口頸部細片である。復元口径23.7cmを測る。口縁端部は内傾して幅広の端面を持つ。内外面に灰かぶりが認められる。7は壺Aの口頸部細片である。口縁端部は下方に肥厚し幅広の端面を持つ。大形品で、復元口径32.7cmを測る。

S D 1102出土遺物(3・8～10) 3は短い鉗が付く土師器羽釜の細片である。口縁部外面に粘土紐の痕跡が残る。8は須恵器壺Aの口縁部片である。大形品で、復元口径38.7cmを測る。9は綠釉陶器碗の体底部の細片である。高台は削出高台で、高台外側面下部は削りにより内傾する面を有する。高台径6.0cm、高台高0.5cmを測る。釉色は暗緑灰色で薄く、高台疊付けから底部裏面には施釉されていない。京都近郊産のものと推定される。10は丸瓦の細片である。凸面はナデ、

凹面はやや粗い布目が残る。色調は灰白色。胎土中に0.1~1.4cm大の長石を多く含む。

S D3105出土遺物(5) 5は須恵器杯B蓋の細片である。復元口径18.8cmを測る。

S D4103出土遺物(1・2・4) 1は黒色土器A類頬の細片である。内外面に横方向の密なヘラミガキが行われている。2は土師器中皿。復元口径16.0cmを測る。内面から体部外面にかけて煤の付着が認められる。4は土師器羽釜片である。復元口径25.8cmを測る。鍔はほぼ水平方向に貼付けられており、幅2.5cmを測る。



第6図 SD1101(6・7)、SD1102(3・8~10)、SD3105(5)、SD4103(1・2・4)出土遺物実測図

第2表 第1面 溝(SD)一覧表

溝構名	横出規模(m) 幅 厚さ	埋土	出土遺物	掲載遺物 番号	
SD1101	0.64~1.22 0.15	VII層・V層	土師器・須恵器・陶器製品	6・7	
SD1102	0.56~1.27 0.11	VII層	上部器・須恵器・縁錐陶器・瓦	3・8・9・10	
SD2101	1.18~1.90 0.14	7.5G4.5/1縫灰色織糸～中粒砂混じる泥質粘粒砂～細粒砂質泥(斑状)	土師器・須恵器		
SD2102	0.46	5G4.5/1縫灰色織糸砂～織糸粒砂混じる粘土質シルト・細粒・泥質砂(斑状)を含む	土師器・須恵器		
SD3101	0.36~0.49 0.09	10G3.5/1縫灰色織糸砂～織糸粒砂混じる粘土質シルト・細粒・泥質砂(斑状)を含む	土師器・須恵器		
SD3102	1.90以上 0.07	7.5G3.5/1縫灰色織糸砂～織糸粒砂混じる泥質砂(斑粒～施鉢紋)・下部は5G4.5/1縫オリーブ灰色織糸砂・細粒砂混じる粘土質シルト・施鉢紋混じる粘粒砂混じる泥質砂(斑粒～施鉢紋)のブロック・底面に10G3.5/1縫灰色織糸砂・織糸粒砂混粘土質シルトの薄層	土師器・須恵器・黑色土器・灰釉陶器		
SD3103	0.60~0.83 0.09	VII層	土師器・瓦		
SD3104	0.52~1.00 0.11 *	*	土師器・須恵器・瓦		
SD3105	0.38~0.52 0.07 *	*	土師器・須恵器		
SD3106	0.01~0.50 0.01 *	*	土師器・須恵器	5	
SD3107	0.42~0.50 0.05 *	*	なし		
SD4101	0.24~0.46 0.05	5G4.5/1縫オリーブ灰色織糸砂混じる粘土質シルト・5G4.5/1縫オリーブ灰色粘粒砂・2.5G4.5/13.5/1縫オリーブ灰色粘粒砂混じる粘土質シルトが撲滅に混じる	土師器		
SD4102	0.24	0.02	土師器・須恵器		
SD4103	0.73	0.21	7.5T2.5/1縫灰色織糸砂混粘土質シルト+5G4.5/1縫オリーブ灰色粘土質シルト・下位層がブロック状(~1cm)に混じる・炭化物を多く含む	土師器・須恵器・土師器・須恵器・黑色土器・縁錐陶器・瓦	1・2・4

自然河川(NR)

NR4101(第4図、図版五)

4区南部(7F区)で検出された。蛇行する部分の北肩が検出されたもので、全容は不明である。埋土については、第4図に示したように、流水により堆積した砂からなる。埋土からの出土遺物は、土師器・須恵器の細片、加工木である。遺構の時期は、層位から平安時代前期以降で中世には降らない。

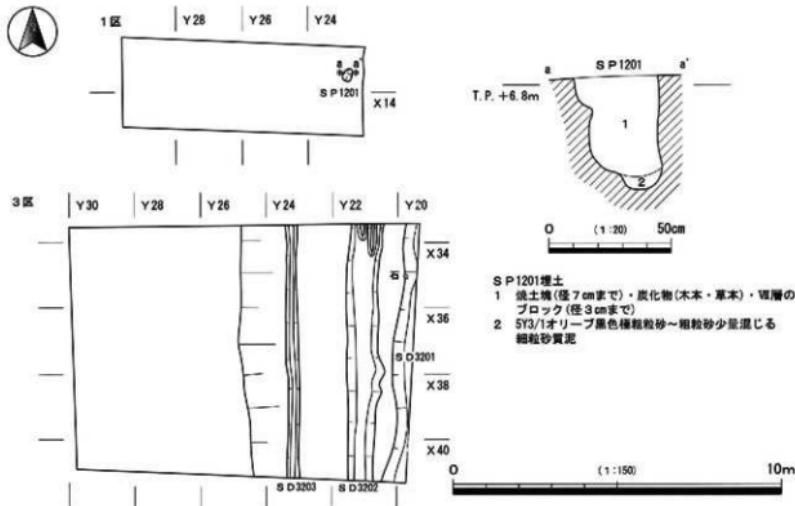
2) 第2面【平安時代前期】(第7図、図版六・一一)

第2面は、1区ではⅦ層を構成する単層を2層除去した面で、3区では調査区東部に堆積するⅦ層上部の暗緑灰色極細粒砂混じる粘土質シルト(水田耕作土)を除去した面である。第2面は第1面と第3面の間の面なので第2面としたが、1区と3区の第2面は同一の層位ではない。第2面では、平安時代前期の小穴1個(S P1201)、溝3条(S D3201~S D3203)が検出された。

小穴(S P)

S P1201(第7図、図版六)

1区東部(2C区)で検出された。長径0.4m、短径0.3m、深さ0.45mである。埋土については、第7図に示した。小穴内は多量の焼土塊、少量の焼成を受けた砾(径5cm前後)・土器片で充填されていた。焼土には、すさ(藁か)が混ぜられた痕跡があり、壁土か瓦の葺き土と考えられるが、今回の調査で瓦はほとんど出土していないことから、壁土と推測される。遺構の時期は、層位から平安時代前期と考えられる。



第7図 第2面遺構平面図、S P1201断面図

溝(S D)

S D 3201～S D 3203(第7図、第3表、図版一) 3区東部(4～5C区)で検出された。いずれの溝も南北方向に伸びる。S D 3202・S D 3203は上位の水田耕作土を埋土としており、S D 3202は耕作溝、S D 3203は3～4条の耕作溝の同一方向での重なりと考えられる。出土遺物はS D 3201の西肩で拳大的石1個、S D 3202からは土師器、鉄製品等が出土している。遺構の時期は、出土遺物・層位から平安時代前期と考えられる。各溝の数値等の詳細については第3表に示した。

S D 3202出土遺物

3点を図化した。11は土師器杯Aの細片である。復元口径17.8cmを測る。底部から体部内面に放射暗文が施文されている。12は土師器のミニチュア高杯の脚部である。手づくね品で、脚部径は4.3cmを測る。13は鉄鎌の基部付近の細片である。残存部分の最大幅3.0cm、厚さ0.15cmを測る。

第3表 第2面 溝(S D)一覧表

遺構名	検出面積(m ²)		堆 土	出土遺物	記載遺物番号
	幅	深さ			
S D 3201	0.36～0.75	0.15	7.56Y4/1暗緑灰色シルト質粘土(細粒～粗粒砂少量含む)	土師器・灰土器・須恵器	
S D 3202	0.77～1.15	0.17	7.56Y3/1暗緑灰色粗粒砂混じる粘土質シルト(細粒～粗粒砂・ブロック少量含む)	土師器(ミニチュア土器・製塙一部含む)・灰土器・鉄製品・種子	11～13
S D 3203	0.34	0.16	7.56Y3/1暗緑灰色粗粒砂混じる粘土質シルト(細粒砂・ブロック少量含む)	土師器・須恵器	

3) 第3面【奈良時代後期から平安時代前期】(第10図、図版七・八)

第3面は、VII層を除去した面、ないしVII層下部の落込み埋土・水田耕作土の上面である。第3面では、時期不明の小穴1個(S P 2301)、平安時代前期の小穴2個(S P 4301・S P 4302)、奈良時代後期～平安時代前期の溝48条(S D 2301・S D 2302・S D 3301～S D 3307・S D 4301～S D 4338)、奈良時代後期の落込み1箇所(S O 3301)が検出された。

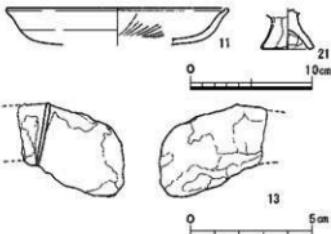
小穴(S P)

S P 2301(第10図、図版八)

2区南東部(3D区)で検出された。南東側が検出面の外に至るため全容は不明である。径約0.9mの円形の穴と推測される。検出面からの深さは0.23mである。埋土については、第13図に示した。埋土からの出土遺物は、土師器の細片3点である。遺構の時期は明確にはできないが、S D 2301・S D 2302の埋土であるVII層の最下層を除去した面で検出されたことから、溝よりは古いことがわかる。

S P 4301

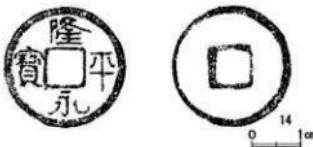
4区北西部(6F区)で検出された。長径1.2m、短径0.65mの不整形で、検出面からの深さは5cmである。埋土は、10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混じる粘土質シルトに下位層のブロック(～径3cm前後)・炭化物を少量含むものである(第4表の4区の溝埋土分類によるC)。埋土からの出土遺物は、須恵器の破片1点である。遺構の時期は、埋土から平安時代前期と考えられる。



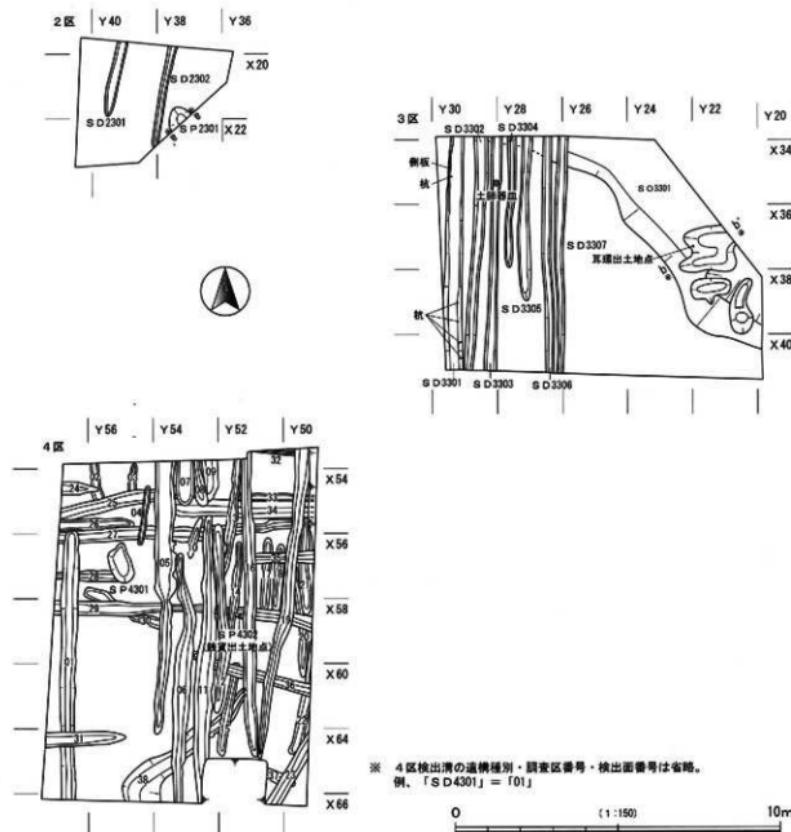
第8図 S D 3202出土遺物実測図

S P4302(第10図、図版一〇・一一)

4区東部(6F区)で検出された。遺構検出時に銭が出土した周辺を平面精査した時に検出された。径10cmの円形で、検出面からの深さは7cmである。埋土は、7.5YR3/1黒褐色シルトと2.5GY3/1暗オーリーブ灰色極細粒砂混じる粘土質シルト(粗粒砂を含む)が混じった状態で堆積する。埋土からの出土遺物は、皇朝十二銭の1つで、西暦796年初鑄の隆基永寶(14)1文である。遺構の時期は



第9図 SP4302出土錢寶拓影(原寸)



第10図 第3面遮構平面図

溝(S D)(第10図、第4表、図版一〇～一三)

第3面で検出された溝は、概ね南北方向に伸びるものが多く、4区では東西方向に伸びる溝(S D4324～S D4329、S D4331～S D4335)、南東～北西方向に伸びるもの(S D4330、S D4336・S D4337)、南西～北東方向に伸びるもの(S D4323、S D4328)が検出された。南北方向に伸びる溝のほとんどが、他の方向に伸びる溝を切る。各溝の規模・埋土・出土遺物、および図化した出土遺物の遺物番号については第4表に示した。

第3面で検出された溝のうち、南北方向・東西方向に伸びるものは、その深さ・埋土・出土遺物の状態などにより3種類に分けられる。

- ① 幅は狭い(20cm前後)。深さは浅い(20cm前後まで)。埋土は4区においては埋土分類(第4表参照)によるA・Bが多い。出土遺物は土器の細片が主体。
- ② 幅は広い(30～50cm)。深さは浅い(20cm前後まで)。埋土は4区においては埋土分類によるC・Dが多い。出土遺物は土器の細片が主体。
- ③ 幅は広い(30～50cm)。深さは深い(20～40cm前後)。遺物が出土しているものについては、出土量が多いか、出土遺物の中に完形あるいは残存率の高い土器が目立つ。【S D3301、S D3303、S D4309、S D4319、S D4327、S D4331、S D4334、S D4336】

①・②は、上位の耕作土を埋土としており、ほとんどが耕作溝と考えられる。③は、上位の耕作土(4区の埋土分類によるA・C)を埋土とするものもあるが、S D3301のように側板と杭で土留めを施したものや、S D3303のようにその埋土から完形の土師器皿が出土したものがある。③に分類される溝の多くは、耕作により一時的に形成された溝ではなく、開削された状態で機能を持つ溝(区画溝か用水路)と考えられる。

第3面で検出された溝から出土した遺物のうち、S D3301、S D3303、S D3305出土遺物の7点(15～21)を図化した。

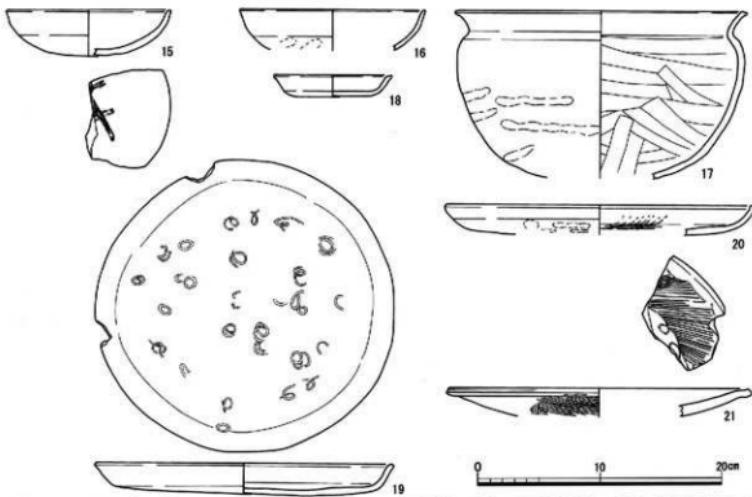
遺構の時期は、出土遺物・遺構の切合いから、S D4302、S D4303、S D4309、S D4315、S D4317、S D4318、S D4320～S D4323、S D4325～S D4330、S D4333～S D4338が奈良時代後期、それ以外は平安時代前期と考えられる。

・3区溝出土遺物

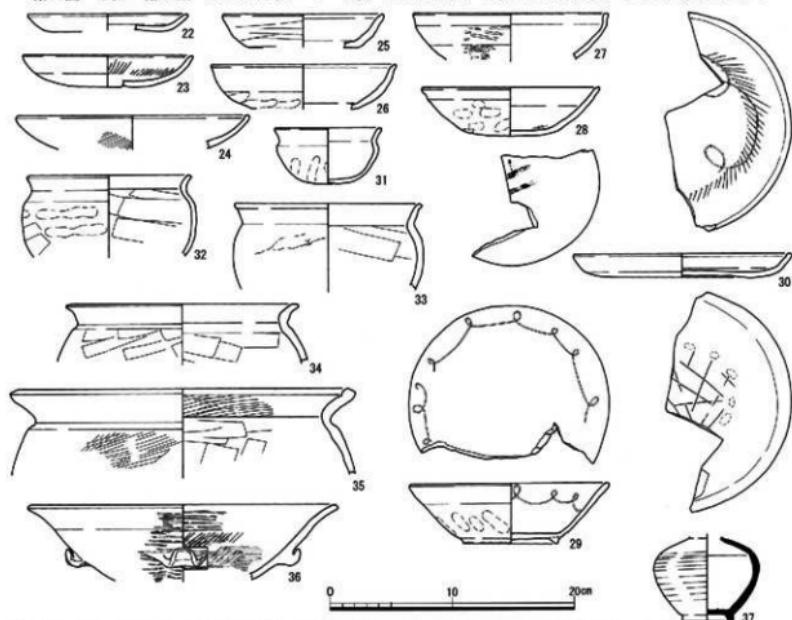
S D3301出土遺物(15・17・18) 15は土師器挽Aである。裏面に「井」と推定される墨書が記されている。17は土師器壺Bである。口縁端部は外傾する平坦面を持つ。復元口径23.0cmを測る。18は土師器皿Cである。1/2以上残存している。口径9.5cm、器高1.8cmを測る。口縁端部の3箇所に灯芯油痕が認められる。

S D3303出土遺物(16・19) 16は土師器挽Aの細片である。復元口径15.0cmを測る。19は土師器皿Aにあたる。完形品で口径24.3cm、器高2.8cmを測る大形品である。内底面に小さな輪状の暗文が施文されている。内底面を除く部分に煤が付着している。

S D3305出土遺物(20) 20は土師器皿Aである。復元口径24.9cmを測る。内底面に放射状暗文が施文されている。21は土師器高杯Aの杯部細片である。杯部内面には螺旋と放射状暗文、外面は一定方向の密なヘラミガキが施文されている。



第11図 3区 第3面 S D3301(15・17・18)、S D3303(16・19)、S D3305(20・21)出土遺物実測図



第12図 4区 第3面 S D4302(24)、S D4311(31)、S D4315(25)、S D4316(22)、S D4323(26)、S D4325(33・35)、S D4326(29)、S D4329(32)、S D4333(30)、S D4334(23・28)、S D4335(34)、S D4338(27・36・37)出土遺物実測図

・4区溝出土遺物

S D 4302出土遺物(24) 24は土師器椀Dの細片。復元口径18.8cmを測る。

S D 4311出土遺物(31) 31は土師器壺Bで1/2が残存している。小形品で口径8.6cm、器高4.6cmを測る。外面に煤の付着が認められる。

S D 4315出土遺物(25) 25は土師器杯Cの細片。復元口径13.0cmを測る。

S D 4316出土遺物(22) 22は土師器杯Cの細片。復元口径12.9cm、器高1.4cmを測る。

S D 4323出土遺物(26) 26は土師器杯Cの細片。復元口径15.1cmを測る。

S D 4325出土遺物(33・35) 33は土師器壺Bの細片。復元口径15.2cmを測る。体部の一部に煤が付着している。35は土師器壺Aの細片。復元口径27.0cmを測る。口縁端部が内側に肥厚している。体部外面および口縁部内面の器面調整として、単位の粗い横位のハケが行われている。

S D 4326出土遺物(29) 29は貼り付け高台を有する土師器杯Bである。3/4以上が残存しており、口径16.0cm、器高5.0cm、高台径7.6cm、高台高0.5cmを測る。体部内面に螺旋暗文が施文されている。

S D 4329出土遺物(32) 32は土師器壺Bで約1/2が残存している。口径13.1cmを測る。外面に煤の付着が認められる。

S D 4333出土遺物(30) 30は土師器皿Aである。1/2が残存しており、口径17.6cm、器高1.9cmを測る。内底面に螺旋と放射暗文が施文されている。

内底面から体部内面に連結輪状文と放射状暗文が施文されている。

S D 4334出土遺物(23・28) 23は土師器杯Cの細片。復元口径13.8cmを測る。体部内面に放射暗文が施文されている。28は碗Aで1/4が残存している。復元口径14.4cm、器高4.0cmを測る。底部裏面に「井」と推定される墨書が記されている。

S D 4335出土遺物(34) 34は土師器壺Bの細片。口縁部の約1/4が残存している。復元口径18.2cmを測る。内面に炭化物が付着している。

S D 4338出土遺物(27・36・37) 27は土師器椀Cの細片。復元口径16.0cmを測る。36は土師器盤Aの細片。復元口径25.0cmを測る。器壁面は被熱による剥離が顕著である。37は須恵器小壺で壺Lに分類される。口縁部を欠く以外は残存している。残存高6.9cm、体部最大径8.6cm、高台径4.2cm、高台高0.6cmを測る。

落込み(SW)

S O 3301(第13図、図版九・一二)

3区北東部(4~5B・C区)で検出された。溝状の落込みで、南東-北西方向に伸びる。南東側の肩は平面的に検出されたが、北東側の肩は確認されたものの検出前に調査区北東部の壁面が崩落したため、平面的には検出できなかった。幅は4m前後である。底面に部分的に窪みがあり、木本の植物遺体を含む粘質土が堆積していた。埋土については、第13図に示した。埋土からの出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪の破片、馬の歯・耳環・加工木で、落込み底面の窪みに堆積する粘質土からは弥生土器、同一個体をなす須恵器の破片が数点出土している。出土遺物のうち5点(38~42)を図化した。38は土師器椀Aの細片。復元口径21.1cmを測る。39は土師器羽釜。口縁部が外反して開くもので、復元口径27.2cmを測る。鍔は水平に貼付けられており、幅

第4表 第3面 溝(S D)一覧表

遺構名	検出規模 (m)		埋土	出土遺物	掲載遺物 番号
	幅	深さ			
S D 2301	0.33	0.07	7.5X3/1オーリープ風色細粒砂混じり粘土質シルト + 10/4/1灰色 粘土質シルト(塊状)、砂礫(径10mm~海螺壳砂)を含む	弾生土器・土師器	
S D 2302	0.20	0.03	“	弾生土器	
S D 3301	0.54	0.42	①7.50V4/1暗緑灰色細粒砂混じる粘土質シルト、砂礫(~ 径5mm)、炭を含む ②10/4/1褐色細粒砂混じる粘土質シルト	土師器・須恵器・黒色土器・種子	15・17・18
S D 3302	0.35	0.15	5X3/1オーリープ風色細粒砂混じる粘土質シルト + 7.5Y3/1オーリープ風色細粒砂混じる粘土質シルト・10/4/1灰色 泥質粗粒砂(斑状)、細繩~極粗粒砂、炭化した植物遺体 (木本・草本)を含む	土師器	
S D 3303	0.26~0.39	0.26	5X3/1オーリープ風色細粒砂混じる粘土質シルト・ 細繩~極粗粒砂、炭化した植物遺体 (木本・草本)を含む	土師器・須恵器	16・19
S D 3304	0.23	0.08	5Y3/1オーリープ風色細粒砂混じる粘土質シルト + 7.5Y3/1オ リープ風色細粒砂混じる粘土質シルト・10/4/1灰色泥質細粒砂 (斑状)、細繩~極粗粒砂、炭化した植物遺体(木本・草本)を含む	なし	
S D 3305	0.20~0.37	0.05	“	土師器・須恵器	20・21
S D 3306	0.30	0.05	“	弾生土器・土師器・須恵器・木	
S D 3307	0.15~0.34	0.06	“	土師器・埴輪	
S D 4301	0.46	0.14 C	なし		
S D 4302	0.34	0.04 A	土師器	24	
S D 4303	0.25	0.06 A	なし		
S D 4304	0.16	0.07 B	土師器・須恵器		
S D 4305	0.24~0.86	0.06 C	土師器		
S D 4306	0.20~0.86	0.03 C	土師器・須恵器		
S D 4307	0.50~1.30	0.08 B	土師器		
S D 4308	0.18~1.30	0.06 C	土師器		
S D 4309	0.22~1.30	0.24 A	なし		
S D 4310	0.13	0.04 B	なし		
S D 4311	0.10~1.00	0.07 C	土師器	31	
S D 4312	0.22~1.00	0.07 C	土師器・須恵器		
S D 4313	0.20	0.06 B	なし		
S D 4314	0.58	0.04 D	なし		
S D 4315	0.12	0.04 A	土師器・須恵器・種子	25	
S D 4316	0.35	0.20 C	土師器・須恵器	22	
S D 4317	0.25~0.66	0.07 A	なし		
S D 4318	0.26~0.66	0.06 A	土師器		
S D 4319	0.39	0.20 C	弾生土器・土師器・須恵器・埴輪・凹 色土器・瓦		
S D 4320	0.42	0.10 A	土師器・須恵器		
S D 4321	0.26	0.10 B	なし		
S D 4322	0.26	0.03 A	土師器		
S D 4323	0.40	0.16 C	土師器・須恵器・木	26	
S D 4324	0.39	0.17 C	土師器・須恵器		
S D 4325	0.38~0.73	0.18 D	土師器・須恵器・黒色土器・種子	33・35	
S D 4326	0.24~0.73	0.10 E	土師器・須恵器	29	
S D 4327	0.38	0.23 A、上部に炭化物の薄層	土師器・須恵器		
S D 4328	0.30	0.07 A	なし		
S D 4329	0.45	0.08 A	土師器・須恵器	32	
S D 4330	0.32	0.03 F	土師器		
S D 4331	0.45	0.26 G	なし		
S D 4332	0.14	0.27 B	土師器・須恵器		
S D 4333	0.20~1.05	0.08 D	土師器・須恵器	30	
S D 4334	0.52~1.05	0.31 E	土師器・須恵器・種子	23・28	
S D 4335	0.30	0.12 D	土師器	34	
S D 4336	0.36	0.25 F	土師器・須恵器		
S D 4337	0.33	0.07 F	なし		
S D 4338	1.13	0.23 H	土師器・須恵器・木	27・36・37	

※ 4区で検出された溝の厚土については、以下の分類により表に示した。

A 2.5G3/1暗オーリープ風色細粒砂混じり粘土質シルト+下位層の小ブロック(~径1cm前後)

B 2.5Y2/1黒色粘土質シルト+下位層のブロック(~径1cm前後) 炭化物・焼土粒を多く含む

C 10Y3/1暗オーリープ風色細粒砂混じり粘土質シルト+下位層の大ブロック(~径3cm前後) 焼土粒

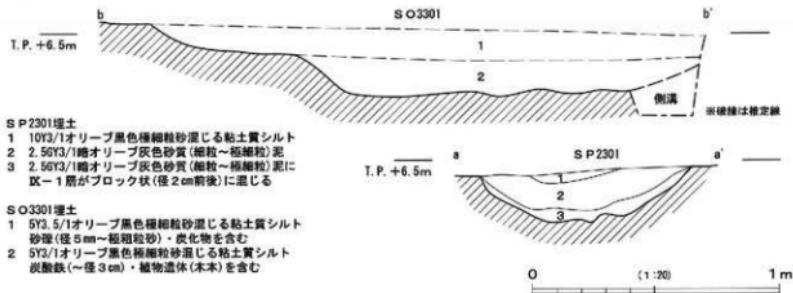
D 5G13.5/1暗オーリープ風色細粒砂混じり粘土質シルト+下位層の小ブロック(~径1cm前後)

E 7.5Y2/1黒色粘土質シルト+下位層の小ブロック(~径1cm前後)

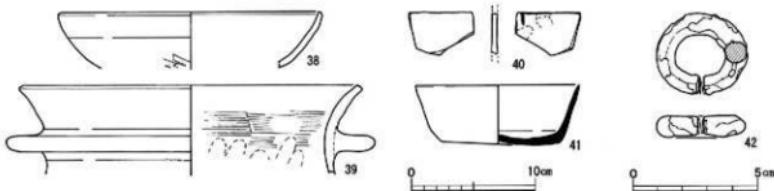
F 5Y4/1暗オーリープ風色粘土質シルト+下位層の大ブロック(~径3cm前後)

G 5Y3/1オーリープ風色細粒砂混じり粘土質シルト+2.5Y3/1黒褐色粘土質シルトのブロック・粒(~径4cm)

H 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 有機質に富む炭酸鉄塊を含む



第13図 S P 2301、S O 3301断面図



第14図 S O 3301出土遺物実測図

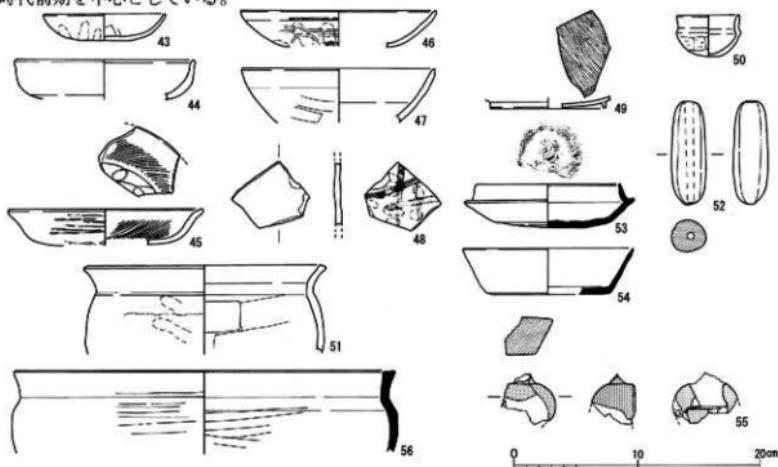
3.3cmを測る。銅下面および口縁部内面に煤の付着が認められる。胎土に角閃石を含む河内産である。40は土師器皿ないしは杯の細片である。裏面に墨書が残るが細片のため内容は不明である。41は須恵器杯Aである。1/2以上が残存している。口径13.2cm、器高5.0cmを測る。42は耳環である。銅芯銀張りである。横幅3.6cm、縦幅3.4cm、幅0.8cm、重さ33.35gを測る。遺構の時期は、出土遺物・層位から奈良時代後期と考えられる。

4) 遺構に伴わない出土遺物

i VII層出土遺物（第15～17図、図版一四～一七）

1区VII層出土遺物(43～55) 13点を図化した。そのうちVII層上部出土が8点(43・46・48・49・50・51・54・55)、VII層下部出土が5点(44・45・47・52・53)である。43は土師器小皿で約1/2が残存している。口径9.8cm、器高2.3cmを測る。44は口縁端部が内傾する土師器杯Cの細片。復元口径14.5cmを測る。45は土師器杯Aの細片で、復元口径15.7cmを測る。外面に水平方向のヘラミガキ、内面に螺旋と放射暗文が施文されている。奈良時代の前半に比定される。46・47は土師器碗Aの細片。47の外面上に煤が付着している。48は杯ないしは碗の底部片で裏面に「井」の字が大きく記されている。49は黒色土器A類碗の底部細片である。内底面には一定方向の密なヘラミガキが施されている。高台は低く幅が薄い貼付け高台で、復元高台径9.2cm、高台高0.5cmを測る。橋本編年(橋本1986)のI期(9世紀後半)にあたる。50は土師器壺Bで約1/2が残存している。

ミニチュア品で口径5.1cm、器高3.4cmを測る。51は土師器壺Bの細片である。52は管状土錐である。完形品で全長8.5cm、幅2.9cm、紐穴幅0.6cmを測る。53は須恵器杯身である。約1/2が残存しており、口径11.6cm、器高3.6cm、受部径13.8cmを測る。田辺編年(田辺1981)のMT85型式(6世紀後半)に比定される。54は須恵器杯Aの細片。丁寧な作りで器壁が薄い特徴を持つ。55是中国産陶器の細片である。残存部分は角部分にあたるもので「L」字状を呈し外面は半円形の丸味を持ち、さらに内側の上下に面を持つ構造から、縦方向に組まれた陶器製の組み物部材の一部であったと推定される。釉色は灰白色で釉薬は薄く施釉されている。胎土は精良で白色を呈する。時期的にはVII層下部出土のものが、古墳時代後期後半から奈良時代前半、VII層上部出土のものが平安時代前期を中心としている。

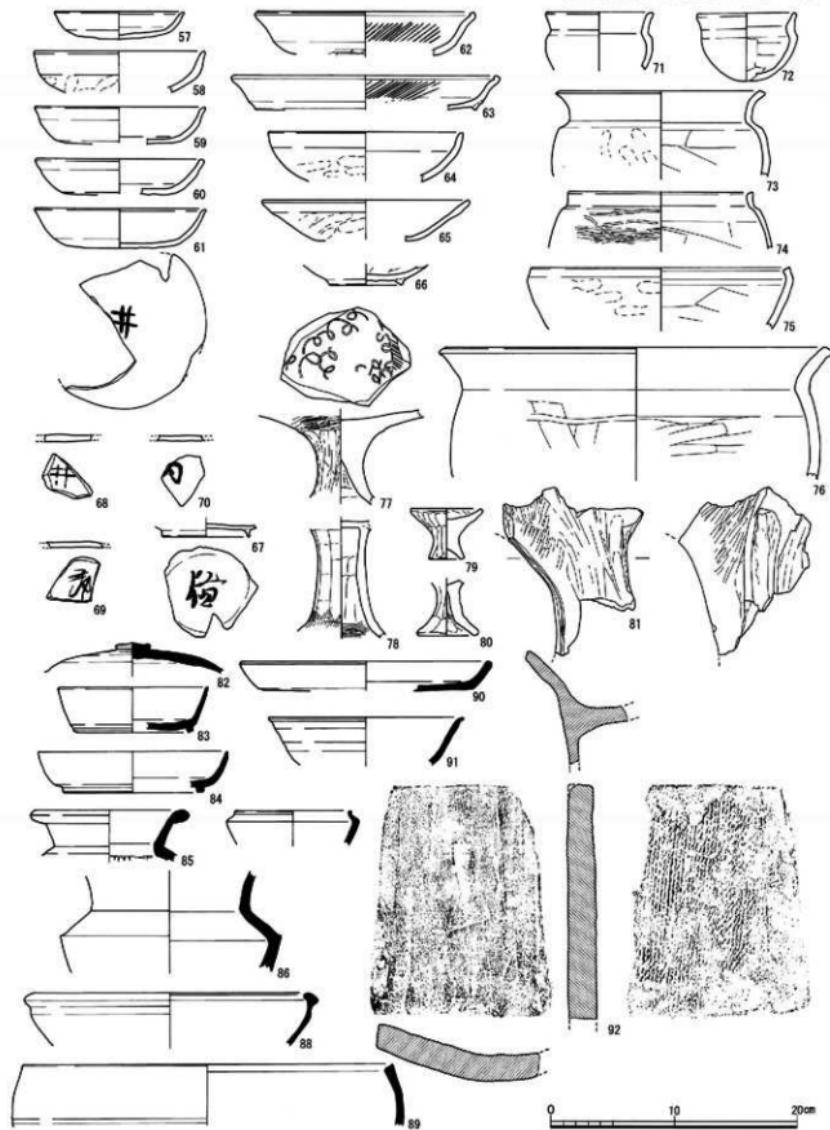


第15図 1区 VII層(43~55)、2区 VII層(56)出土遺物実測図

2区VII層出土遺物(56) 1点(56)を図化した。56はVII層上部から出土している。須恵器壺Cの細片である。復元口径30.8cmを測る。

3区VII層出土遺物(57~94) 38点を図化した。そのうちVII層上部出土のものが58・69・72・82・84・88・91・93・94の9点、下部出土のものが81・90の2点で、それ以外のものについては、VII層内の岐別はできていない。57~61は土師器杯Cである。57が口径10.4cm、器高2.3cm、58~61は口径13.8cm、器高3.3cmを測る。61の底部外面のはば中央に「井」の字が墨書されている。62は土師器杯Aの細片。体部内面に放射暗文が施文されている。63は土師器杯Bの細片。体部内面に放射暗文が施文されている。外面体部に焼が付着している。64は椀Cの細片。復元口径15.7cmを測る。65は椀Aの細片。66・67は土師器椀Bの細片である。67の底部外面に「備」と思われる墨書が記されている。68~70は墨書が記された土師器片である。68が「井」、69、70は判読できない。71~73は土師器壺Bである。そのうち71・72がミニチュア品である。72は2/3が残存しており、口径7.8cm、器高5.7cmを測る。74は口縁部が垂直方向に短く伸びるもので、土師器壺Aの口縁部に似る形態を持つ。丁寧な作りで外面体部は横位の密なヘラミガキが行われている。75

I 久宝寺遺跡第73次調査(K H 2007-73)



第16図 3区 VI層(57~92)出土遺物実測図-1

は土師器鉢Aの細片。復元口径20.9cmを測る。76は土師器壺Aの細片。復元口径30.8cmを測る。器壁の厚いもので、体部内面に炭化物が付着している。

77・78は高杯Aの細片。共に脚部外面を多面体に面取りを行うもので、77の

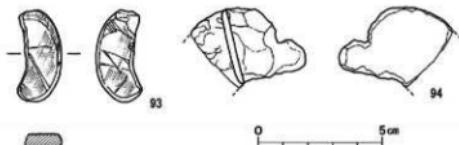
杯部裏面には螺旋と放射状暗文が施文されている。79・80はミニチュアの土師器高杯である。手づくね成形とナデ調整によるもので器表面に凹凸を残す。81は土師器壺の細片である。

82は須恵器杯B蓋の細片。擬宝珠つまみで幅2.8cm、高さ0.6cmを測る。83・84は須恵器杯Bの細片。85は須恵器壺の口縁部である。体部内面に同心円文タキが残る。86は須恵器壺Qの体部細片。87は須恵器壺Eの口縁部細片。88は口縁部が内外に肥厚し「T」の字状を呈する須恵器鉢の口縁部の細片である。京都府亀岡市の篠窯産のもので、伊野近富氏編年(伊野1990)の篠鉢IIとされるもので、10世紀前半とされる4期(G)にあたる。89は須恵器鉢Aの口縁部細片である。復元口径30.0cmを測る。90は須恵器皿Cの細片。復元口径20.0cmを測る。91は灰釉陶器椀の口縁部細片。体部内面に淡灰色の釉が施釉されている。92は一枚作りの平瓦片である。凹面に摸骨痕とやや細かい布目痕、凸面に繩目タキが施されている。胎土には長石を僅かに含む程度の精良な粘土が使用されている。焼成は良好、色調は淡灰黄色である。

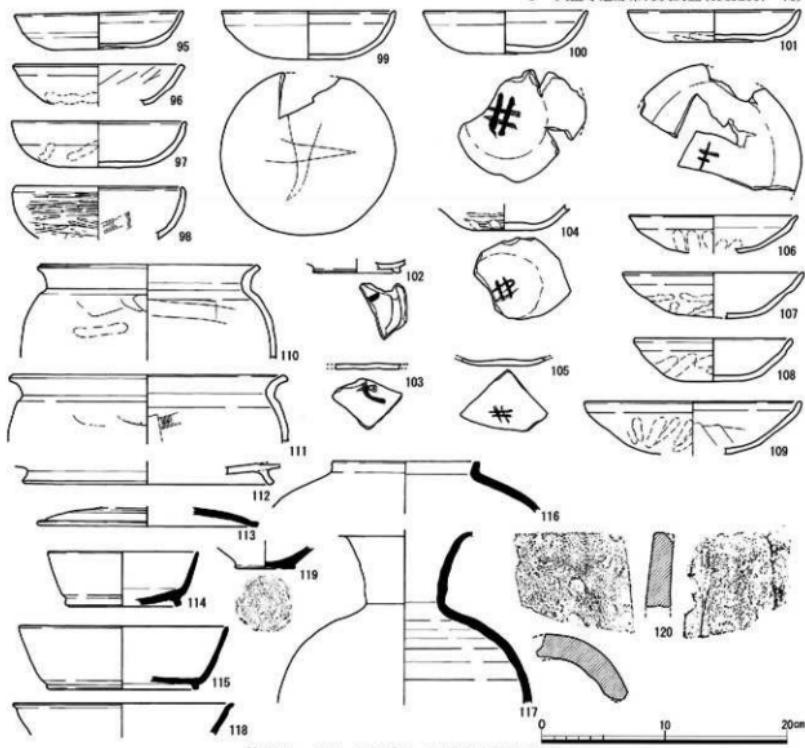
93は勾玉の未成品で一方の先端部分を欠く。残存部分で長さ3.8cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmを測る。石材は滑石である。94は鉄鎌の細片である。残存部分で最大幅3.2cm、厚さ0.3cmを測る。

4区VII層出土遺物(95~120) 26点を図化した。そのうちVII層上部出土のものが114・118、VII層下部出土のものが101・103・97・99・111~113・115~117で、それ以外のものについては、VII層内での棲別はできていない。95~97・99~101は土師器杯Cである。99の底部外面には、焼成後に松葉状の文様を刻書により交差させた構図が施文されている。100には底部外面の「井」の字、101の底部外面には「キ」状の墨書が記されている。その他、墨書き土器としては、102・103が判読不明、104・105の「井」があり、いずれも土器底部外面に墨書きが記されている。98・106~109は土師器椀Aで98が体部外面にヘラミガキを残す奈良時代のもの、それ以外は口縁部のヨコナデ以下に成形時の凹凸を残すもので、平安時代前期に比定される。110・111は土師器壺Bの細片。112は土師器の壺ないしは鉢の高台部の細片である。大型品で高台径19.8cm、高台高1.1cmを測る。

113は須恵器杯B蓋の細片。114・115は須恵器杯Bである。116は須恵器壺Aの口縁部から体部の細片である。体部外面に灰かぶりが認められる。117は須恵器壺で、口縁部から体部中位が残存している。体部外面から口縁部内面に灰かぶりが認められる。焼成は良好堅緻で断面の色調は赤紫色を呈する。118は灰釉陶器椀の細片である。体部内面に淡灰色の薄い釉が施釉されている。119は緑釉陶器の小皿の細片。高台は削り出し高台で、裏面に回転糸切りが認められる。釉色はくすんだ淡緑色で、内面および体部外面の下位付近まで施釉されている。形態からみて京都産で平安時代前期のものと考えられる。120は丸瓦の細片。凹面に細かい単位の布目、凸面に繩目タキが施されている。



第17図 3区 VII層(93・94)出土遺物実測図-2

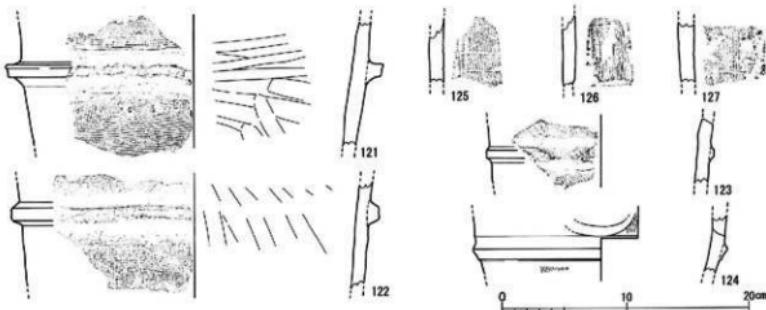


第18図 4区 VII層(95~120)出土遺物実測図

ii 増輪(第19図、図版一八)

埴輪片は、第1面、第2面の遺構埋土、およびVII層から出土しており、出土量は3区に多い。出土状況は細分化して遊離したものが大半であるが、42の耳環の出土を含めて、調査地周辺において古墳が存在したことが想定される。

7点(121~127)を図化した。121~124は円筒埴輪片、125~127は形象埴輪片である。121の器面調整は、内面がヨコナデおよび指ナデ、外面が1次調整のタテハケの後、2次調整として静止痕が斜めに傾くヨコハケ(B d種)が行われている。突帯は突出が高い台形状で端面は僅かに窪んでいる。色調は明赤褐色で、胎土中に0.1~3mm大の石英、長石を多く含む。122の器面調整は、内面に斜め方向の指ナデ、外面に1次調整のタテハケのあと2次調整としてB種ヨコハケが行われている。突帯はやや低い台形状で端面は僅かに窪んでいる。色調は淡灰褐色で外面の一部は須恵質となっている。胎土中に0.1~4mm大の石英、長石を多量含む。123・124は復元径が20cm以下の小型品である。器面調整は2点ともに内面にナデ、外面にタテハケが行われている。突帯はともに突出度が低い台形である。色調はともに淡赤褐色。胎土中に0.1~2mm大の石英、長石を

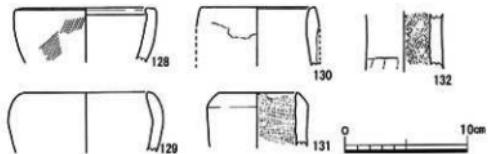


第19図 1・3・4区 VII層出土埴輪類(121~127)実測図

多量に含む。125~127は形象埴輪片であるが細片のため器種は限定できない。3点ともに表面のみに線刻による文様が施文されている。3点ともに淡赤褐色系の色調で、0.1~3mm大の石英、長石が散見される。出土位置は1区から134、3区から132・133・136~138、4区から135が出土しており、出土地層はVII層上部である。時期的には121・122・125~127が5世紀後半、123・124が6世紀前半に比定される。

iii 製塙土器(第20図、図版一八)

製塙土器の破片は、第1面、第2面の遺構埋土、およびVII層から出土しており、出土量は4区が多く、1区が少ない。ほとんどが細片化しており、図化できるものは少ない。5点(128~132)を図化した。5点ともに製塙土器に特有の砂粒を多く含む粗製品で熱を受けている。広瀬和雄氏分類(広瀬1994)の丸底Ⅲ式(8世紀中頃から9世紀前半)に包括されるが個体差が激しく、口縁部の形態では、内側に小さく肥厚する128、内溝して丸味を持つ129、尖り気味に終わる130・131がある。内面の器面調整は、128~130がナデ、131・132が粗い布目痕が残る。色調は128が暗灰色。129~131は淡灰色、132が赤褐色である。5点ともに製塙土器に特有の砂粒を多く含む粗製品で被熱を受けている。出土位置は3区から127~130、4区から131が出土しており、出土地層はVII層上部である。



第20図 3・4区 VII層出土製塙土器(128~132)実測図

参考文献

◆調査地周辺の調査について

- 西村公助 1989「6久宝寺遺跡(第3次調査)」『八尾市文化財調査研究年報 昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会

◆出土遺物の形式・編年・時期概念等で参考とした文献について

- 奈良国立文化財研究所 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第31冊

- ・古代の土器研究会編 1992「古代の土器 I 都域の土器集成」
- ・古代の土器研究会編 1993「古代の土器 II 都域の土器集成」
- ・佐藤 隆 1992「第2節 平安時代における長原遺跡の動向 Ⅱ)長原遺跡における平安時代の土器編年」『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告V 市営長吉長原住宅建設に伴う発掘調査報告書 後編』(財)大阪市文化財協会
- ・田辺昭三 1981「須恵器大成」角川書店
- ・橋本久和 1986「畿内の黒色土器(1)」「中世土器の基礎研究II」日本中世土器研究
- ・一瀬和夫 1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」「大水川改修にともなう発掘調査概要V」大阪府教育委員会
- ・伊野近富 1990「縄文窓型と陶邑窓窓型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報 第37号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- ・高橋照彦 1995「3. 縄釉陶器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編
- ・石井清司 1995「5. 縄文須恵器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編
- ・広瀬和雄 1994「6 大阪府」「日本土器製塗研究」青木書店

第3章まとめ

調査の結果、奈良・平安時代を中心とする遺構・遺物が検出された。

第1面で平安時代前期から中世、第2面で平安時代前期、第3面で奈良時代後期から平安時代前期の遺構・遺物を検出し、平安時代前期の整地層・耕作土であるⅦ層から土器片を主体とする遺物を採取した。出土遺物量はコンテナ15箱である。

2区～4区の第3面では、奈良時代後期の溝状の落込み(S 03301)、奈良時代後期から平安時代前期にかけての溝群が検出された。平安時代前期の溝は耕作溝で、水田を主体とする生産域であったことが確認できた。Ⅶ層から出土した遺物は奈良時代後半のものが量的に多く、奈良時代後半には生産域以外の土地利用がなされていた可能性がある。しかし、居住域や墓域に伴う遺構が検出されていないため、明確にすることはできない。

1区の第1面で検出された穴は柱穴、第2面で検出された小穴は建物に伴うものと見られる焼土塊で充填されており、調査地の北東端は宅地であったと考えられる。3区の第1面で検出された幅の広い3条の溝は畝間溝で、畑地であったと考えられる。

平安時代前期の中で、水田を主体とする景観から、宅地・畑地・水田へと景観の変遷があったと推測される。

ところで、第3面の遺構埋土・Ⅶ層から墨書き土器15点・線刻土器5点が出土している。なかでも底部外面・内面に「丼」あるいは丼の字形の記号(丼形文状のもの。以下「#」と記す)が墨書きされたものが7点、同じく線刻されたものが3点、松葉を重ねたような形の記号が線刻されたものが1点、「×」状のもの1点が出土している。奈良時代後半から平安時代前期と思われるものである。

「丼」「#」の墨書き・線刻については、丼上などの人名、また葛井寺など地名の一部(略表記)

であるという解釈、あるいは井戸祭祀として使われたものと解釈するなど、つまりは文字（漢字）の「井」として報告される場合が多い。しかし、一方では記号や符号として扱われる場合もある。他の記号の表記との共伴事例や、文字としての「井」にしては、線を井桁状に交差させたような表記（#）である事例も見受けられるからである。特に近年では、平川南氏の研究（註1）により、文字でなく記号と見られる「#」は「九字文」（註2）、つまり道教や修驗道などで使用する魔除けの符号「ドーマン」の略形ではないか、という解釈が提起されている。伊勢・志摩の海女が、海の魔物にさらわれない「まじない」として身につける道具に「ドーマン（九字文）」を刻むが、中には「#」と略記する例があり、同じく伊勢のしめ縄の蘇民将来札の「九字文」を「#」にする民俗事例（註3）、発掘事例では、特に関東の事例で、九字文と並び魔除けの符号として知られる星形の清明紋（セーマン）と、「#」を表記した土器がセットで出土する例（註4）、また出土した墨書き土器のうち六割が「#」と記された事例（註5）、あるいは人物の名前の上に、別の書体で「#」を書き足しているかのような事例（註6）があり、「魔除け記号」と理解できる可能性もあるという解釈である。

もちろん、すべての墨書き・線刻土器「#」が、魔除けの土器、魔除けの符号（呪符）とはならないことは言うまでもない。しかし可能性が無いわけでもなく、少なくとも単独表記の場合、文字の「井」として報告するには慎重を期す必要がある。なお、当遺跡近辺では『亀井北遺跡（その3）』（註6）で、単独表記の「井」の墨書き土器5点（自然流路より出土の墨書き土器7点のうち、8世紀初頭前後か。）の例がある。

【註】

- 註1 平川南 1991「墨書き土器とその字形—古代村落における文字の実相」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集、平川南 2000「墨書き土器の研究」再掲）
- 註2 九字とは、九字（臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前の9字）の呪文を唱え、縦横順番に、格子状に手印を切ることによって、悪鬼怨靈を遠ざけ災いから身を守ると信じられてきた密教や修驗道の魔除け術。九字文はその印文。
- 註3 平川南 同上、野村史郎 1990「三重県の海村の正月行事と祭り」（『年報 海と人間』17号、海の博物館）
- 註4 千葉県・花前遺跡群（千葉県文化財センター 1984『常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書II』、1985『同III』）
- 註5 山形県・生石遺跡（山形県教育委員会 1987『生石2遺跡発掘調査報告書(3)』）
- 註6 千葉県・作畠遺跡（山武考古学研究所 1986『千葉県東金市作畠遺跡発掘調査報告書』）
- 註7 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1986『亀井北（その3）』

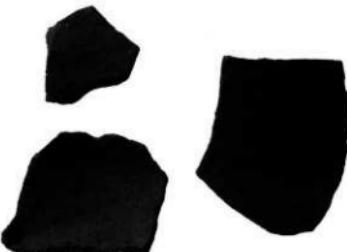
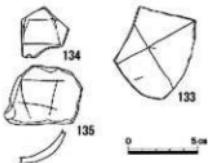


写真1 「#」？「×」？の線刻土器（VII層出土）



第21図 「#」？「×」？の
線刻土器（VII層出土133～135）



参考
133の反対面（煤付着部に#状に縦横線が抜き文字のように見えるが、当初のものは不明。）

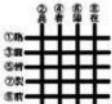
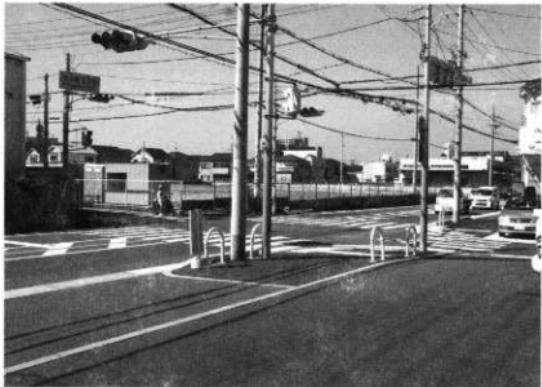


図 版



調査地全景(北東から)



3区 機械掘削状況(南から)



2区 人力掘削状況(南から)



1区 東壁VII層(西から)



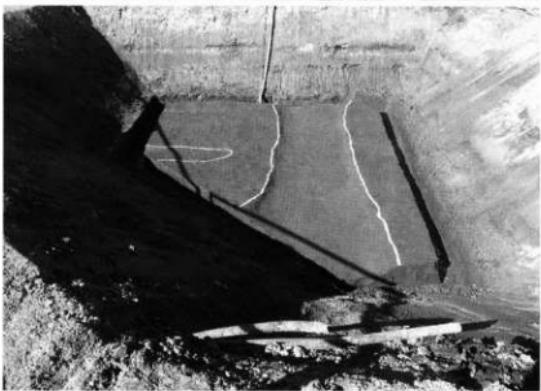
3区 北壁I層～VI層上部
(南西から)



4区 北壁西部(南西から)



1区 第1面(東から)



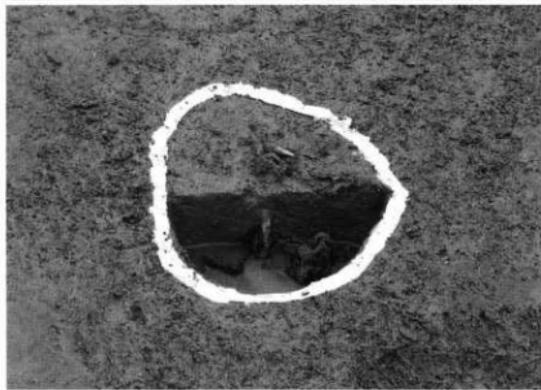
2区 第1面(東から)



3区 第1面(北から)



4区 第1面(北から)



1区 SP1101半截(南から)



1区 SP1101断割り(南から)





1区 第2面(南東から)



3区 第2面(南から)



1区 SP1201断割り(南から)



2区 第3面(南から)



3区 第3面(北から)



4区 第3面(北から)



4区 北部第3面(東から)



2区 SP2301断面(北東から)



3区 SD3301杭列(北から)





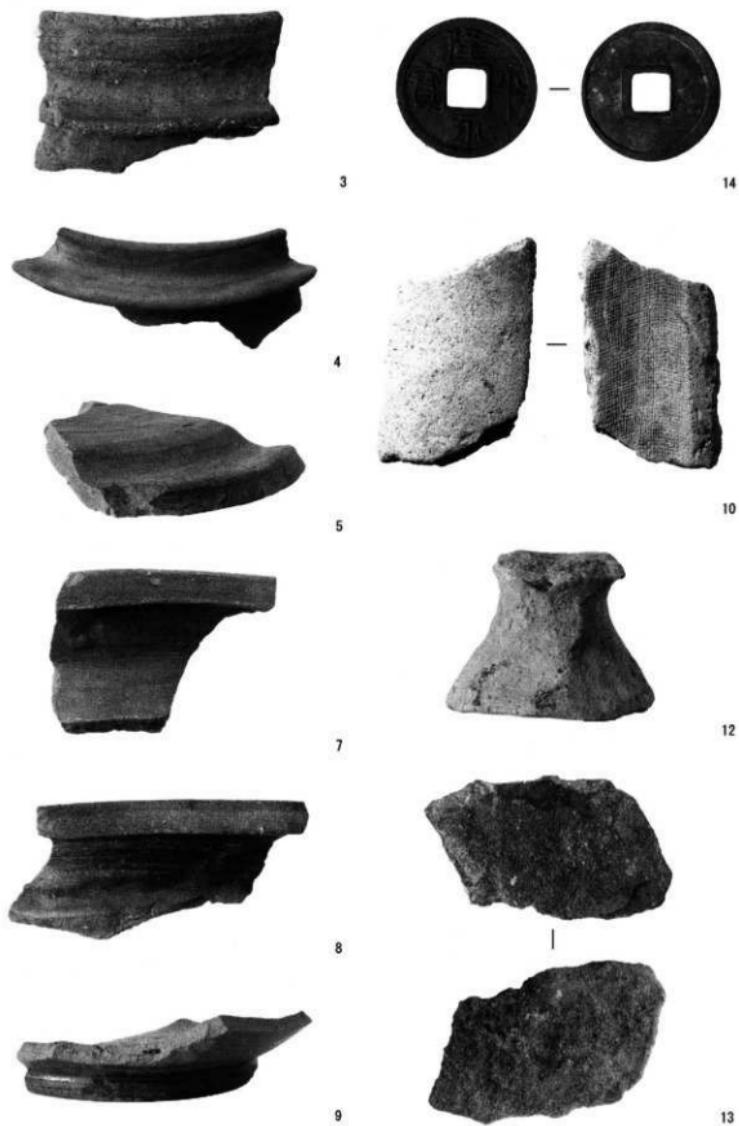
4区 SP4302銭貨出土状況
(上が北)



4区 SP4302断面(北から)



4区 SD4333・SD4334断面
(西から)



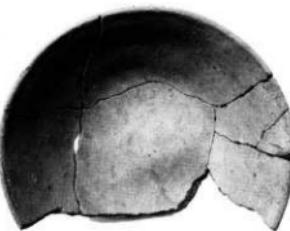
SD1102(3・8~10)、SD4103(4)、SD3105(5)、SD1101(7)、SD3202(12・13)、SP4302(14)出土遺物



18



19



29



15



32

S D3301(15・18・19)、S D4326(29)、S D4329(32)出土遺物



39



40



41



42

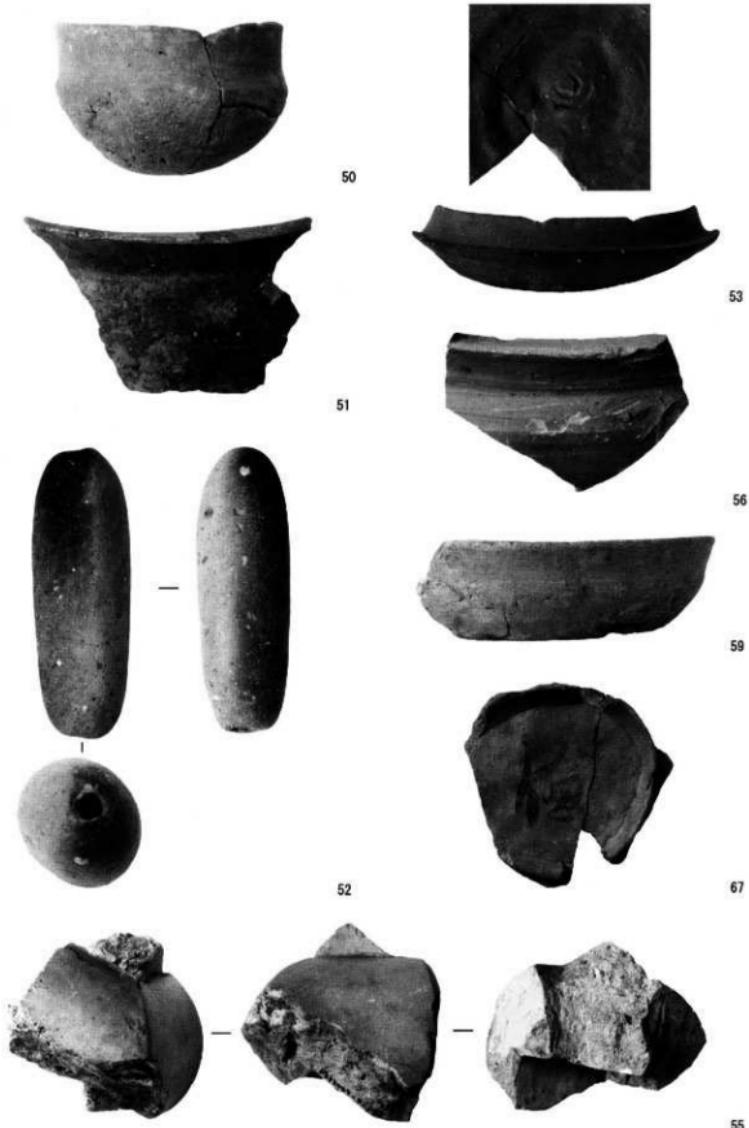
30

33

37

48

S D 4333(30)、S D 4325(33)、S D 4338(37)、S O 3301(39~42)、1区VII層(48)出土遺物



1区VII層(50~53・55)、2区VI層(56)、3区VII層(59・67)出土遺物



68

69

70



71

77



72



73



74



75



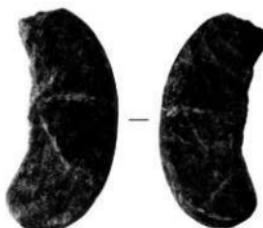
76

76

3区VII層出土遺物



92



93



94



96

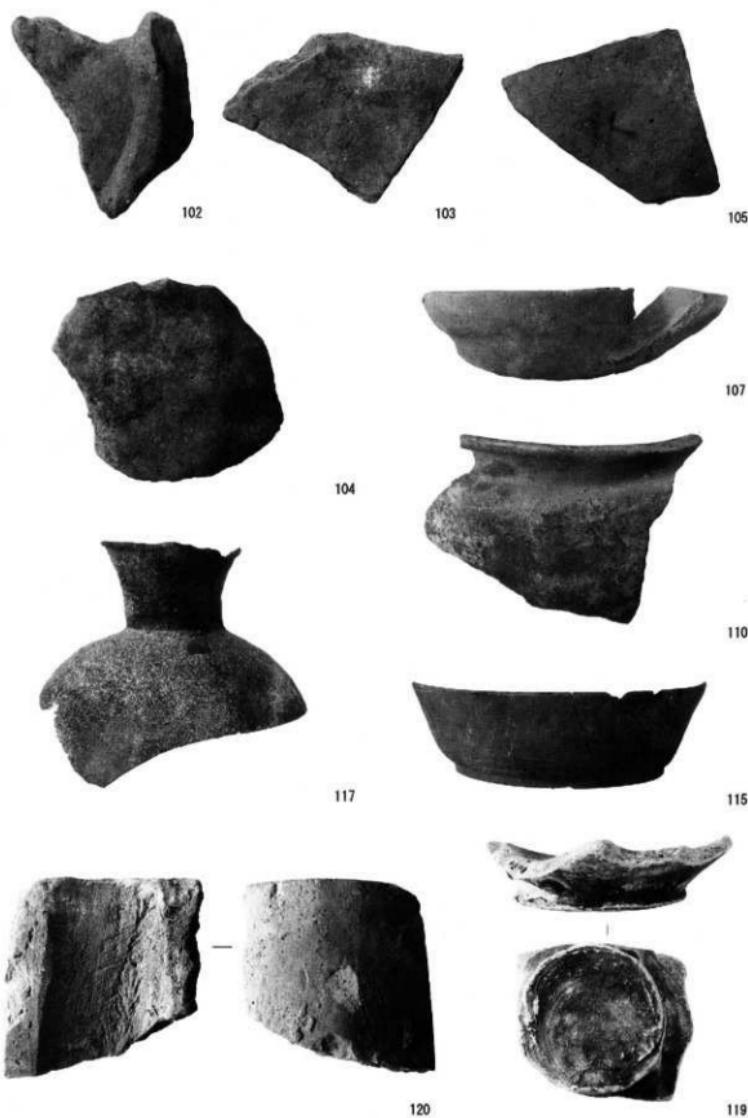


99



100

3区VI層(92~94)、4区VII層(99~101)出土遺物



4区VI層出土遺物



121



122



123



124



125



126



127



131



132

1·3·4区VI层埴輪類(121~127)、3·4区VI层製塙土器(131·132)出土遺物

II 小阪合遺跡第32次調査(K S 96-32)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市青山町四丁目3番16号で実施した変電設備増設に伴う小阪合遺跡第32次調査(K S 96-32)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一・古川晴久が担当した。
1. 現地調査は、平成8年7月1日に着手し、同年7月24日に終了した(実働15日)。調査面積は約200m²である。
1. 現地調査には、赤澤茂美・岸田靖子・辻野優子・西田真紀・八田雅美・村井俊子・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、以下が参加し、現地調査終了後に着手して平成21年2月をもって終了した。
遺物復元 - 岩本順子・田島和恵・都築聰子
遺物実測 - 古川・伊藤静江・飯塚直世・岩沢玲子・加藤邦枝・北原清子・芝崎和美・竹田貴子・田島・田島宣子・永井律子・中野一博・中村百合・村井俊子・村田知子・山内・吉川一栄・若林久美子・若林節子・和田直樹。
図面整理 - 西出一樹。
遺物トレース - 市森千恵子。
遺構デジタルトレース - 鈴木裕治・坪田。
1. 本書の作成にあたっては、遺物挿図レイアウト、及び遺物の文章執筆、遺物図版作成を主に米井友美(当研究会嘱託)が、遺物写真撮影を木村健明(当研究会嘱託)・坪田・古川が行い、それ以外の文章執筆及び全体の編集を坪田が行った。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	25
第2章 調査概要.....	26
第1節 調査方法.....	26
第2節 基本層序.....	26
第3節 検出遺構と出土遺物.....	27
第3章 まとめ.....	50

挿図目次

第1図	調査地位置図	25
第2図	地区割図	26
第3図	基本層序	27
第4図	第1面平面図	28
第5図	第2面平面図	29
第6図	S B 201平断面図	30
第7図	S B 201出土遺物	30
第8図	S E 201出土遺物①	31
第9図	S E 201平断面図	32
第10図	S E 201出土遺物②	33
第11図	S E 201出土遺物③	34
第12図	S E 201出土遺物④	35
第13図	S E 202平断面図	36
第14図	S E 202出土遺物	36
第15図	S E 203平断面図	37
第16図	S E 203出土遺物	37
第17図	S E 204平断面図	38
第18図	S E 204出土遺物	39
第19図	S K 205出土遺物	40
第20図	S D 201西壁断面図	40
第21図	S D 201出土遺物①	41
第22図	S D 201出土遺物②	42
第23図	S P 206・209・216・246出土遺物	45
第24図	S O 201出土遺物	45
第25図	S O 202出土遺物	46
第26図	S W 201出土遺物①	46
第27図	S W 201出土遺物②	47
第28図	S W 202出土遺物	48
第29図	包含層出土遺物	49

表目次

表1	第2面ピット一覧表	44
----	-----------	----

図版目次

- 図版 一 1区第1面全景(南から)
3区第1面全景(北東から) 2区第2面全景(南東から) 3区第2面全景(北東から)
- 図版 二 1区第1面全景(南から)
S B 201(西から) S P 202(北から)
- 図版 三 S E 201全景(北から) S E 201底部遺物出土状況(上が北) S E 201井戸枠(南から)
- 図版 四 S E 202(南から) S E 202北壁
S E 203(北から) S E 203北壁
S E 204(北から) S E 204西壁
- 図版 五 S P 216(東から) S W 201(東から) S W 202(東から)
- 図版 六 出土遺物 S P 201・203、S E 201
- 図版 七 出土遺物 S E 201・202
- 図版 八 出土遺物 S E 201井戸枠
- 図版 九 出土遺物 S E 204
- 図版一〇 出土遺物 S K 205、S D 201
- 図版一一 出土遺物 S D 201
- 図版一二 出土遺物 S D 201、S P 206・209・216・246、S O 201
- 図版一三 出土遺物 S O 201・202、S W 201
- 図版一四 出土遺物 S W 201
- 図版一五 出土遺物 S W 201
- 図版一六 出土遺物 S W 201・202
- 図版一七 出土遺物 S W 202、第6層、側溝

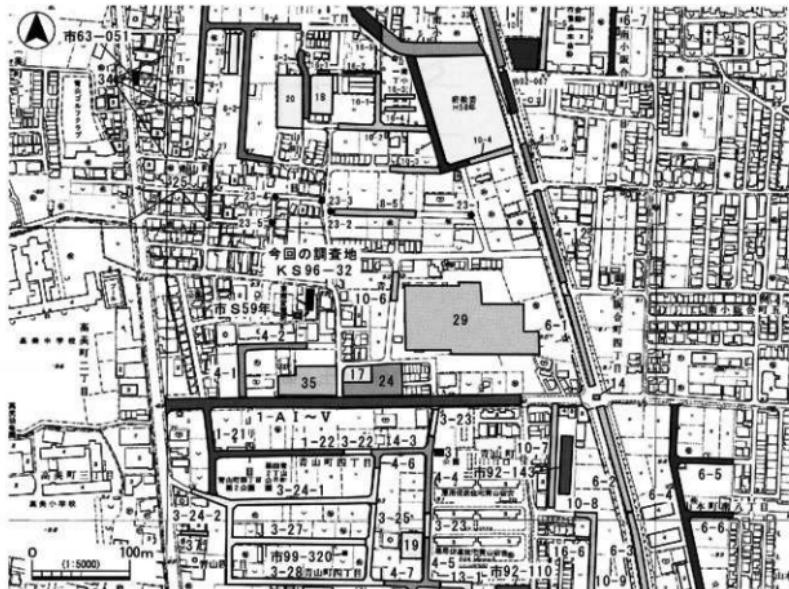
第1章 はじめに

小阪合遺跡は八尾市のはば中央に位置し、現在の行政区画では小阪合町一・二丁目、南小阪合町一・二・四丁目、青山町一～五丁目、若草町、山本町南七・八丁目がその範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上で東郷遺跡・成法寺遺跡・矢作遺跡・中田遺跡と接している。

当遺跡発見の契機は昭和30(1955)年に遡り、若草町において実施された大阪府住宅供給公社建設工事の際に、古墳時代の遺物が出土したことから認識された遺跡である。

当遺跡内では、昭和57年以降の八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業を始めとし、各種公共事業や民間開発に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により活発に実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回の調査地である関西電力㈱東郷変電所敷地内においては、調査区南西に隣接する鉄塔基礎部分で、昭和59年度に八尾市教育委員会によって発掘調査が行われており、古墳時代前期～中期、奈良時代の遺構・遺物が検出されている。また付近の畠からは古墳時代後半の石製模造玉類が出土している。



第1図 調査地位位置図

第2章 調査概要

第1節 調査方法

今回の調査は変電設備増設に伴う調査で、当調査研究会における小阪合遺跡内での第32次調査(KS 96-32)にあたる。

調査区は南北に長い長方形(約22×8m)を呈する建物部分(1区)と、不整形なトレンチ状の管路部分(2・3区)についてで、3区・2区→1区の順に調査を実施した。

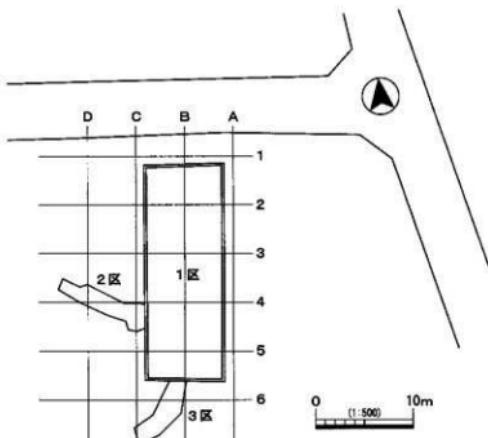
調査にあたっては、市教委による埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表下約1.0mまでを機械掘削とし、以下約0.3mを人力掘削により実施した。なお2区については、東郷変電所の旧鉄塔の基礎による擾乱が大部分を占めている。

地区割は1区の平面形に合わせて5m方眼を任意に設定した。そして南北ラインにアルファベット(東からA~D)、東西ラインに数字(北から1~6)を冠し、5m四方の地区名は北東交点のポイントに代表させた。なお1/2500地図との合成によると、この南北ラインは座標北から東に約7.1度振っている。

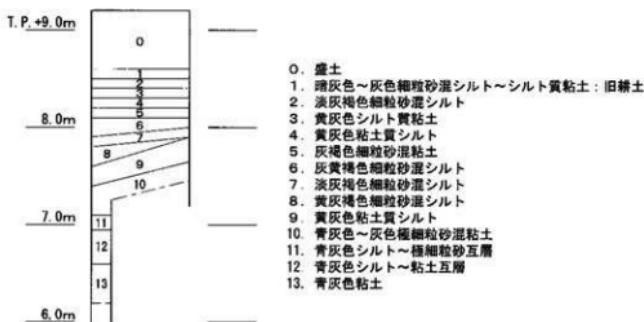
調査で使用した標高値は、当時調査地の南に隣接していた八尾市立保健センター内に所在した仮B.M.(T.P.+9.441m)より運んだ。

第2節 基本層序

調査地の現地表面は約T.P.+9.2mを測る。第0層は盛土、第1層は旧耕土である。第2~4層は近世の整地層と捉えられ、2区では層厚約0.4mの均質な黄灰色粘土質シルトとなっている。第5層も同様の層と思われるが、土壤化しており中世頃の包含層の可能性がある。第6層は古墳時代中期~後期を主として奈良時代までの土器が多く含む包含層である。第6層上面が第1面で、約T.P.+8.1mを測る。第7層以下は南から北に、あるいは東から西に下がる傾斜堆積と考えられ、第10層上面を見ると4A区と2B区で標高差約0.3mを測る。第7~9層は弥生時代後期~古墳時代初頭(庄内式期)の土器を含んでいる。第7層上面が第2面で、T.P.+7.9~8.0mを測る。10層以下はシルト~粘土を主体とする互層状の水成層である。



第2図 地区割図



第3図 基本層序

第3節 検出遺構と出土遺物

調査では第1・2面の2面を確認した。

〈第1面〉

1区・3区の第6層上面で溝15条(S D101~115)を検出した。

溝は概ね東西方向に平行して伸びるもので、規模は最小のS D115が幅約15cm・深さ約3cm、最大のS D101が幅1.2m以上・深さ約12cmを測る。埋土はいずれも暗黄灰色細粒砂混シルト～極細粒砂である。これらの遺構は農耕に関連するものと考えられる。1区中央のS D106は西部で北に直角に曲がる状況であるが、北側が島畑と捉えられよう。溝からは近世までの土器・陶磁器が出土しており、第1面の時期は中世～近世頃と考えられる。

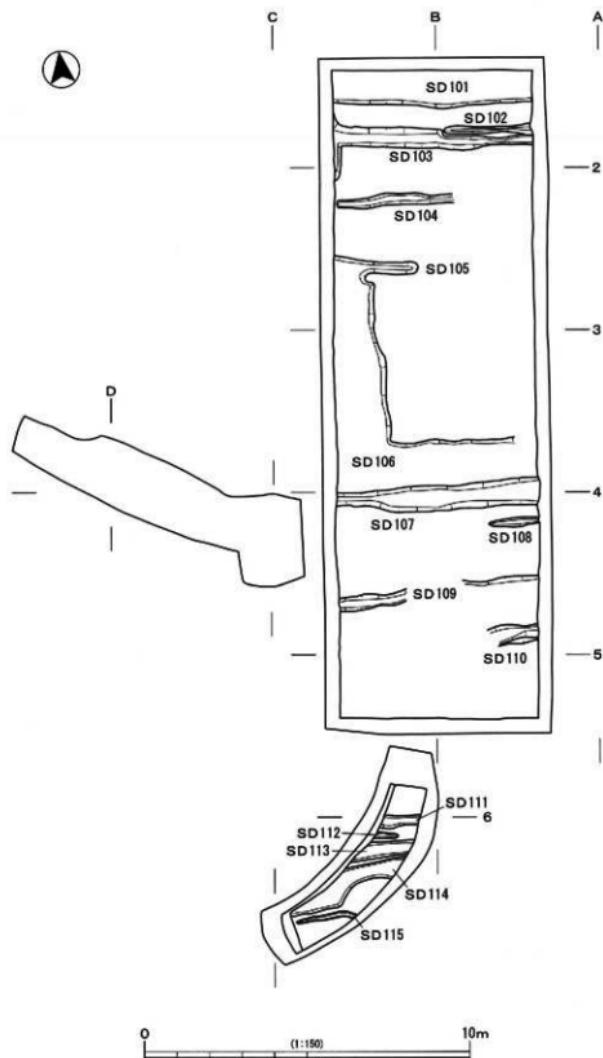
〈第2面〉

T.P. +7.9~8.0mを測る第7層上面で、掘立柱建物1棟(S B201)、井戸4基(S E201~204)、土坑5基(S K201~205)、溝5条(S D201~205)、ピット48個(S P201~248)、落ち込み2基(S O201・202)を検出した。これらの遺構の時期は古墳時代前期後半～平安時代前半に比定される。また第7層中では弥生時代後期末に比定される土器集積(S W201・202)を検出した。

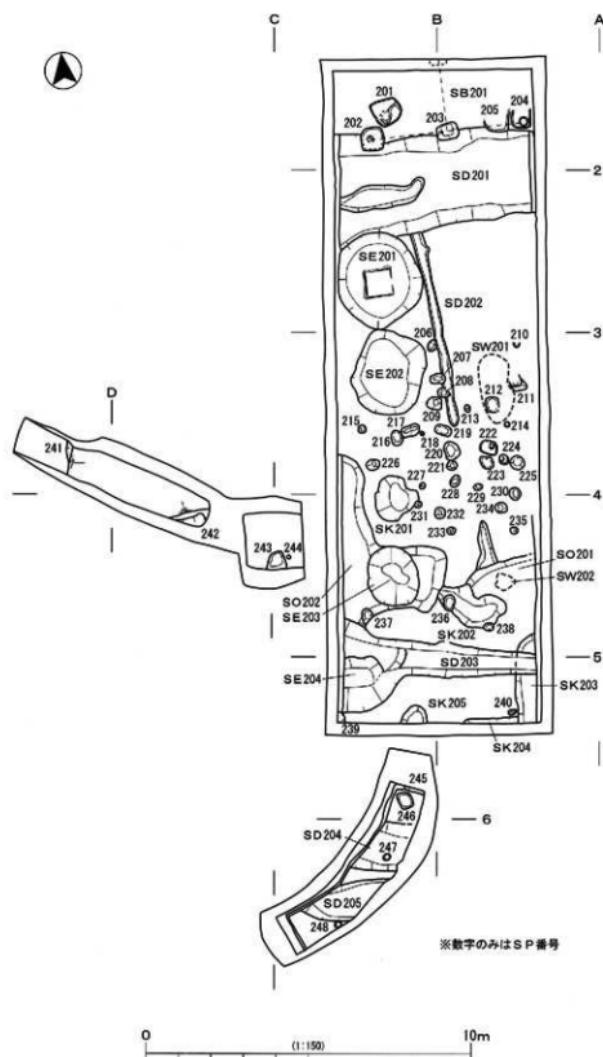
S B201

1A・B区で建物の南辺を検出したもので、S P202~204で構成される。主軸は方位に沿っている。東西二間以上を測り、またBライン上の北壁内にピットが見られることから、総柱の建物と考えられる。ピットは掘方平面形が一辺50~70cmの方形を呈するもので、深さ約40cmを測り、柱間は約2.4mを測る。S P202には柱根が遺存しているが、S P203・204は柱を抜き取った後に埋められたようで、S P204からは土器片や炭・焼土が多量に検出されている。建物が火災に遭ったものと推察される。遺物はS P202からの1~3、S P204からの4~20を図化した。

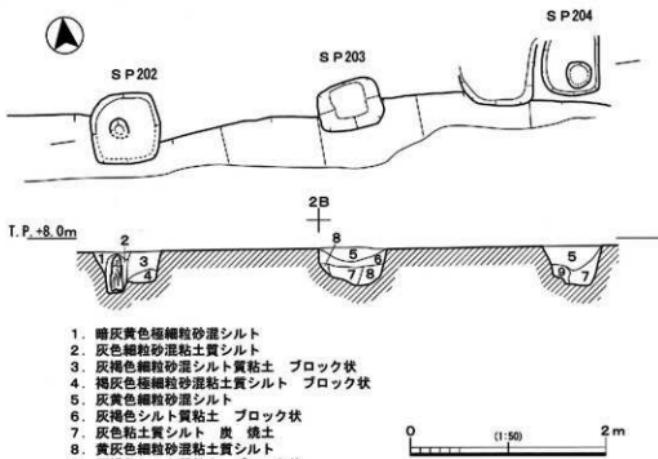
S P202-1・2は土師器杯と考えられる。2は細片のため全形は不明であるが、底部と考えられ、底面にあたる外面に3本の直線が墨書きで描かれている。3は須恵器杯身で、平底で高台が付く。7世紀後半～8世紀初頭に比定できる。



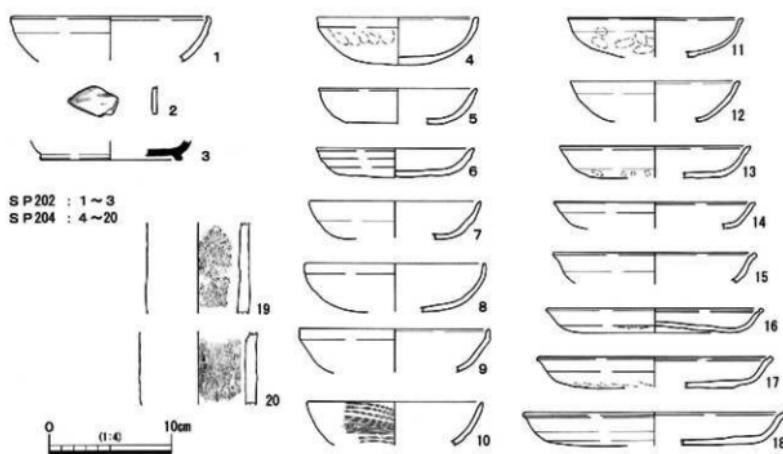
第4図 第1面平面図



第5図 第2面平面図



第6図 S B201断面図



第7図 S B201出土遺物

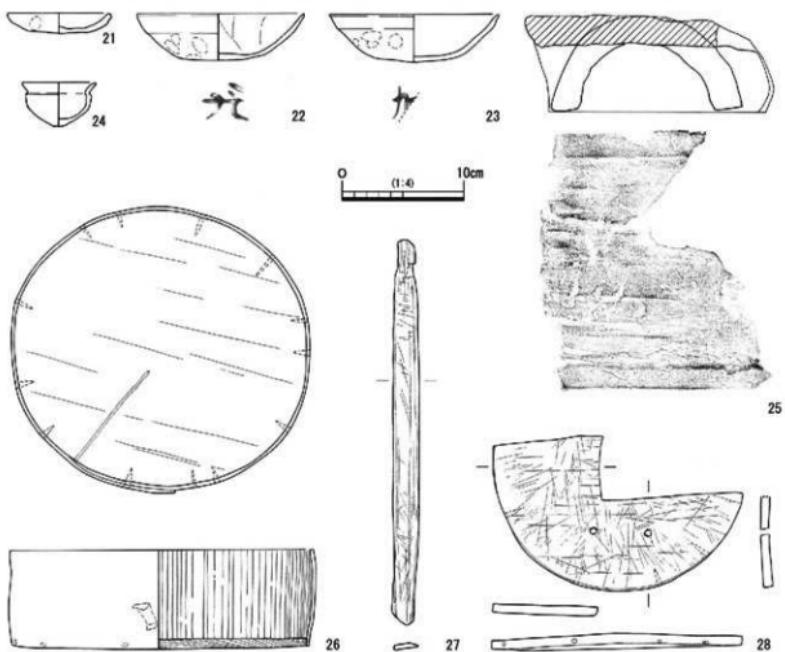
SP204-4~12は土師器杯である。外面調整にミガキが施される10以外は、ナデとユビオサエによって調整されている。13~18は土師器皿で、平坦な底面を持ち、外反する口縁を持つ。19・20は製塙土器と考えられる。外面は粗いナデで調整されており、内面では布目圧痕が残る。時期についてはいずれも7世紀末~8世紀と考えられる。

S E201

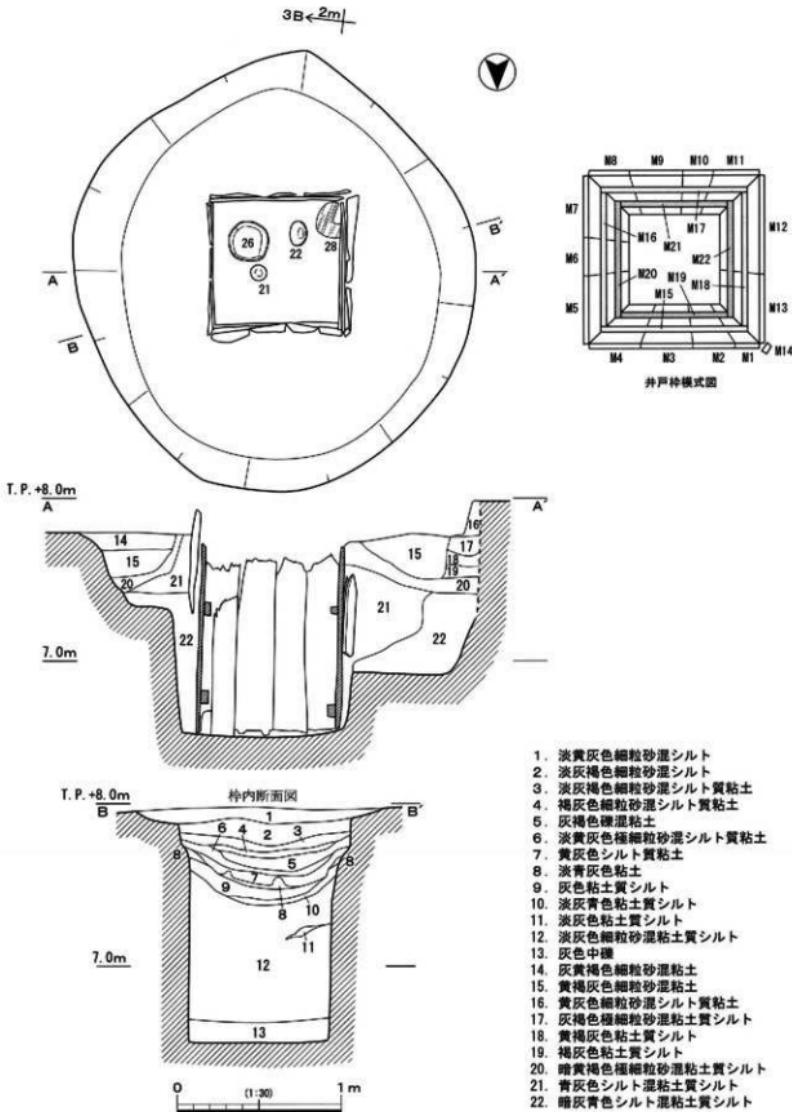
2B区に位置する井戸で、井戸枠の構造はいわゆる方形縦板組横棟どめ井戸に分類される。掘方平面形は直径約2.5mのほぼ円形を呈し、断面は二段掘りで、検出面からの深さは約1.45mを測る。井戸枠は一辺約0.85mを測り、最下段全周と、一部二段目が遺存している。各辺は2~4枚の縦板で構成され、補強のためか部分的に2枚重ねとなっている。板は転用材も使用されており、端部を加工したものや枘穴を有するものが認められる。横棟は二段が遺存し、角部は目違い組である。

枠内埋土は、上部は灰褐色~黄灰色系の砂混シルトが皿状に堆積し、下部は灰色~淡灰色系の粘土質シルトである。また最下部には湧水の濾過施設である層厚約10cmを測る中疊層がみられる。掘方埋土は上部が黄灰褐色系粘土質シルト、下部が暗青灰色系粘土質シルトで、いずれもプロック状を呈する。なお底部は基本層序第13層の青灰色粘土に至っており、調査中の湧水は少量であった。

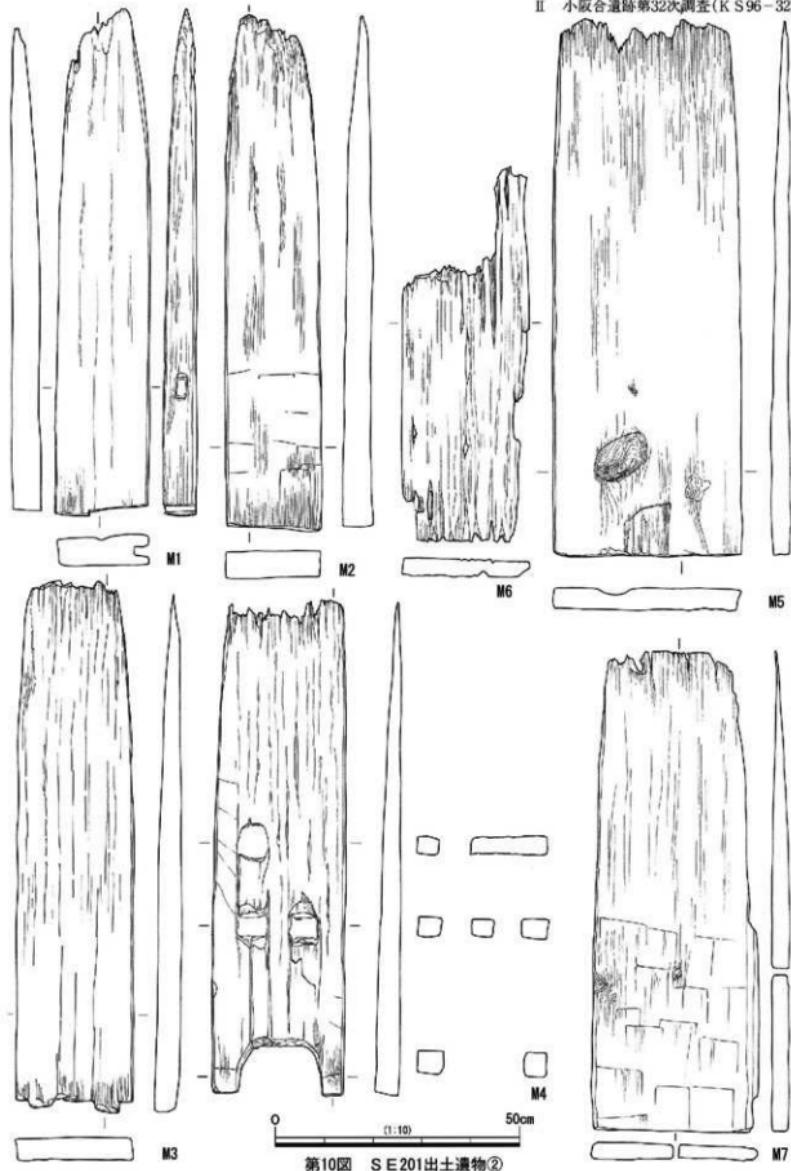
出土遺物には土器(土師器・須恵器)、瓦、木製品(曲物・蓋板・他)があり、21~28を図化した。21は土師器皿で、内面に筋状の煤が付着していることから、灯明皿と思われる。22・23は土師器碗で、2点とも調整に内面ナデ、外面はヨコナデと体部中位以下でユビオサエが施され、外面の



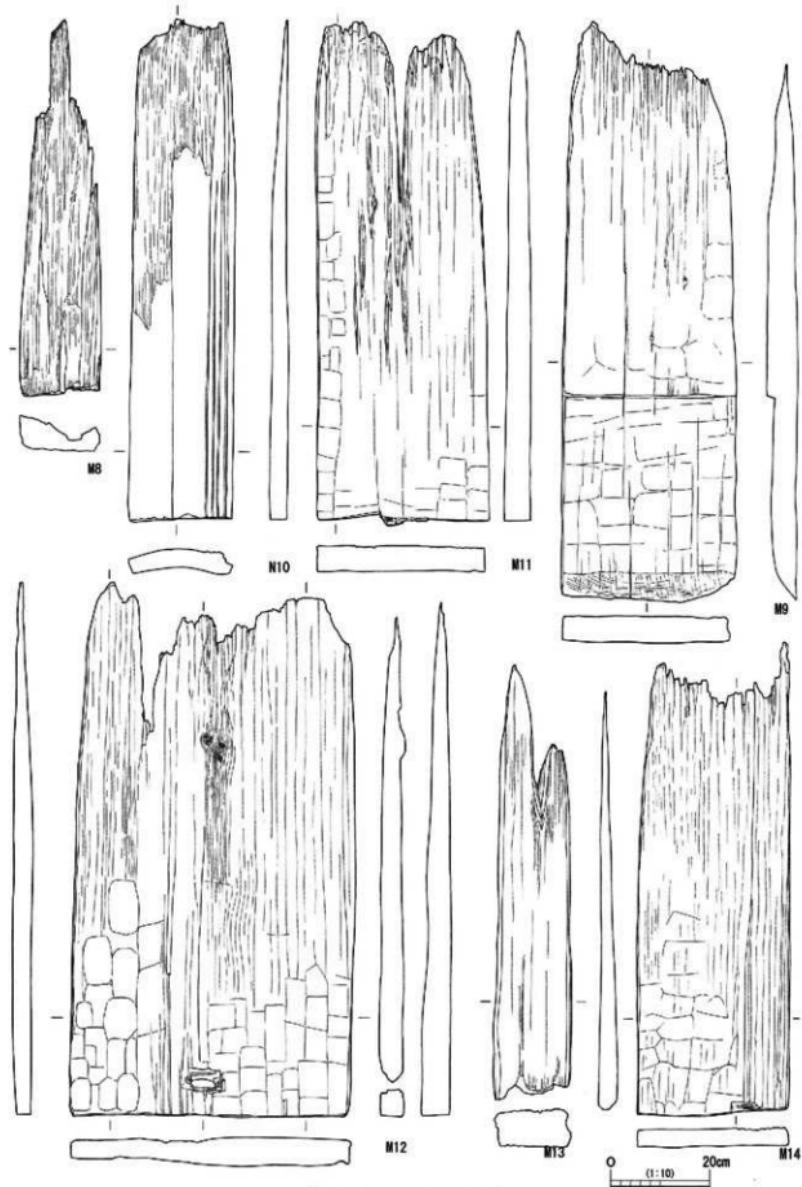
第8図 S E201出土遺物①



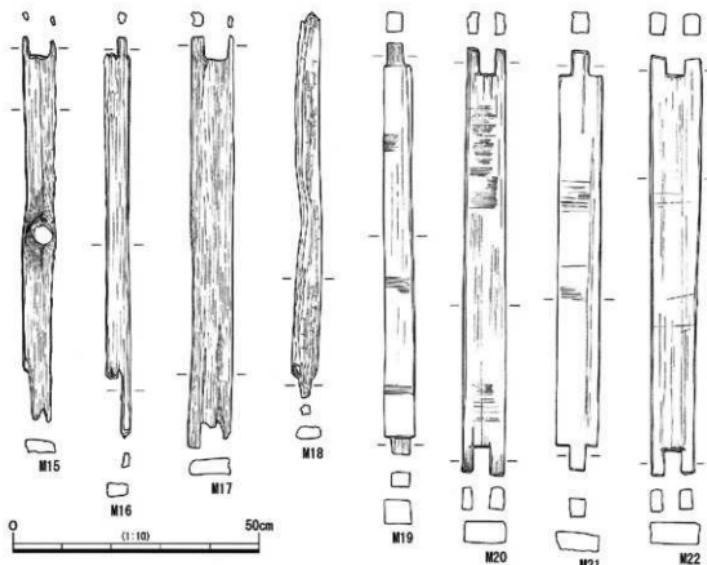
第9図 S E201平断面図



第10図 S E 201出土遺物②



第11図 S E 201出土遺物③



第12図 SE 201出土遺物④

底部中央に墨書で文字が描かれている。22は「π」字に似た形状、23は欠損のため全形は不明であるが「九」に似た文字が描かれている。21~23は8世紀末に比定できる。24は土師器のミニチュア壺で、8世紀後半に比定できる。25は丸瓦で、凹面に布目が確認できるが、凸面の一部は剥離し、両端を欠く。詳細な時期は不明であるが、8世紀末ごろに比定できよう。木製品は26~28の3点が出土している。26は釘結合曲物である。曲物内面では綴方向の切り込みが施され、一部では綴合わせの樹皮が残る。27は棒状の細長い板で、片方の端がやや窄まって節をもち、断面が三角形に近い形状である。絹巻具や布巻具などの機織の一部と考えられるが、詳細は不明である。28は中央付近で割れており、一部が木目の垂直方向に切り込まれて直線側が「L」字状を呈する円板である。中央に大きめの方形の孔をもつ円形の蓋板と考えられる。板中央よりやや外側にツマミを縛りつけたと思われる径0.6cmの円形の穴が2か所穿たれている。表面には細かい傷が多くみられ、側面の数か所に釘痕と思われる孔が穿たれていますことから、曲物底板の転用品と思われる。これらの内24・25が掘方出土、他は枠内底部の出土である。底部出土遺物の時期から、当井戸は8世紀末頃まで機能していたと考えられる。

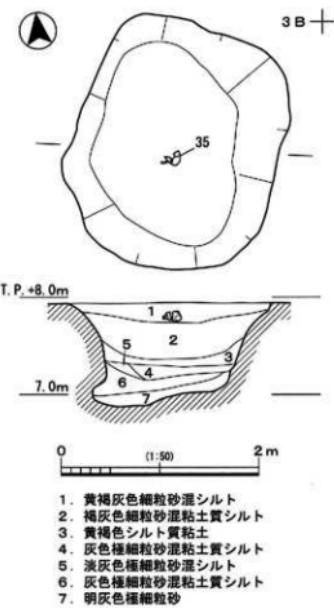
S E 202

3B区に位置し、素掘り井戸と考えられる。掘方平面形は約2.5×2.0mの隅丸長方形に近いもので、断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは約1.05mを測る。埋土は上部が褐灰色系細粒砂混シルト、下部は灰色系極細粒砂混粘質シルトで、最下部が極細粒砂層である。遺物は古墳時代中期末頃までの土器の他、石製品が出土しており、29~37を図化した。

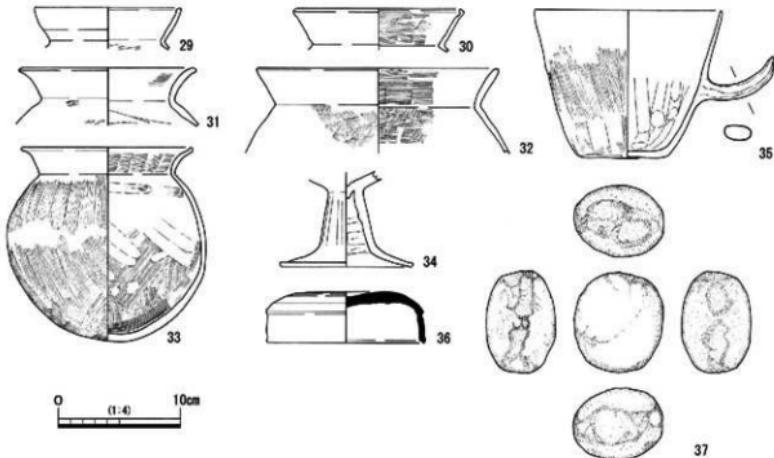
29~33は土師器壺で、29~32は口縁部～体部、33は口縁部～底部が残存する。29・30は布留式壺で、口縁部は肥厚し、頸部の屈曲はやや鋭い。3世紀末～4世紀初(布留式古相)に比定される。31は磨耗のため調整が不明瞭であるが、胎土は粗く角閃石を多く含み、弥生時代後期の様式を残すもので、3世紀末～4世紀初に比定される。32・33は内・外面にハケが施されており、29~31に比べやや新しい様相をもつ。5世紀後半に比定される。34は土師器高杯で、柱状部～裾部まで残存する。裾部は柱状部から屈曲して広がっており、調整はナデと柱状部内面はケズリが用いられる。時期は3世紀末～4世紀初(布留式古相)と考えられる。35は土師器把手付鉢である。5世紀後半に比定される。36は須恵器杯蓋で、ほぼ完形で出土した。5世紀後半に比定できる。37は砂岩製の叩き石で、両端・側面に敲打痕が認められる。

S E 203

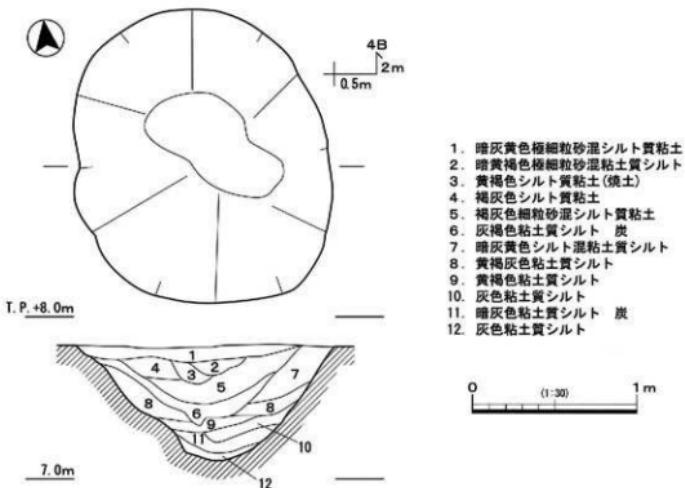
4B区に位置し、素掘り井戸と考えられる。掘方平面形は約1.9×1.5mの梢円形を呈する。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは約0.7mを測る。



第13図 S E 202断面図



第14図 S E 202出土遺物



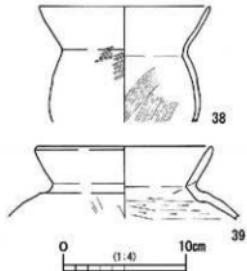
第15図 SE 203平面図

埋土は上部が黄褐色系細粒砂混シルト～粘土、下部は灰色～暗灰色粘土質シルトである。部分的に炭や焼土塊を含む層がみられる。遺物は少量であるが、古墳時代後期までの土器が出土しており、38・39を図化した。

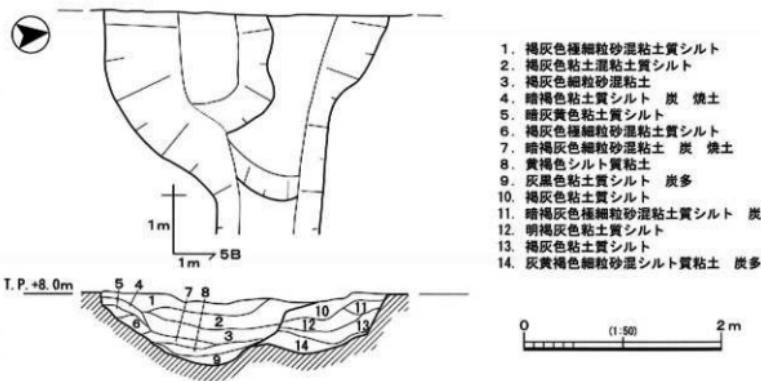
38は長胴甕形の製塙土器と考えられる。器壁が薄く、調整は外側にタキ、内側はケズリの後、板状工具によるナデが施されている。時期は3世紀末～4世紀初(布留式古相)に比定できる。39は土師器甕で、調整が外側はナデ、内側はケズリが用いられている。内面調整のケズリから、布留式甕の様相を残すものと考えられるが、外側の頸部～体部に薄い粘土塊が付着し、内面頸部付近で調整がほとんど行われていないことから、粗雑化が進んだものと思われる。5世紀後半～6世紀に比定できる。

S E 204

5B区に位置し、素掘り井戸と考えられ、西は調査区外に続いている。規模は南北約2.9m・東西1.8m以上、検出面からの深さは約0.8mを測る。断面は逆台形を呈し、北部は段がついている。井戸の掘り直しが行われたか、あるいは別の遺構を切り込んでいるのかは明確ではない。埋土はおおまかにみて褐灰色系細粒砂混じり粘質シルト～粘土で、下層部に炭・焼土を多く含んでおり、最下層は灰黒色の炭層である。遺物は布留式期新相の土器が多量に出土しており、40～56を図化した。



第16図 SE 203出土遺物



第17図 SE 204平断面図

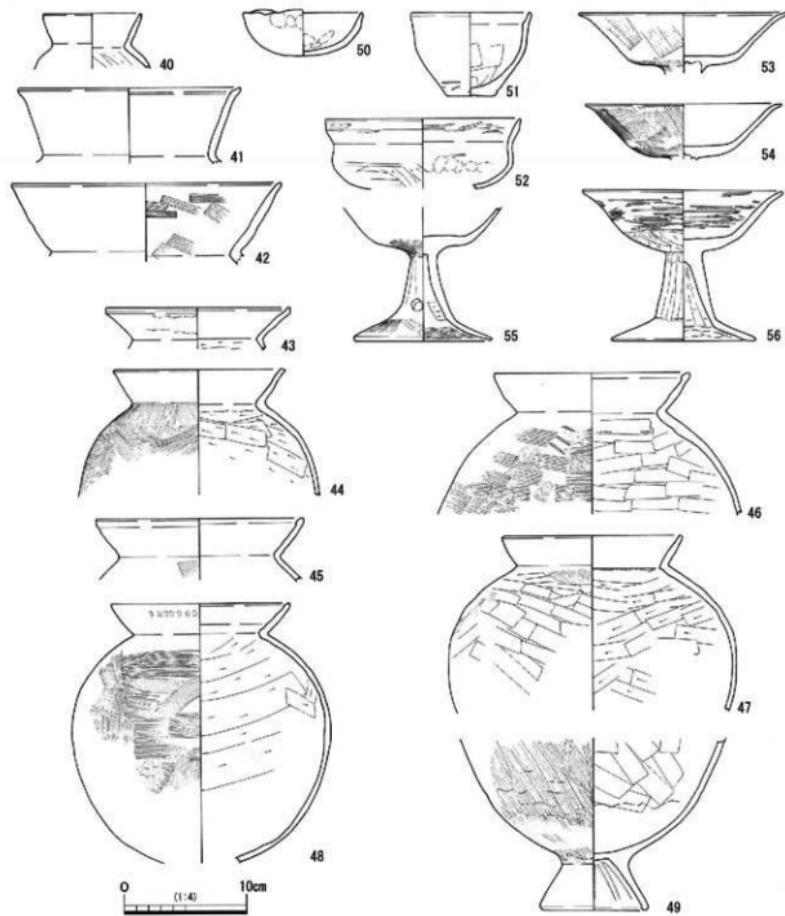
40は土師器小型壺の口縁で、4世紀中頃～後半(布留式新相)に比定できる。41・42は土師器広口壺の口縁で、41は口縁端部が僅かに外反し、端部が内面に肥厚する。42は口縁中位でナデが内面はハケで調整されている。43～48は布留式壺で、口縁部から体部まで残存する。口縁部が内済して立ち上がるもの(44～46・48)と、直口のもの(43・47)があり、45・46・48では口縁端部の内面肥厚が認められる。調整は外面にハケ、内面にケズリが施されるが、47は外面に板ナデが施される。48は口縁外面にやや不明瞭であるが、米粒大の楕円形の線状圧痕が7個並ぶ。8点とも4世紀中頃～後半(布留式新相)に比定できる。49は台付壺の底部で、丸底状の壺の底部に、端面が内面に肥厚する台が付く。東海系の搬入品と思われる。口縁部～体部を欠くため詳細な時期は不明であるが、4世紀に比定できる。50～52は土師器鉢で、50は底部・口縁端部など未調整部分が多い。51はやや外反する口縁部をもち、底部は平底で、弥生土器V様式の様相を残している。4世紀前半に比定できる。52は体部が大きく開き、頸部でやや屈曲して外反する口縁がつく。5世紀後半に比定できる。53～56は土師器高杯である。いずれも布留式の高杯で、口縁は外反し、杯部の稜はほとんどが丸みを持つ。4点とも4世紀中頃～後半(布留式新相)に比定できる。

S K 201

3・4 B区に位置する平面不定形な土坑である。規模は南北約1.4m・東西約1.3m・深さ約14cmを測る。断面浅い逆台形を呈し、埋土は明灰色砂礫(～3cm)である。埋土の状況から窪みに残存した洪水砂と考えられるが、調査区内では他にそのような状況は認められず詳細は不明である。遺物は出土していない。

S K 202

4 A区に位置する平面不定形な土坑である。規模は南北0.9m・東西約2.1m・深さ約16cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は暗黄灰色粘土質シルトである。弥生土器、時期不明の土師器が出土しているが、図化しえるものは無い。



第18図 S E 204出土遺物

SK 203

4・5 A区に位置する土坑で、東・南は調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分の規模は南北2.8m・東西0.7m・深さ約25cmを測る。埋土は上層が暗灰色極細粒砂混粘土質シルト、下層が暗黄灰色極細粒砂混シルトである。弥生土器、古墳時代後期頃までの土師器、須恵器が出士しているが、図化しえるものは無い。

S K 204

5 A 区に位置する土坑で、東部は S K 203に削平され、また南は調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分の規模は南北20cm・東西1.7m・深さ約20cmを測り、埋土は黄灰色細粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

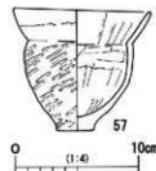
S K 205

5 B 区に位置する土坑で、南は調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分の規模は南北55cm・東西80cm・深さ約15cmを測る。断面椀形を呈し、埋土は上層が暗灰褐色細粒砂混シルト質粘土、下層が灰褐色細粒砂混シルトである。弥生土器が少量出土しており57を図化した。57は小型の弥生土器壺である。弥生時代後期後半に比定できる。

S D 201

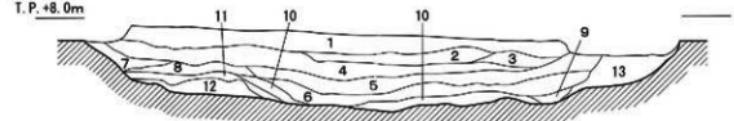
1 区北部を東西方向に横断する溝である。規模は幅約3.0m・深さ約0.5mを測り、断面皿状を呈する。埋土は13層から成り、おおまかには暗灰黄色～褐色系の極細粒砂～細粒砂混粘土～シルトで、流水堆積は認められない。遺物は5世紀末～7世紀前半の須恵器・土師器を多く含み、東部の上層では6世紀末頃の土器の集積が見られた。58～101を図化した。

58～60は土師器杯で、58は口縁が屈曲し、59は口縁がやや外反、60は椀形を呈する。3点とも6世紀後半に比定される。61～63は土師器高杯で、61は口縁部～脚部、62・63は脚部のみ残存する。61は杯下部に粘土を突き出た段が設けられている。3点とも7世紀前半に比定される。64・65は土師器壺である。64は細頸壺、65は長頸壺で、7世紀前半に比定される。66は土師器鉢の口縁と考えられる。大型品で、鉢の口縁の可能性もある。67は土師器製塩器の口縁部である。68～75は土師器壺で、68～70・72～74は口径が14cm前後、71・75は口径が17～19cm前後のものである。68～70は口縁部～底部まで残存するもので、3点とも口縁部は肥厚して外反し、外面はタテハケで調整されている。71～75は口縁部～体部まで残存する。いずれも外面調整にタテハケが用いられるが、内面は71・72がナデ、73はハケとケズリ、74は板ナデとハケ、75はハケが用いられる。時期はいずれも5世紀後半～6世紀に比定できるが、71・73・75については口縁端部の肥



第19図 S K 205出土遺物

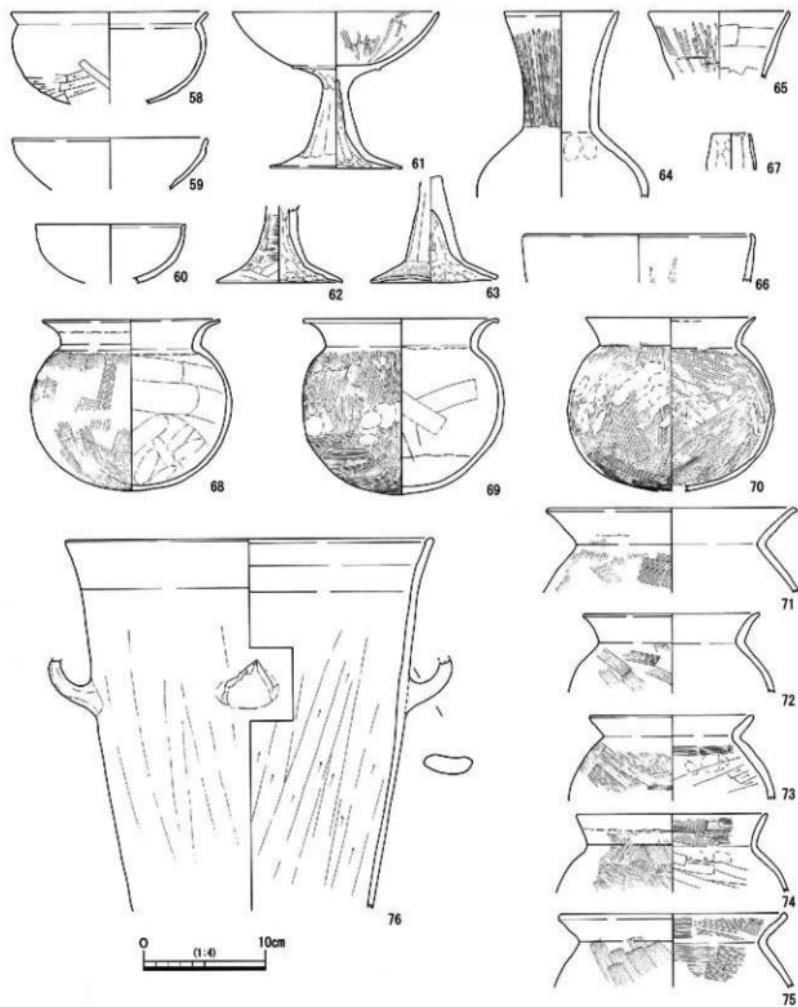
T.P. +8.0m



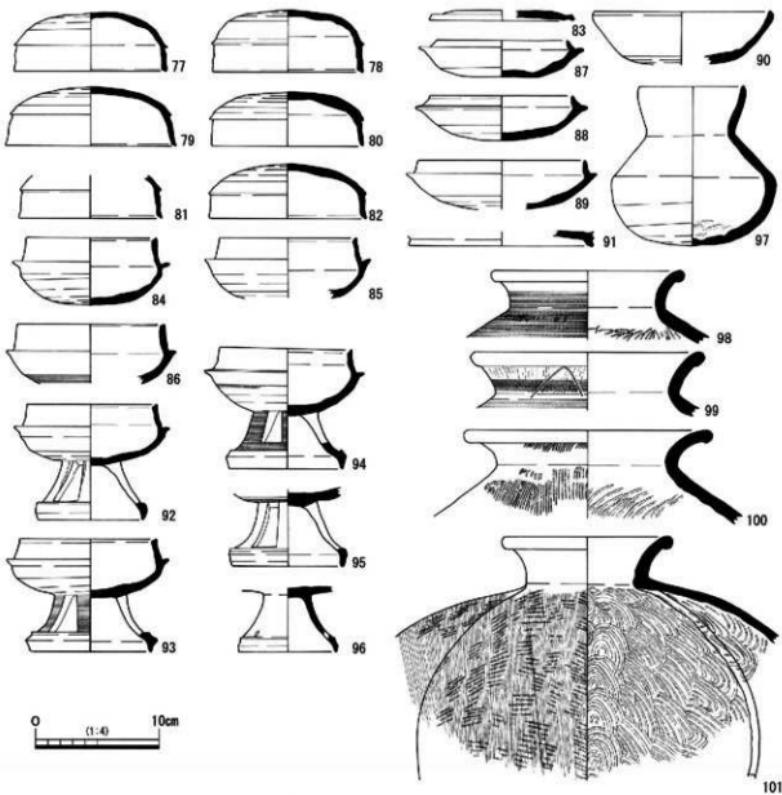
1. 黄灰色シルト質粘土
2. 暗灰黄色シルト質粘土
3. 暗灰黄色極細粒砂混シルト質粘土
4. 暗灰黄色粘土質シルト
5. 暗灰黄色シルト質粘土
6. 暗灰黄色極細粒砂混粘土
7. 暗灰褐色極細粒砂混シルト質粘土

8. 褐灰色粘土質シルト
9. 淡灰黄色シルト質粘土
10. 黄褐色粘土質シルト
11. 暗灰黄色極細粒砂混粘土
12. 黄灰色シルト混極細粒砂
13. 暗灰シルト質粘土

第20図 S D 201西壁断面図



第21図 SD 201出土遺物①



第22図 SD 201出土遺物②

厚、頸部の屈曲、内面調整のケズリが見られることから、布留式壺の様相を残していると思われる。76は土師器瓶で、口縁部～体部が残存する。体部には把手がついており、先端は欠損しているが、断面が楕円形を呈し、上方へ屈曲している。6世紀後半～7世紀前半に比定できる。77～83は須恵器杯蓋、84～91は須恵器杯身で、77～82、84～86が5世紀後半(T K 47型式)、87～89は6世紀後半～末(T K 10型式後半)、90が7世紀後半(T K 46型式)、91が7世紀末～8世紀前半(T K 46～T K 48型式)、83が8世紀後半(T K 7型式)に比定できる。86については底部にカキメが施されていることから、有蓋高杯の可能性がある。92～96は須恵器有蓋高杯で、92～94は口縁部～脚裾部まで、95・96は脚部が残存する。92～95は台形のスカシが3方向に配されている。93では脚部に縦方向の沈線が一本描かれており、ヘラ記号の可能性もあるが、スカシを作る際の目印に線刻されたと考えられる。96は脚部の2か所に切り込のような穴が設けられており、楕円形もしくは線状のスカシの可能性がある。5点とも5世紀後半(T K 47型式)に比定できる。97は須恵

器直口壺で、内面・外面は回転ナデで調整されているが、内面底部付近では接合痕が残り、その周辺にハケ状工具による圧痕が残る。98~100は須恵器壺で、3点とも口縁部~体部が残存し、口縁部が外反し、端部は丸みをもつ。99は口縁部に逆V字型のヘラ記号をもつ。3点とも6世紀後半に比定できる。101は須恵器横瓶で、口縁部~体部が残存する。6世紀後半(T K217~T K46型式)に比定できる。ナデで調整されているが、内面底部付近では接合痕が残り、その周辺にハケ状工具による圧痕が残る。

S D 202

2B~4A区のS D201・S O201間で検出した南北方向の溝で、南部で途切れる部分がある。規模は検出長約10.5m・幅約35cm・深さ約10cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は褐灰色細粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S D 203

5ライン上を横断する東西方向の溝で、規模は検出長約5.9m、幅は約0.6~1.1mで、東に行くほど細くなっている。断面逆台形を呈し、深さ20~30cmを測り、埋土は上から暗灰黄色粘土質シルト・灰色極細粒砂混シルト・暗灰黄色シルトである。遺物は古墳時代初頭の土師器、時期不明の須恵器が出土している。

S D 204

6B区で検出した東西方向の溝で、規模は検出長約1.4m・幅約1.5m・深さ約25cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は上層が灰褐色極細粒砂混シルト質粘土、下層が黄灰色シルト質粘土である。遺物は弥生土器、布留式土器、須恵器、瓦器片が出土しているが、図化したものは無い。

S D 205

6B区で検出したS D204の南に平行する溝で、規模は検出長約1.5m・幅約1.2m・深さ約15cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は上層が淡灰褐色細粒砂混粘土、下層が灰褐色細粒砂混シルトである。遺物は弥生土器片、時期不明の須恵器片が出土している。

ピット

S B201を構成するピットを除けば、主に1区中央の3・4A・B区に集中している。建物を構成する柱穴と思われ、S P210・211・213・231・233では柱痕が確認できたが、規格性は認められなかった。法量・埋土・出土遺物は表1にまとめた。またS P206・209・216・246からの遺物を図化した。

S P206~102は土師器高杯で、杯部は丸みを持ち、口縁部付近はやや内湾する。5世紀中頃~後半に比定される。

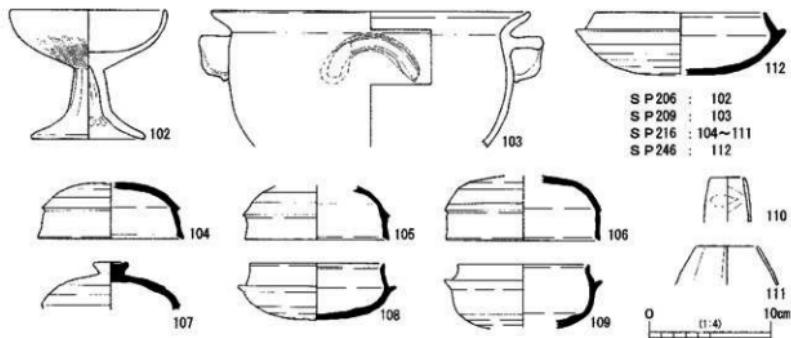
S P209~103は弥生土器把手付鉢である。口縁は屈曲して外反する。屈曲部の下方には匁字形の把手がつく。生駒西麓産で、弥生時代後期後半に比定できる。

S P216~104~106は須恵器杯蓋、107は須恵器有蓋高杯蓋、108~109は須恵器杯身で、いずれも5世紀後半に比定される。110~111は製塙土器と考えられるが、細片のため詳細は不明である。

S P246~112は須恵器杯身で、6世紀後半に比定される。

表1 第2面ピット一覧表

S P	地区	長辺	短辺	深さ	埋土	出土遺物
201	1B	81	78	13	明灰色砂疊 第6回參照	土師器
202	*	73	70	43		弥生、古墳～古代～土師器・須恵器
203	1A	65	50	39	*	古墳～土師器・須恵器・製塙土器
204	*	60	58	41	*	弥生、古墳～古代～土師器・須恵器・製塙土器
205	*	76	60	17	灰黄色細粒砂混シルト	
206	3B	36	27	17	褐色細粒砂混シルト	土師器
207	3A-B	48	30	16	暗灰褐色細粒砂混シルト質粘土	
208	3A	38	30	15	*	古墳～土師器・須恵器・製塙土器
209	3A-B	47	39	22	*	弥生、古墳～古代～土師器
210	3A	23	18	17	黄褐色色シルト質粘土	
211	*	54	50	23	*	古代～土師器
212	*	64	60	26	*	
213	*	24	18	38	*	
214	*	17	16	20	*	
215	3B	24	24	9	暗灰褐色細粒砂混シルト質粘土	
216	*	47	35	13	暗褐灰色細粒砂混粘土質シルト	炭
217	*	60	30	13	黄褐色色シルト質粘土	古墳～土師器
218	*	15	13	8	*	土師器・須恵器
219	3A-B	52	27	41	*	古墳～土師器・須恵器
220	3A	53	50	17	*	弥生、土師器
221	*	30	29	14	*	
222	*	55	50	20	海灰色粘土 暗黄褐色粘土 灰褐色細粒砂混粘土質シルト	
223	*	40	35	18	黄褐色色シルト質粘土	
224	*	31	28	20	暗灰褐色細粒砂混シルト質粘土	弥生、古墳～土師器・製塙土器
225	*	45	43	24	*	
226	3B	42	33	12	*	古墳～土師器・製塙土器
227	*	20	18	15	*	
228	3A	38	30	15	黄褐色色シルト質粘土	土師器・製塙土器
229	*	26	19	5	*	
230	*	38	36	32	暗灰褐色細粒砂混シルト質粘土	土師器
231	4B	21	20	18	*	
232	4A-B	35	32	21	*	
233	4A	27	23	23	黄褐色色シルト質粘土	
234	*	37	32	34	暗灰褐色細粒砂混シルト質粘土	古墳～土師器・製塙土器
235	*	25	22	23	暗灰褐色細粒砂混粘土質シルト	
236	*	50	34	24	暗灰褐色細粒砂混シルト質粘土	土師器
237	4B	35	34	29	*	土師器
238	4A	33	25	29	*	弥生、土師器
239	5B	33	23	15	*	
240	5A	26	16	8	褐色色細粒砂混粘土質シルト	
241	3D	60	30	22	灰褐色色細粒砂混粘土質シルト	
242	3C	80	42	2	*	弥生土器
243	*	60	58	15	褐色色シルト混粘土	
244	*	12	10	5	*	
245	5B	70	12	10	褐色細粒砂混粘土 褐色細粒砂混粘土質シルト	古墳～土師器・須恵器
246	*	52	42	24	褐色色細粒砂混粘土 灰色粘土質シルト	古墳～土師器・須恵器・製塙土器・瓦器
247	6B	24	20	14	褐色色細粒砂混粘土	土師器
248	*	22	21	18	*	土師器



第23図 SP 206・209・216・246出土遺物

S O201

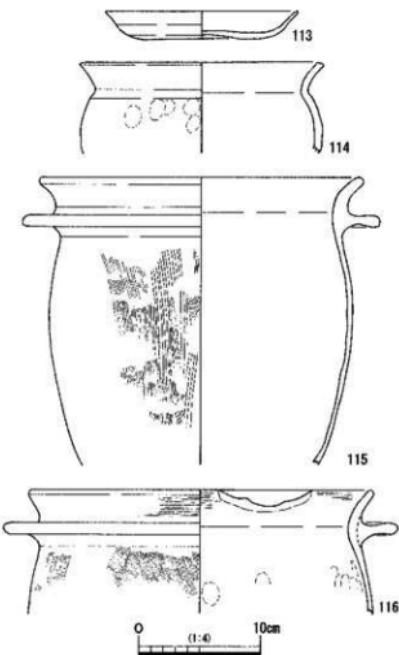
4 A区で検出した北から南への落ち込みである。検出部分の規模は東西幅約2.5m・深さ約15cmを測り、埋土は暗灰色細粒砂混粘土である。底部ではSK 202が検出され、これを削平している。遺物は奈良時代頃までの土師器・須恵器の他、下位のSW 202に帰属する弥生土器が出土しており、113~116を図化した。

113は土師器皿、114は土師器甕、115・116は土師器羽釜である。115・116は生駒西麓産である。いずれも7世紀末~8世紀に比定される。

S O202

3・4 B区で検出した東から西への落ち込みである。検出部分の規模は南北幅約5.3m・東西幅約3.2m・深さ約15cmを測り、埋土は暗黄褐色細粒砂混シルト質粘土である。底部ではSE 203が検出され、これを削平している。遺物は弥生土器・土師器が出土しており117を図化した。

117は土師器甕で、5世紀後半に比定される。

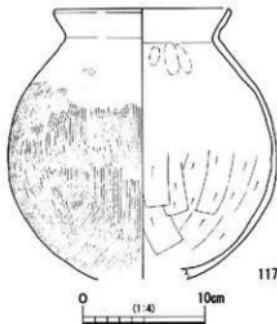


第24図 SO 201出土遺物

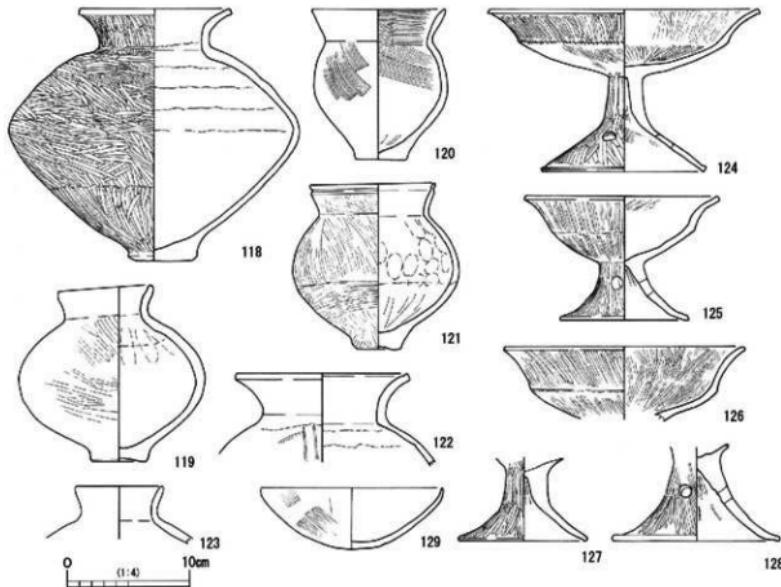
SW201

3 A区において第7層中で検出した弥生時代後期後半の土器集積である。出土状況は南北約2m・東西約1mの範囲に破片が集積するもので、周辺に炭の抜がりもみられた。第7層上面では掘方は検出できなかった。遺物は33点(118~150)を図化した。

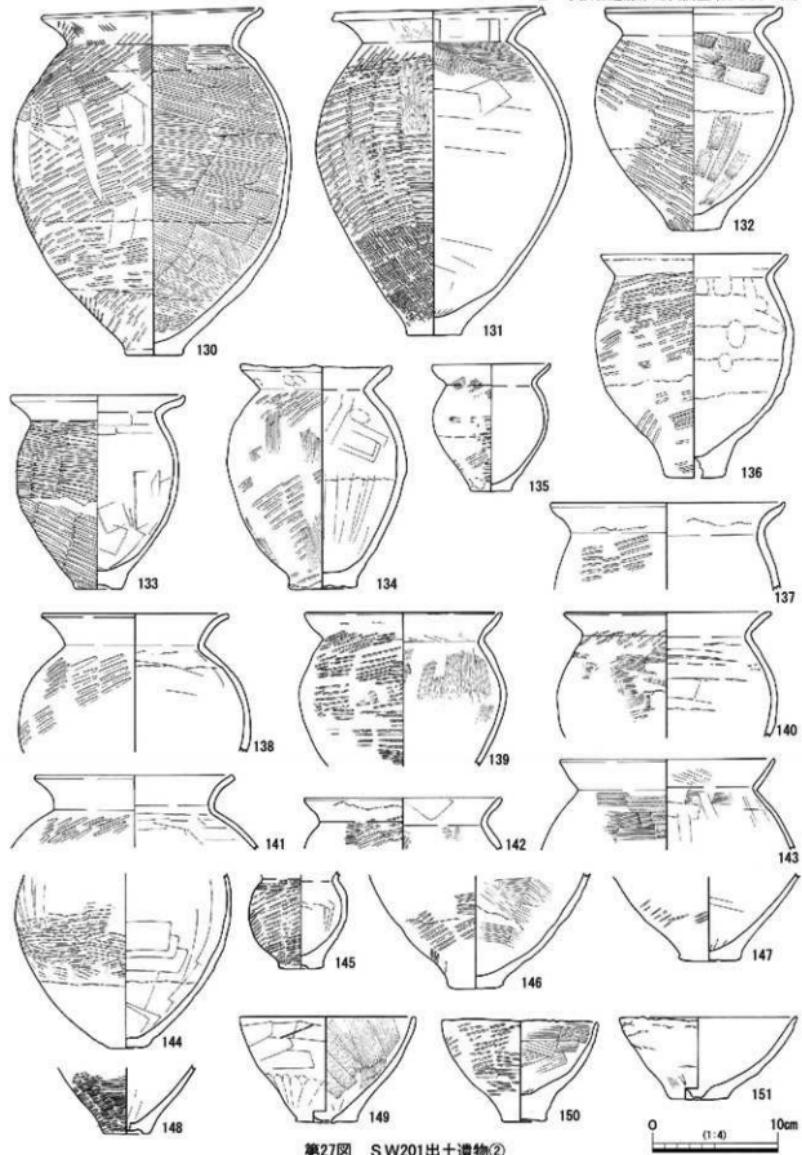
118~122は弥生土器壺で、118・122は広口壺、119・120は広口直口壺、121・123は短頸直口壺である。122は頸部下で、ヘラ記号と思われる2本の縦方向に並行する沈線と、そのうち左側の一本の上端から左下方向に伸びる沈線が描かれている。6点とも弥生時代後期後半に比定できる。124~129は弥生土器高杯で、124・125は口縁部～底部、126は杯部、127・128は脚部が残存する。124~126は有稜高杯で、124では稜部分にキザミ目が施される。129は杯の可能性もあるが、杯底部付近で、脚部との接合痕と思われる弧状のユビナデと凹凸が認められることから、椀形の高杯と考えられる。4点とも弥生時代後期後半に比定できる。130~148は弥生土器甕で、130~136が口縁部～底部、137~142が口縁部～体部、144~147が体部～底部ま



第25図 SW202出土遺物



第26図 SW201出土遺物①



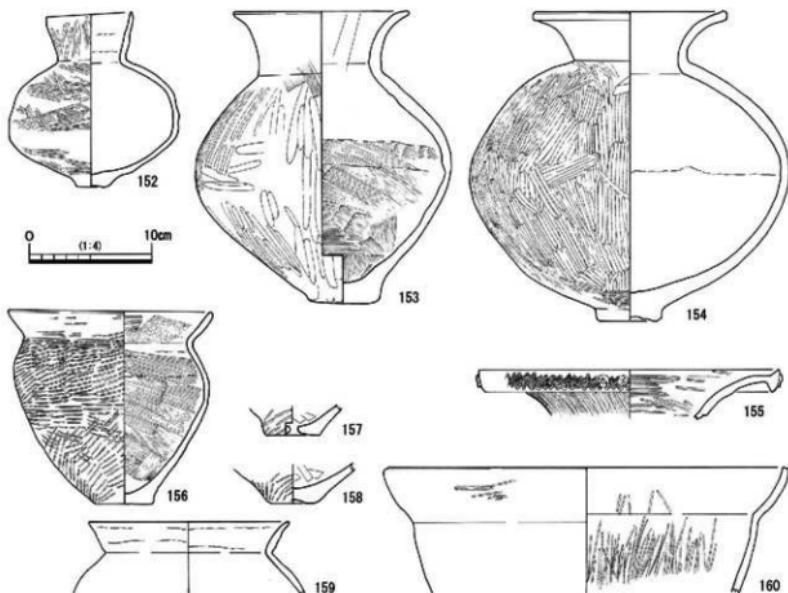
第27図 SW201出土遺物②

で残存する。146～147については、鉢底部の可能性もある。144は器壁が薄く、調整も外面にハケが施されており、混入した遺物の可能性があるが、この他については、概ね最大径が上位にあって外側調整にタタキが用いられるもので、弥生時代後期後半に比定できる。149～151は弥生土器鉢で、3点とも小型であるが、149・151には底部に円形の孔が穿たれている。3点とも弥生時代後期後半に比定できる。

SW202

4 A区において第7層中で検出した弥生時代後期後半の土器集積である。出土状況をみると、完形に近い土器が散発的にみられるというものである。第7層上面では掘方は検出できなかった。遺物は9点(151～159)を図化した。

152～154は弥生土器壺である。152は直口壺、153・154は広口壺で、3点とも口縁を一部欠くがほぼ完形で出土した。153の口縁内面には2本の並行する直線のヘラ記号が描かれる。155は弥生土器の二重口縁壺もしくは装飾器台の口縁と思われるが、屈曲部より下部分が欠損しているため、詳細は不明である。口縁部端面は下方に肥厚し、波状文と円形浮文が描かれる。156・159は弥生土器甕である。156は口縁～底部まで残存し、口縁は直口し、平底の底部を持つ。159は口縁～体部まで残存するもので、口縁部は肥厚してやや外反する。157・158は底部のみ残存するもので、弥生土器の甕もしくは鉢と考えられる。157では底部中央に焼成前に円形の孔が穿たれており、



第28図 SW202出土遺物

有孔鉢と考えられる。158は底面がドーナツ状の底で、甕底部の可能性が高い。160は弥生土器大型鉢で、口縁部～体部が残存する。

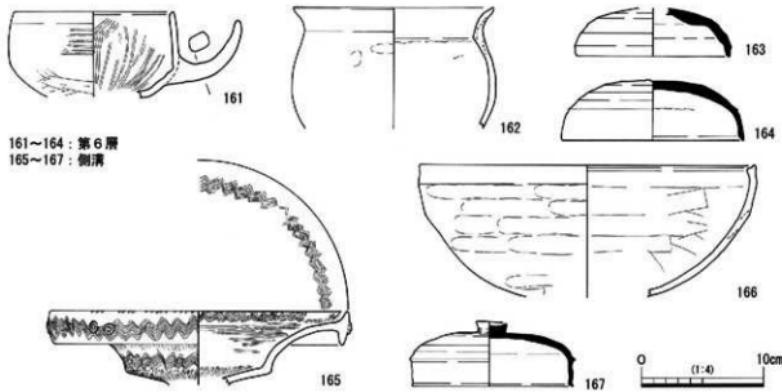
包含層出土遺物

1・2B区第6層

161は把手付鉢で、体部下位に上方へ屈曲する把手が付く。6世紀後半に比定される。162は土師器壺で、口縁部は肥厚して外反する。6世紀後半～7世紀前半に比定できる。163・164は須恵器杯蓋で、163は6世紀後半～7世紀初、164は6世紀中頃～後半に比定できる。

側溝

165は弥生土器二重口縁壺もしくは装飾器台の口縁部と考えられるが、頸部付近から下方が欠損しているため詳細は不明である。口縁端上部と屈曲部にキザミ目、口縁内面・端面・屈曲部上に波状文、口縁端部に円形浮文が施される。弥生時代後期後半に比定できる。3B区出土。166は土師器鉢で、口縁端部に段がつく。8世紀代のものと考えられる。4A区出土。167は須恵器杯蓋で、天井部に円形のツマミを持ち、有蓋高杯蓋と考えられる。5世紀後半に比定できる。5B区出土。



第29図 包含層出土遺物

第3章　まとめ

今回の調査では弥生時代後期から近世の遺構・遺物が検出され、当地が各時代にわたって連続と集落域として繁栄していたことが確認された。傾向としては、北へ行くほど遺構の時期が下ることがいえる。出土遺物の量はコンテナ20箱を数える。

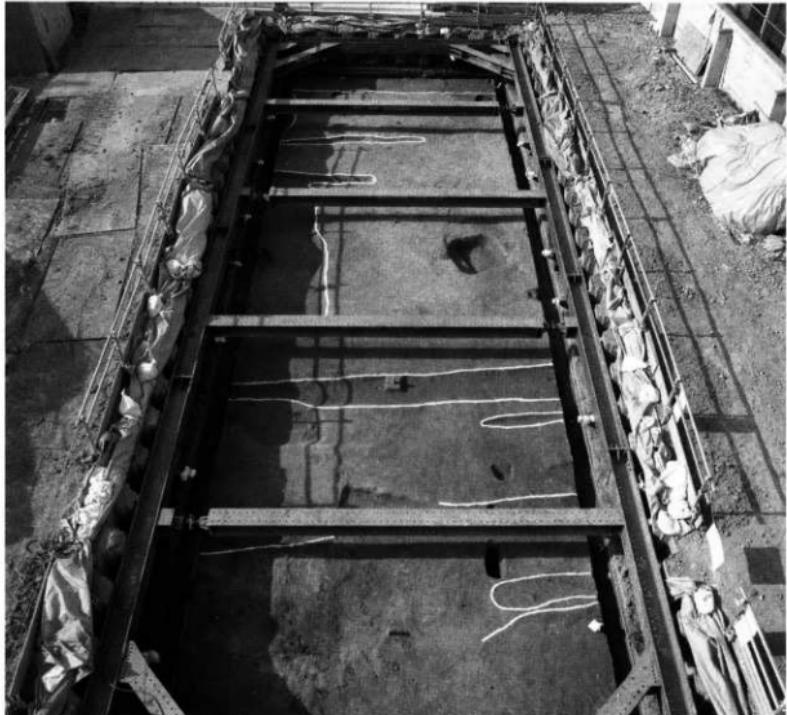
弥生時代後期後半では、3A区・4A区で第7層中において弥生時代後期後半の土器集積が検出されたが、遺構である可能性があるものの明確にはできなかった。3A区SW201では土器の周辺に炭の括がりが、また4A区でも東側溝断面で、第9層・第10層上面から切り込まれる炭を含む遺構状の落ち込みが認められ、これらが当該期の遺構となる可能性がある。同様の土器集積は東部の第29次調査においても検出されている。

第7層上面の第2面では古墳時代前期～後期の井戸・溝・ピット、奈良～平安時代では掘立柱建物・井戸からなる居住域が検出された。古墳時代前期布留式期では井戸SE204が検出されたが、周辺で当該期の遺構としては、南西約100m地点の第4次調査第1調査区で溝が確認されている。当調査地南西に隣接する鉄塔部分調査地では、細砂～粗砂層をベースとして古墳時代前期～奈良時代の遺構が検出されている。この砂層は古墳時代前期以前に埋没する河川で、南北方向に流路をもつと考えられ、この河川域の東・西では弥生～古墳時代前期初頭の遺構が遺存しているようである。既往の調査では、古墳時代中期～後期では南北600m以上にわたって集落域が確認されており、位置的に見て当地はその中央部にあたる。また奈良～平安時代では南東約100m地点で奈良時代の河川が検出されており、その西側に沿って南北に括がる居住域の北部にあたると考えられる。

参考文献

- 嶋村友子 1985「6. 小阪合遺跡の調査〔青山町4丁目4〕」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11 昭和59年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
吉岡 哲・他 1988『八尾市史(前近代)本文編』八尾市役所
高萩千秋 1988『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合地区調整事業に伴う発掘調査－』(昭和59年度第4次調査報告書) (財)八尾市文化財調査研究会報告15』(財)八尾市文化財調査研究会
古代の土器研究会編 1992『古代の土器1 都城の土器集成I』古代の土器研究会
田畠昭三 1981『須恵器大成』角川書店
京鶴覚 1993「第3章第2節 古墳時代後期の土器の変遷」「長原・瓜破遺跡発掘調査報告V」財团法人大阪市文化財協会
原田昌則 1993「第5章まとめ 3)中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」「II久宝寺遺跡(第1次調査)」財团法人八尾市文化財調査研究会報告37』財团法人八尾市文化財調査研究会
原田昌則 2003「第5章第1節中・南河内における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の細分試案について」「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書 財团法人八尾市文化財調査研究会報告74』財团法人八尾市文化財調査研究会
財团法人大阪府文化財センター 2006『古式土師器の年代学】

図 版



1区 第1面全景(南から)



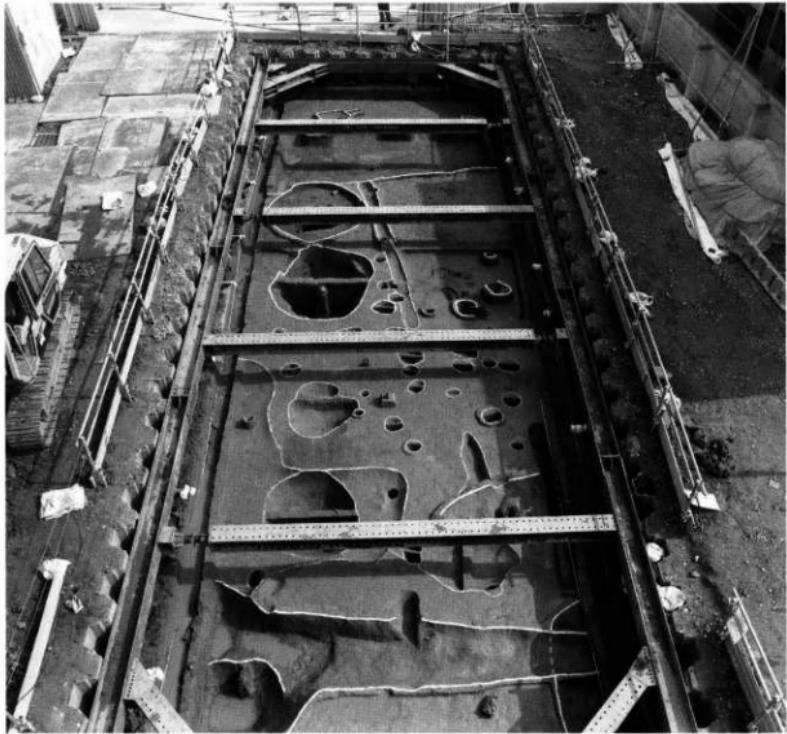
3区 第1面全景(北東から)



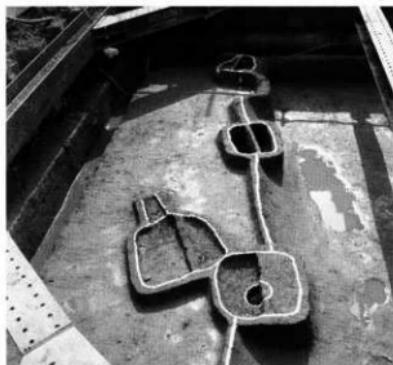
2区 第2面全景(南東から)



3区 第2面全景(北東から)



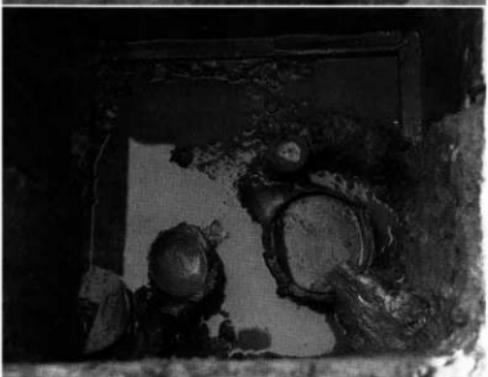
1区 第2面全景(南から)

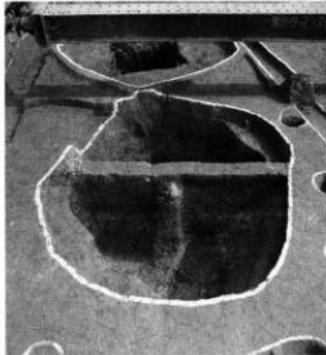


SB 201(西から)



SP 202(北から)

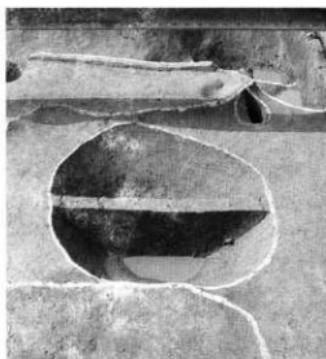




S E 202(南から)



S E 202北壁



S E 203(北から)



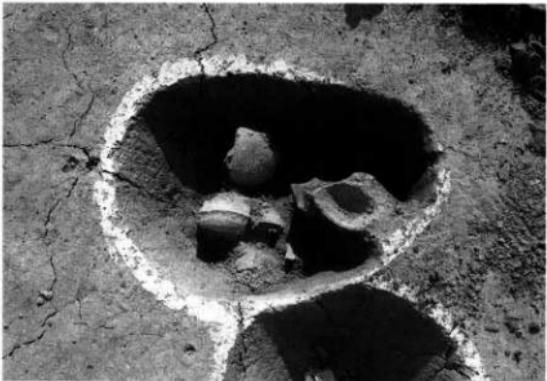
S E 203北壁



S E 204(北から)



S E 204西壁



SP 216(東から)

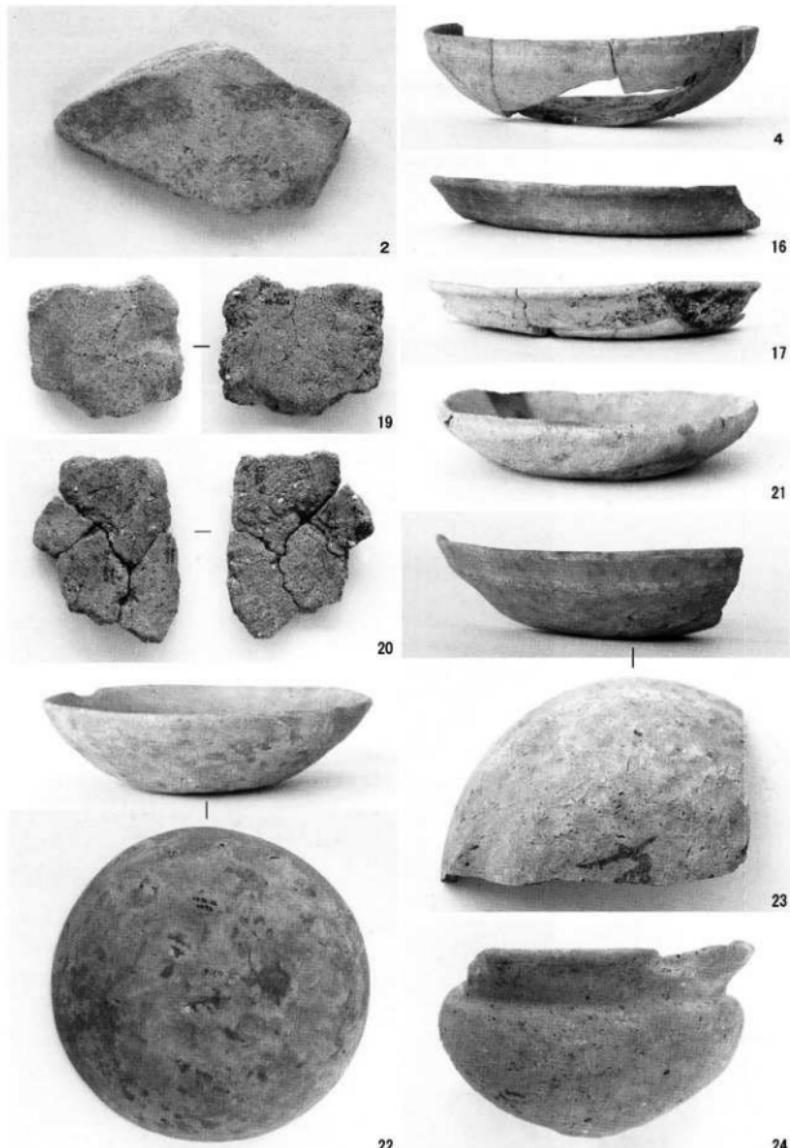


SW 201(東から)

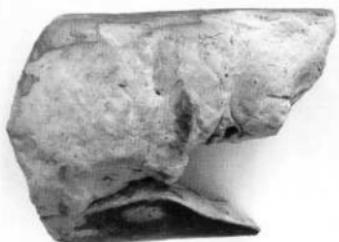


SW 202(東から)

図版六 出土遺物

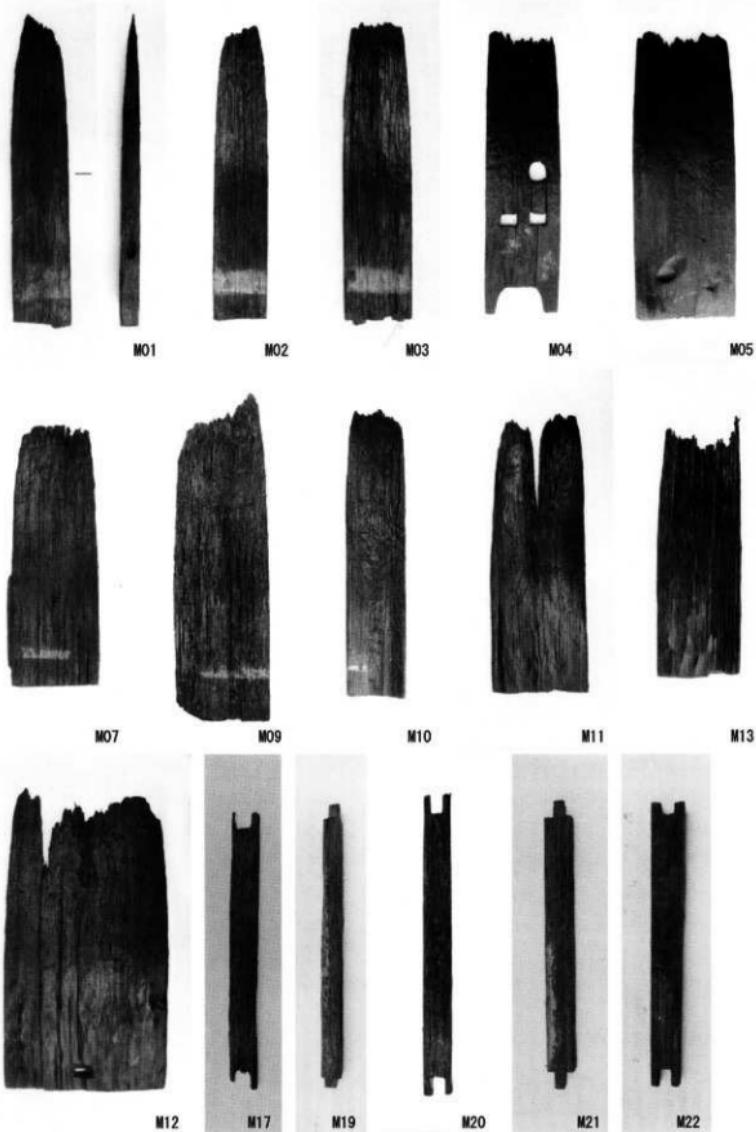


S P 202(2)、S P 204(4・16・17・19・20)、S E 201(21~24)



S E 201(25・26・28)、S E 202(33・35~37)

図版八 出土遺物



S E 201井戸枠 (M01~05・07・09~13・17・19~22)



46



49



48



50



51



52



55

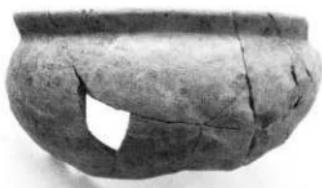


56

S E 204 (46・48~52・55・56)



57



58



61



64



68



67



69

S K205(57)、S D121(58・61・64・67～69)



S D 201 (77・78・80・81・84・87・90・92~94)



96



101



102



103



110



111



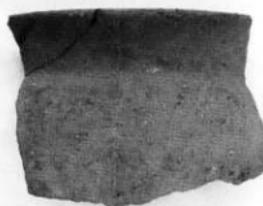
107



112



113

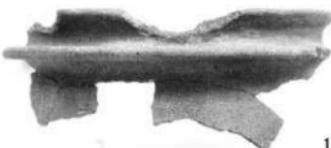


114

S D201(96・101)、S P206(102)、S P209(103)、S P216(107・110・112)、S P246(112)、S O201(113・114)



115



116



117



118



119



121



120

S O201 (115・116)、S O202 (117)、S W201 (118~121)

圖版一四 出土遺物



122



123



124



126



125



127



129



130

SW201 (122~127・129・130)



128



131



132



134



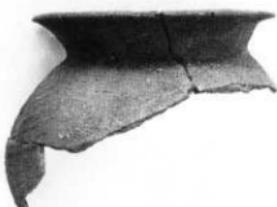
133



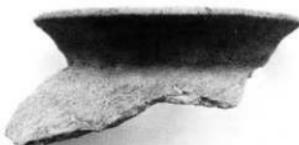
136



135



137



139

SW201 (128・131～137・139)



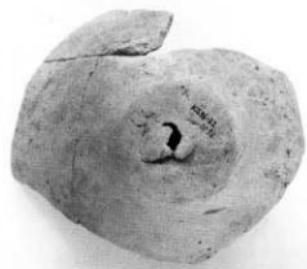
143



149



144



150



146



151

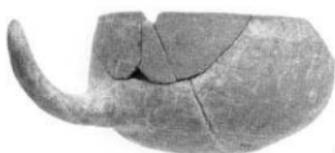
SW201(143・144・14～150)、SW202(151)出土遺物



153



155



161



154



163



165



156



167

SW202(153~156)、第6層(161・163)、側溝(165・167)

III 成法寺遺跡第20次調査（S H2007-20）

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市南本町二丁目で実施した共同住宅・事務所付倉庫建設に伴う成法寺遺跡第20次調査(SH2007-20)の発掘調査報告書である。
1. 調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成19年11月27日から12月4日(実働5日)にかけて河村恵理が担当した。調査面積は約22m²である。現地調査においては、飯塚直世・市森千恵子・川崎純弘・芝崎和美・竹田貴子・中野一博が参加した。
1. 整理業務は、平成20年4月~12月にかけて随時実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-市森・村井俊子・村田知子・永井律子、遺物トレス-徳谷尚子、デジタルトレス-河村、遺物写真撮影-北原清子、遺物写真図版-北原、遺構写真図版-河村が行った。
1. 本書の執筆・編集は河村が担当した。
1. 本書で参考とした文献については、P66に提示した。土器形式・編年で基準とした文献は、尾上 実・森島康雄・近江俊秀1995「Ⅲ土器・陶磁器 6. 瓦器撰」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

九州陶磁近世陶磁学会2000「九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会10周年記念-」

古代の土器研究会1993「古代の土器2 都城の土器集成II」

古代の土器研究会1994「古代の土器3 都城の土器集成III」

駒井正明1999「河内往生院出土瓦の編年とその歴史」『岩瀬山往生院六萬寺史上巻-考古編』往生院六萬寺(財)大阪市文化財協会1982「長原遺跡発掘調査報告II」

銘柄俊夫1989「大阪府南部の瓦質土器生産について(1)」『大阪文化財論集-財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集-』(財)大阪文化財センター

立石賢志・銘柄俊夫1995「Ⅲ土器・陶磁器 10. 瓦質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会百瀬正恒・近江俊秀1995「Ⅱ各地の土器様相7. 近畿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

本 文 目 次

第1章 はじめに.....	51
第2章 調査概要.....	51
第1節 調査の方法と経過.....	53
第2節 基本層序.....	53
第3節 検出遺構と出土遺物.....	54
第3章 まとめ.....	66

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺位置図	52
第2図	調査区配置図	53
第3図	1区断面図・平面図	55
第4図	1区S K103・104・111平面図・断面図	56
第5図	1区出土遺物実測図	57
第6図	2・3区断面図・平面図	58
第7図	2区S E213・217、S K214平面図・断面図	59
第8図	2区出土遺物実測図-1	60
第9図	2区出土遺物実測図-2	61
第10図	3区S K318平面図・断面図	62
第11図	3区S K318出土遺物実測図	63
第12図	4・5区断面図・平面図	64
第13図	4区S K421出土遺物実測図	65

表 目 次

第1表	周辺の発掘調査一覧表	52
-----	------------	----

図 版 目 次

図版一	発掘作業風景	3区西壁断面
1区全景		3区S K318土器出土状況
1区S K107		3区S K318断面
1区S K103		4区全景
1区S K111		5区全景
1区S O112肩部断面		図版三 1区：S K104、S O112、S K111
2区全景		2区：S O215出土遺物
2区東壁断面		図版四 2区：S E213、S D216、S E217
図版二	2区S E217検出状況	3区：S K318 4区：S K421出土遺物
2区S E217断面		図版五 3区：S K318 4区：S K421出土遺物
3区全景		

第1章 はじめに

成法寺遺跡は、大阪府八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画の、光南町一・二丁目、清水町一・二丁目、南本町一～四丁目、高美町一・二丁目、松山町一丁目、明美町一丁目、陽光園一丁目一帯をその範囲とし、東西約1.2km、南北約0.7kmに拡がる。

地理的に見ると、当遺跡は東を生駒山地、西を上町台地、南を河内台地、北を淀川に囲まれた河内平野の南東部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上の長瀬川の氾濫原に立地する。さらに長瀬川から派生した自然堤防(註1)が、遺跡内中央部を南北方向に伸びるように形成されている。この自然堤防(T.P.+10.3m)を基点として東西に広く盛土が堆積する(国土地理院1983)。

当遺跡周辺は、弥生時代以降比較的安定した土地であった為、遺跡が特に密集する地域の一つである。当遺跡の南側には矢作遺跡、北東から東側には小阪合遺跡、北側には東郷遺跡が存在する。また、当遺跡内を東～北方向に信貴越道が横断する。この信貴越道は中河内から大和へ抜ける道として古代から広く利用されていた(棚橋利光・石部正志他1989)。

当遺跡は、昭和56年に八尾市教育委員会(以下「市教委」)によって実施された光南町一丁目のビル建築に伴う遺構確認調査によって弥生時代～古墳時代の土器が多量に出土し、その存在が明らかになった遺跡である。本格的な調査では古墳時代後期の掘立柱建物、古墳時代前期の方形周溝墓、弥生時代後期の土器溜めなどが検出された(高萩千秋・米田敏幸1983)。以降、大阪府教育委員会(以下「府教委」)・市教委・当調査研究会によって数次の発掘調査が行われ、弥生時代中期～近世に至る複合遺跡であることが確認されている。

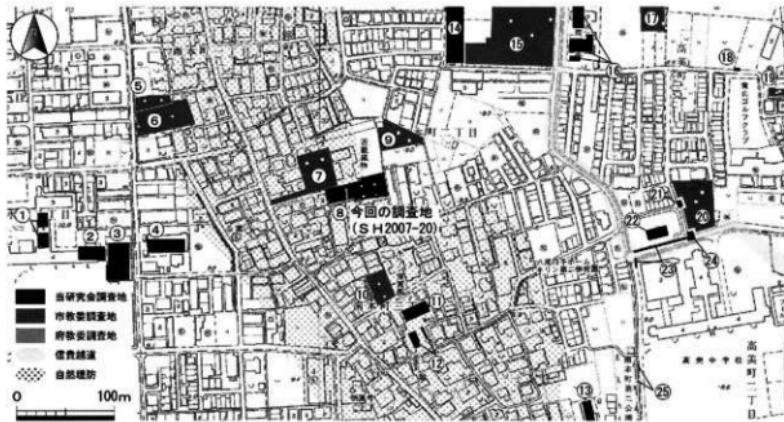
今回の調査地周辺の調査成果を見ると、調査地に近接する⑦・⑨(以下、囲み数字は第1図と第1表に対応する)では遺構は確認されなかったが、北側に位置する⑩～⑫では鎌倉時代～室町時代の井戸・土坑・溝など、⑬では中世の堀が確認されており、集落の存在が示唆できる遺構が多数検出されている。これらの調査成果から、調査地周辺では、中世において広く集落が存在していたことは明らかである。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、共同住宅・事務所付倉庫建設に伴って行われたもので、建物基礎部分にあたる5箇所に調査区を設定し、調査を行った。調査地総面積は約22m²である。

調査区は北西方向から順に「1～5区」と呼称した。各調査区の平面形状と規模は、1区は東西1.3～1.5m×南北11.0m前後の長方形を呈する調査区で、中央部は調査前に行われた確認調査地点と重複する。2区は東西2.0m前後×南北2.6m、3区は東西2.1～2.2m×南北2.4～2.6m、4区は東西1.8m×南北2.2～2.4m、5区は東西1.8m×南北2.1～2.2mの方形を呈する。

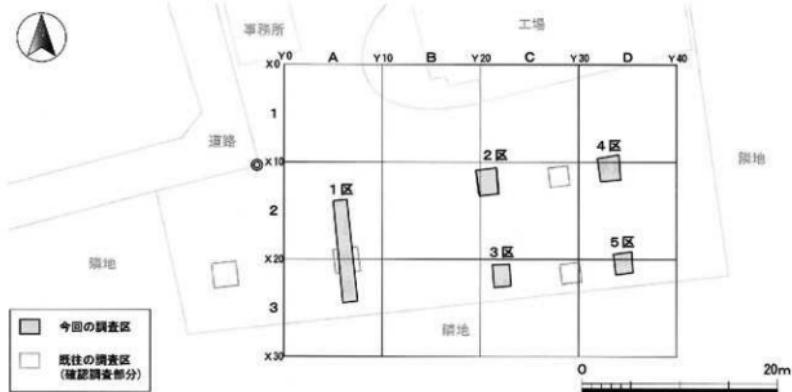


第1図 調査地周辺位置図 (S=1/5000)

第1表 周辺の発掘調査一覧表

番号	調査地名	所在地	面積 (m ²)	主な調査成果	文献
①	SH83-2 清水町 2	369	山城時代築造の掘立柱建物、古墳時代初期の墓・土器	高麗千秋1991「第3回奈良市北瀬戸町(SH83-2)発掘調査報告」『成法寺遺跡』財团法人八尾市文化財調査研究会監修33 財团法人八尾市文化財調査研究会報告	
②	SH82-1 清水町 2	207	奈良時代の掘立柱建物	原田正則1991「第2回奈良市北瀬戸町(SH82-1)発掘調査報告」『成法寺遺跡』財团法人八尾市文化財調査研究会監修33 財团法人八尾市文化財調査研究会報告	
③	SH81-7 清水町 2	約69	中世の精瓦・唐草・奈良時代の掘立柱建物・井戸・吉備	洋田治一1990「成法寺遺跡7次発掘(94-7)」『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』	
④	SH81-8 西木町 2	約350	奈良時代の塗・落ち込み	洋田治一1995「成法寺8号墳跡発掘調査報告」51『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』	
⑤	2002-268 西木町 1	6.25	-	横口 篤2006「2-10. 成法寺遺跡(2007-268)の調査」『八尾市文化財調査平15年度発掘調査報告書』9 八尾市文化財調査研究会監修	
⑥	2002-266 西木町 1	9	-	西村公裕2003「18. 成法寺遺跡(2002-266)の調査」『八尾市文化財調査平14年度発掘調査報告書』9 八尾市文化財調査研究会監修 平成14年度発掘調査報告書 八尾市教育委員会	
⑦	2001-119 西木町 2	8	-	西村公裕2005「13. 成法寺遺跡(2004-119)の調査」『八尾市文化財調査平16年度発掘調査報告書』9 八尾市文化財調査研究会監修50 平成16年度発掘調査報告書 八尾市教育委員会	
⑧	SH2007-20 西木町 3	約23	中世の井戸・清	今回の調査	
⑨	2002-002 西木町 2	8	-	横口 篤2004「3. 成法寺遺跡(2002-2)の調査」『八尾市文化財調査平15年度発掘調査報告書』8 八尾市文化財調査研究会監修 平成15年度発掘調査報告書 八尾市教育委員会	
⑩	2007-137 西木町 3	8	鎌倉時代の塗・土坑	西村公裕2004「2-1. 成法寺遺跡(2007-137)の調査」『八尾市文化財調査平15年度発掘調査報告書』8 八尾市文化財調査研究会監修 平成15年度発掘調査報告書 八尾市教育委員会	
⑪	SH86-15 西木町 3	425	中世の井戸・土坑・塗	洋田治一1996「成法寺小堀跡15号墳(896-15)」『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』92『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』	
⑫	SH84-13 西木町 3	約210	中世の井戸・土坑・塗	西村公裕1992「1. 成法寺遺跡13号墳(894-13)」『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』90『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』	
⑬	SH80-6 西木町 4	168	中世の塗	原田正則1991「第6回奈良6号墳(890-6)発掘調査報告」『成法寺遺跡』財团法人八尾市文化財調査研究会監修33 財团法人八尾市文化財調査研究会報告	
⑭	SH88-4 西木町 1	540	古墳時代初期の方形周溝墓	高麗千秋1994「成法寺4号墳(888-4)の調査」『成法寺遺跡』財团法人八尾市文化財調査研究会報告書	
⑮	94-303 西木町 1	63	-	洋田治一1996「9. 成法寺遺跡303号墳(896-15)」『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』10『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』11『成法寺6号墳発掘調査報告書』11 八尾市文化財調査研究会監修	
⑯	SH2003-18 真見町 1	約875	古墳時代初期の壺穴埋立・塗	森本公也2002「22. 成法寺遺跡875号墳(896-22)の調査」『成法寺内文化財調査6年発掘調査報告書』11 八尾市文化財調査研究会監修33 甲第6年発掘調査報告書 八尾市教育委員会	
⑰	94-189 真見町 1	18	古墳時代前期の落ち込み(多量の古式土器等出土)	洋田治一1995「8. 成法寺遺跡(94-189)の調査」『成法寺内文化財調査6年発掘調査報告書』11 八尾市文化財調査研究会監修33 甲第6年発掘調査報告書 八尾市教育委員会	
⑱	SH85-16 真見町 1	15	-	西村公裕1995「1. 成法寺遺跡(85-16)の調査」『成法寺内文化財調査6年発掘調査報告書』11 八尾市文化財調査研究会監修33 甲第6年発掘調査報告書 八尾市教育委員会	
⑲	98-523 真見町 1	12	中世の土坑・落ち込み付道標、古墳時代初期の小穴・塗	前田利和2000「3. 成法寺遺跡(98-523)の調査」『八尾市文化財調査平11年度発掘調査報告書』11 八尾市文化財調査研究会監修42 平成11年度発掘調査報告書 八尾市教育委員会	
⑳	2005-86 真見町 1	9	-	西村公裕2005「14. 成法寺遺跡(2004-86)の調査」『八尾市文化財調査平17年度発掘調査報告書』94 八尾市文化財調査研究会監修33 甲第6年発掘調査報告書 八尾市教育委員会	
㉑	SH80-11 真見町 1	約30	古墳時代初期の土塙	高崎千秋1994「成法寺遺跡11号墳(896-11)」『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』42『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』	
㉒	SH80-12 真見町 1	185	中世の井戸塗・金長時代の井戸塗・唐・新潟河川上り土器・人骨・井戸塗・方墳時代中期・第一級周溝墓	原田正則1995「3. 成法寺遺跡12号墳(896-12)の調査」『成法寺遺跡』財团法人八尾市文化財調査研究会報告書51『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』	
㉓	SH84-14 真見町 2	124	奈良時代中期の井戸塗・吉備・奈良道標・胡麻形埴輪付立柱・土塙	原田正則1994「3. 成法寺遺跡14号墳(94-14)」『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』42『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』	
㉔	SH80-10 真見町 1	約60	鎌倉時代の落作塗・古墳時代初期の小穴・土塙	西村公裕2004「成法寺6号墳(98-6)の調査」『成法寺6号墳(98-6)』『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』27『財团法人八尾市文化財調査研究会報告書』	
㉕	SH2003-19 真見町 2	35	-		

SH:成法寺遺跡



第2図 調査区配置図 (S=1/500)

地区割については、調査地に接する道路の角(◎)から、道路側溝に沿って10m南下した地点(X20・Y0)を基点に、1～5区を囲むように、東西40m(Y0～40)、南北30m(X0～30)の区画を設定し、1区画を10m四方に分割した。なお方位については、土地利用計画図を基準とした。地区名は、東西方向をアルファベット(西からA～D)、南北方向を算用数字(北から1～3)で示し、地区的表示は1A～3D地区とした。調査で使用した標高については、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地より南西100m地点のT.P.+9.3m)を使用した。

掘削は、重機による機械掘削と、人力掘削によって行った。現地表(T.P.+9.00～9.35m)下0.6～1.0m前後を機械掘削、以下0.1～0.2m前後を人力掘削により調査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

遺構名は、「遺構略号」+「三桁の通し番号」で表示し、三桁の通し番号は、前一桁で調査区名、後二桁で遺構の検出番号を示す。なお検出番号については、調査区の区切りに関係なく1～5区の順に付けた(例えば、1区の溝5は「SD105」)。

遺構検出面については、1・2・4区については自然堆積層(第6層)上面を第1面とし、上部から切り込む遺構についても同一面で調査を行った。3・5区については第1層上面を第1面とし、調査を行った。

第2節 基本層序 (第3図)

今回の調査では、近世以降の土地利用による削平が広範囲に見られた。このうち1区については比較的遺存状態がよく、安定した地層の堆積が確認できた。以下、1区の地層の堆積を基本層序とし、各層の特徴を記したい。

第0層：近現代の整地土層。1～3区で0.2m前後、4・5区で0.8m前後の堆積が確認できた。

第1層：近世以降の整地土層。土質は締まりが良く、灰黄色中砂混細砂に、にぶい黄褐色粗砂～中砂がブロック状に多量に混じる。当該層の堆積は1区で確認できた。

- 第2層**：中世以降の整地土層。土質はにぶい黄褐色疊混中～細砂を呈する。当該層の堆積は1・2区で確認できた。
- 第3層**：中世以降の島畠造成土層。土質は灰黄色細疊混中～細砂を呈する。当該層の堆積は1・4・5区で確認できた。
- 第4層**：中世耕作土層。土質は暗褐色粗砂混細砂に、にぶい黄橙色中～細砂がブロック状に混じる。当該層の堆積は1～3区で確認できた。
- 第5層**：流水堆積層(S O112埋土)。土質はさらに7層(19-1～7層)に分層でき、最下層部の19-7層ではラミナが顕著に見られる。19-1～6層では第6層をブロック状に巻き上げ、比較的水流の強い状態で埋没したことが推測できる。
- 第6層**：自然堆積層。土質は黄褐色細砂～シルトで炭化物が少量みられる。西から東へ下るなだらかな傾斜をもつ。第1図自然堤防に対応する堆積層であると考えられる。

第3節 検出遺構と出土遺物

1区(第3図)

2～3A地区に設定した調査区である。調査は、現地表面(T.P.+9.35～9.45m)から約0.5～0.6mまで機械掘削し、人力掘削を約0.1～0.2m地点まで行った。

近現代の整地土層(第0層)と近世以降の整地土層(第1層)を除去すると、厚さ0.4m前後に及ぶ中世以降の堆積土層(第2～4層)を確認した。なお、第2～4層が包含する遺物を観察したが、時期差はほとんど確認できなかった。調査は、これらの層を全て除去した面(第6層上面)で遺構検出を行った。当該面で検出した遺構は、遺構埋土や包含する遺物より、少なくとも3時期に細分することができた。以下、新しい時期の遺構から順に概要を述べたい。

・第3層上面 [17世紀以降]

当該面を構築面とする溝1条(S D101)、島畠1つ(島畠102)をそれぞれ3A地区と、2～3A地区で確認した。平面掘削時には確認できなかった。当該面は、現地表面下約0.3～0.6m(T.P.+9.05～8.75m)地点に広がるものと推定できる。

S D101 (第3図)

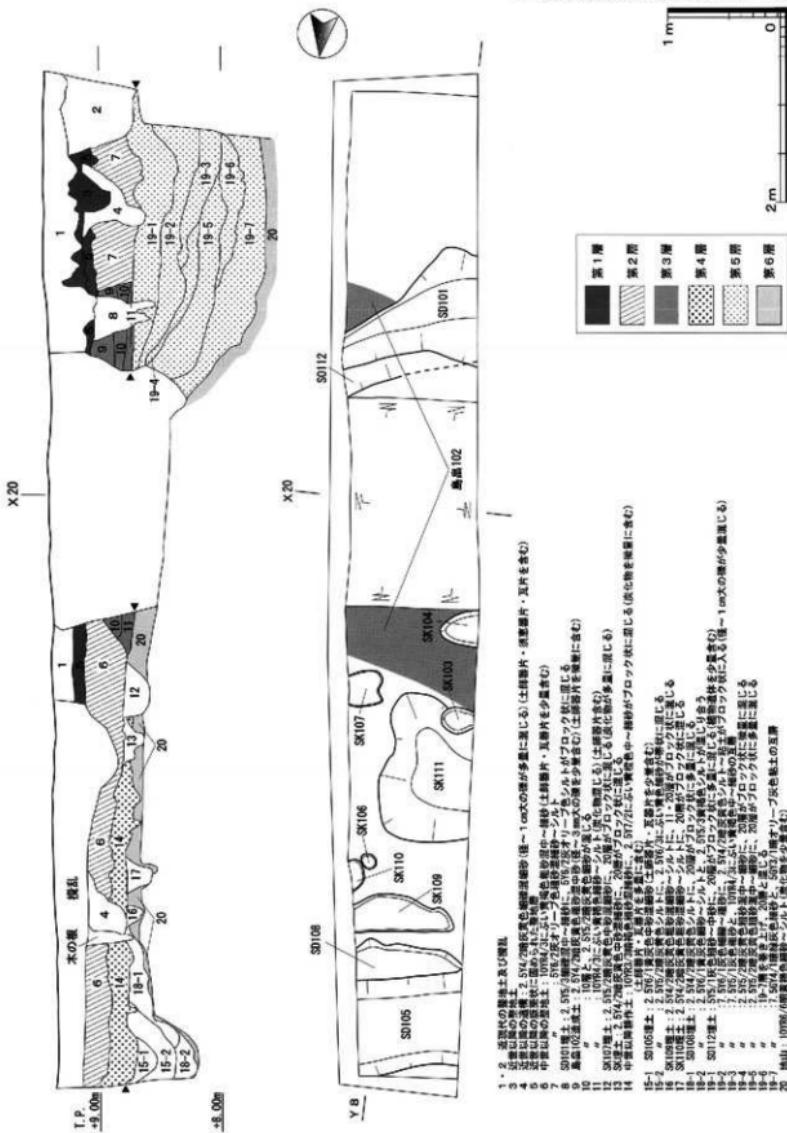
当該溝は、幅0.4～1.25m前後、検出深度0.5m前後で、単一層の埋土をもつ。東西方向より南に25°傾きをもつ。遺物は国産陶磁器・瓦器・土師器(小皿など)の碎片が出土した。廃絶時期は17世紀以降に比定できる。

島畠102 (第3図)

当該島畠は、平面掘削時には確認できず、東壁断面及び調査区中央部の確認調査(成海佳子2008)時に記録した西壁断面から、東西方向にのびる島畠の存在を確認した。

・第3層下面 [13～14世紀]

当該層を除去した面で土坑7基(S K103・104・106・107・109～111)・溝1条(S D105)を2A地区、落ち込み状遺構1つ(S O112)を3A地区で確認した。これらの遺構は、後世の土地利用によって攪拌及び削平を受けており、構築時の規模は不明である。当該面は、現地表面下約0.3～0.4m(T.P.+8.95m前後)地点に広がるものと推定できる。



第3図 1区断面図・平面図(S=垂直:1/40、水平:1/50)

S K103 (第4・5図)

当該土坑の平面形態は、西部は調査区外にのびるが、残存状況より、長径0.34m以上、短径0.27mの梢円形を呈すものと推測できる。検出深度0.34mで、単一層の埋土をもつ。遺物は瓦器(皿など)・土師器(小皿など)・須恵器などの碎片が出土した。このうち1を図化した。1は東播系須恵器の片口鉢で、復元口径35.5cm、残存器高4.0cmを測る。時期は13世紀前半に比定できる。

S K104 (第4・5図)

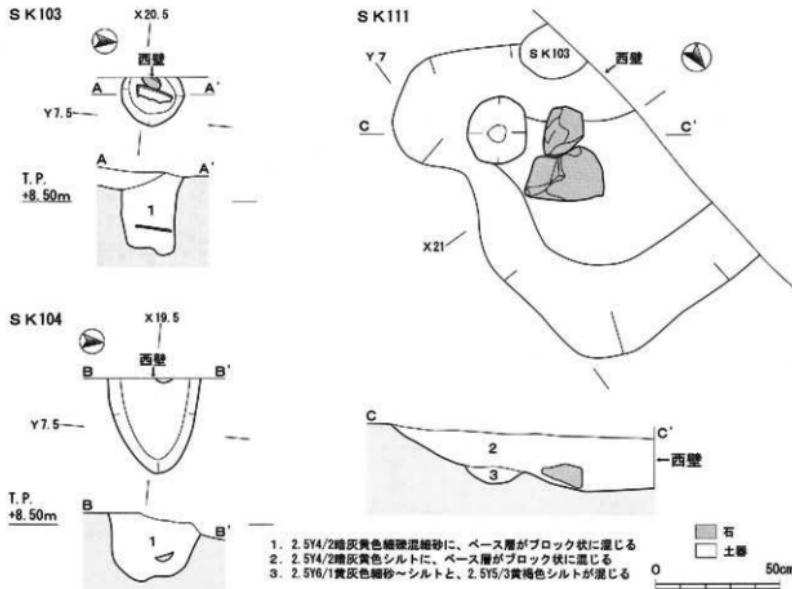
当該土坑の西側は調査区外にのびる為、平面形態は不明である。検出深度0.28mで、S K103・104の埋土と類似する単一層の埋土をもつ。遺物は瓦器(椀・皿など)・土師器などの碎片が出土した。このうち2を図化した。2は瓦器皿で、口径10.7cm、器高3.0cmを測るほぼ完形品である。時期は13~14世紀に比定できる。

S K106 (第3図)

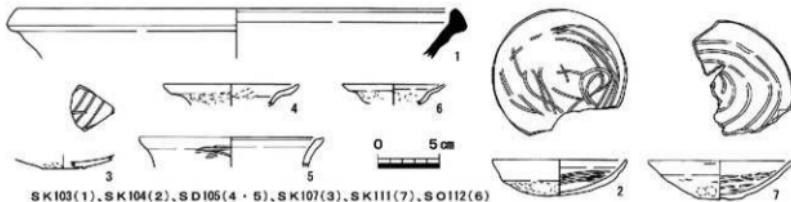
当該土坑の平面形態は、径0.16m前後の円形を呈す。検出深度0.75mで、単一層の埋土をもつ。遺物は出土しなかった。

S K107 (第3・5図)

当該土坑の東側は調査区外にのびる為、平面形態は不明である。検出深度0.2mで、単一層の埋土をもつ。遺物は瓦器(椀など)・土師器などの碎片が出土した。このうち3を図化した。3は瓦器椀で、復元底径3.2cm、残存器高1.1cmを測る底部片である。高台が形骸化することから、時



第4図 1区SK103・104・111平面図・断面図(S=1/20)



第5図 1区出土遺物実測図(S=1/4)

期は13世紀中頃(和泉型IV-2)に比定できる。

S K109 (第3図)

当該土坑の平面形態は、長辺1.22m以上、短辺0.38m前後の楕円形を呈す。検出深度0.13m前後で、単一層の埋土をもつ。遺物は瓦器・土師器などの碎片が出土した。

S K110 (第3図)

当該土坑の西側は調査区外にのびる為、平面形態は不明である。検出深度0.21m前後で、単一層の埋土をもつ。遺物は瓦器・土師器の碎片が出土した。

S K111 (第4・5図)

当該土坑の西側は調査区外にのびる為、平面形態は不明である。検出当初、染込み程度の遺構と思われたが、調査の結果、検出深度0.2mに及ぶ鉢状の遺構であることが判明した。遺構底部より、径0.2mと0.3m前後の石材が並んで出土した。この石材は目立った加工痕は見られず、用途は不明である。材質は石墨片岩または千枚岩。遺物は瓦器(椀など)・土師器(小皿など)・須恵器の碎片が出土した。このうち7を図化した。7は瓦器椀で、復元口径11.5cm、器高3.2cmを測る。調整は内面に粗い暗文が見られ、外面はナデ調整で終わる。また、高台が形骸化することから、時期は13世紀後半~14世紀前半(和泉型IV-3)に比定できる。当該土坑は、S K103に切られて検出したが、遺構埋土から出土した遺物について観察した結果、双方に時期差は見られなかつた。おそらく同一時期に帰属する遺構であった可能性が高い。

S D105 (第3・5図)

当該溝は、幅0.95m前後、検出深度0.5m前後で、埋土は2層に細分できる。東西方向より南に25°傾きをもつ。遺物は瓦器(椀など)・土師器(小皿・羽釜など)・瓦(軒平・平瓦など)の碎片が出土した。このうち4・5を図化した。4は土師器の小皿で、復元口径10.8cm、残存器高1.70cmを測る。口縁部に強いヨコナデが見られる。時期は14世紀中頃に比定できる。5は土師器の壺の口縁部で、復元口径14.8cm、残存器高2.5cmを測る。

S O112 (第3・5図)

当該落ち込み状遺構は、幅3.0m以上、深さ1.1m以上を測る。埋土の上層部は第6層がブロック状に混ざり、攪拌が目立つ。下層部はラミナが顕著に確認できた。遺物は土師器(小皿など)の碎片・片岩が下層部より出土した。このうち6を図化した。6は土師器の小皿で、復元口径8.7cm、器高1.5cmを測る。口縁部に強いヨコナデが見られる。時期は14世紀中頃に比定できる。

・第6層上面 [11世紀後半以降]

当該面を構築面とする溝1条(S D108)を2A地区で検出した。この遺構は、後世の土地利用

によって攪拌及び削平を受けており、構築時の規模は不明である。当該面は、現地表面下約0.6m(T.P.+8.76m前後)地点に広がるものと推定できる。

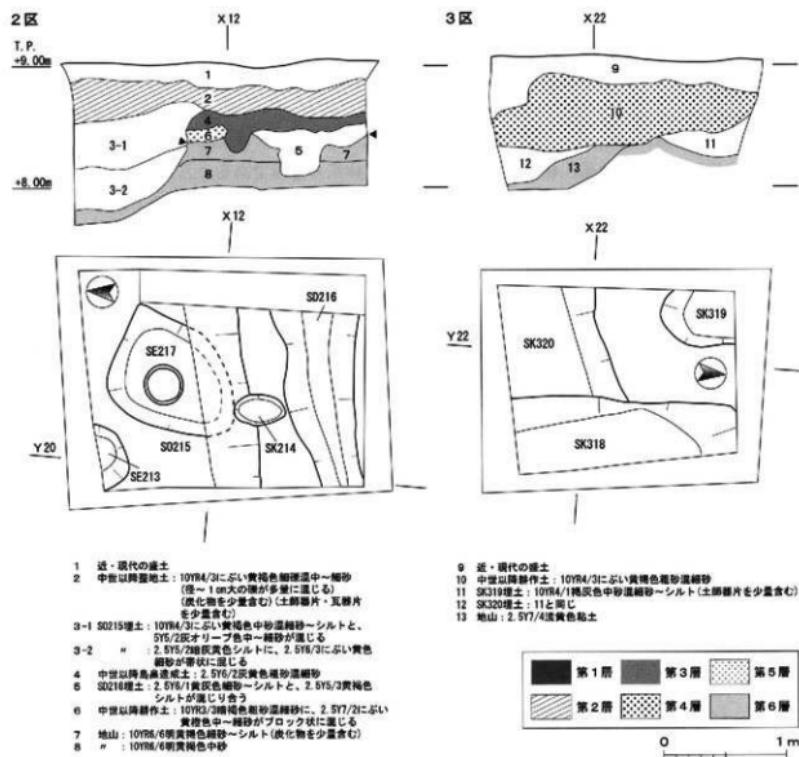
S D108(第3図)

当該溝は、幅0.43m以上、検出深度0.7m前後で、埋土は少なくとも2層に細分できる。東西方向にのび、後世に構築された遺構(S D105)に切られる。遺物は瓦器と土師器の碎片が出土した。

2区(第6図)

2B~C地区に設定した調査区である。調査は、現地表面(T.P.+9.0~9.05m)から約0.4mまで機械掘削し、人力掘削を約0.2m地点まで行った。

近現代の整地土層(第0層)を除去すると、中世以降の堆積土層(第2・3層)を確認した。調査区の東壁を観察したところ、第3層が第2層に削平されていることが確認できた。調査は、これらの層を全て除去した面(第6層上面)で遺構検出を行った。当該面で検出した遺構は、切り合



第6図 2・3区断面図・平面図(S=1/40)

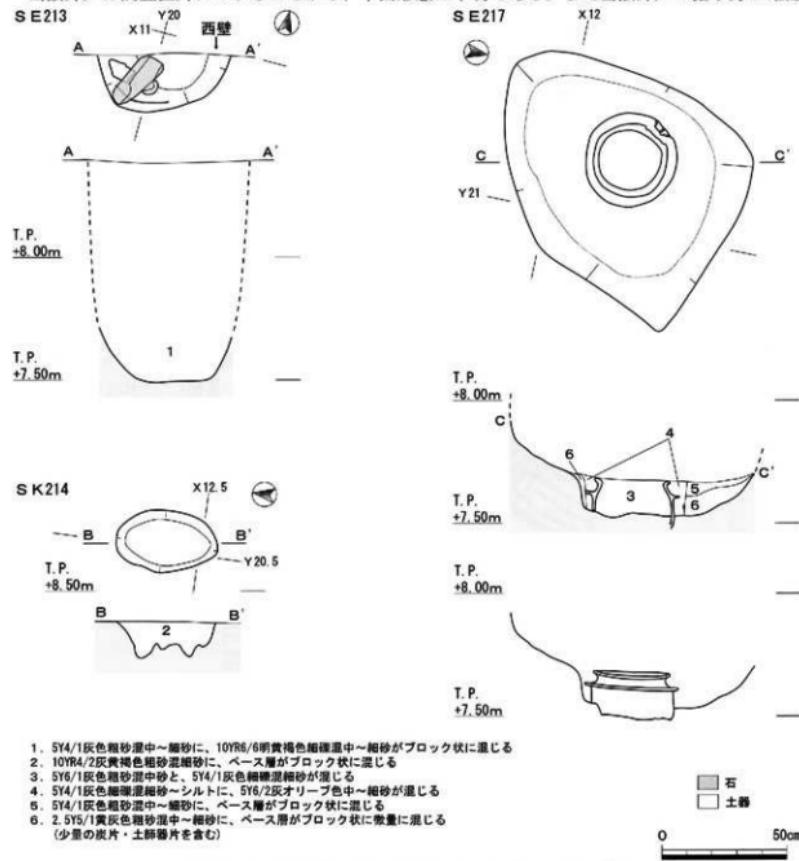
い関係や包含する遺物より、少なくとも2時期に細分することができた。以下、新しい時期の遺構から順に概要を述べたい。

・第2層下面〔15世紀後半以降〕

当該層を除去した面で、土坑1基(S K214)、落ち込み状造構1つ(S E215)を2C地区、井戸1基(S E213)を2B～C地区で確認した。これらの遺構は、後世の土地利用によって攪拌及び削平を受けており、構築時の規模は不明である。現地表面下約0.3～0.45m(T.P.+8.8m前後)地点に広がるものと推定できる。

S E213 (第7・8図)

当該井戸は調査区外にのびることから、平面形態は不明である。また当該井戸の掘り方は確認



第7図 2区S E213・217、S K214平面図・断面図(S=1/20)

することができなかった。検出した井戸側内に一部曲げ物の痕跡が確認できた。また井戸側埋土内より長辺0.25m、短辺0.2mを測る方形の石材と径0.1mを測る球形の石材が出土した。ともに加工痕などは見られず、廃絶期に廃棄されたものと推測できる。遺物は瓦質土器羽釜(16)が出土した。復元口径25.0cm、残存器高7.7cmを測る。やや内湾ぎみに立ち上がる口縁部をもち、口縁部に3段の括れをもつ。時期は15世紀後半(C-IV類)に比定できる。

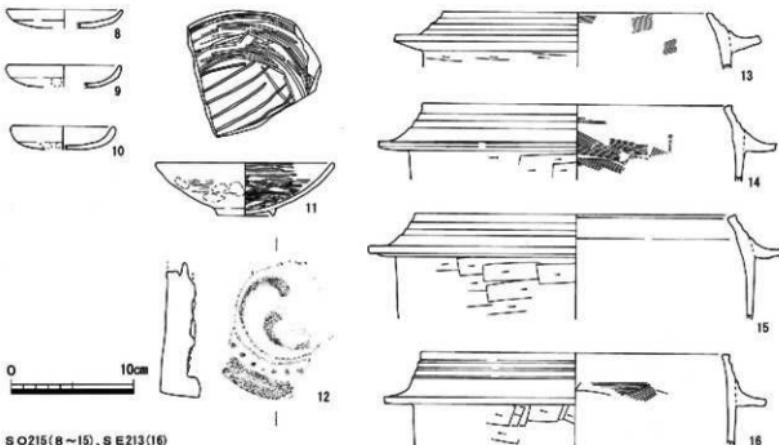
S K214 (第7図)

当該土坑の平面形態は、一辺0.25mの梢円形を呈す。検出深度0.15mで、単一層の埋土をもつ。遺物は瓦器(椀など)・土師器(皿など)の碎片が出土した。

・第3層下面 [13世紀後半~15世紀前半]

S O215 (第6・8図)

当該落ち込み状遺構は、北・東・西部が調査区外にのびる為、平面形態は不明である。検出深度0.75mで、埋土は2層に細分できる。埋土の上部は人為的な攪拌が顕著に見られ、下部は水平堆積であり自然な堆積と推察できる。遺物は瓦(軒丸など)・瓦質土器(羽釜など)・瓦器(椀など)・土師器(皿など)の碎片が出土した。このうち8~15を図化した。8~10は土師器の皿で、法量はそれぞれ復元口径9.4cm・9.0cm・8.3cm、器高1.5cm・1.8cm・1.9cmを測る。これらの時期は13世紀前半に比定できる。11は瓦器椀で、復元口径14.3cm、器高4.3cmを測る。高台がやや円形化し、調整についても外面のヘラミガキが部分的に施され、内面は見込み部に平行線状の暗文が見られる。これらの特徴から時期は13世紀前半(和泉型III-2)に比定できる。12は軒丸瓦で、残存状況より左巻三巴文と推測できる。外周線が消失しており、時期は14世紀中ごろ(室町時代前期)に比定できる。13~15は瓦質土器の羽釜で、法量はそれぞれ復元口径22.0cm・25.0cm・26.2cm、残存器高4.7cm・6.2cm・8.6cmを測る。内湾する口縁部をもち、口縁部に3段の括れをもつ。13は13世紀後半~14世紀前半(C-III類)、14・15は14世紀後半~15世紀前半(B-III類)、これらの遺物より



第8図 2区出土遺物実測図-1 (S=1/4)

当該遺構は、15世紀前半には廃絶していたものと推測できる。

・第6層上面〔13世紀中頃〕

当該面を構築面とする溝1条(S D216)を2B～C地区、井戸1基(S E217)を2C地区で確認した。これらの遺構は、後世の土地利用によって擾拌及び削平を受けており、構築時の規模は不明である。当該面は、現地表面下約0.45m(T.P.+8.55m)地点に広がるものと推定できる。

S D216(第6・9図)

当該溝は、幅0.73m前後、深さ0.4m前後を測る。東西方向より南に25°傾きをもつ。埋土の特徴や方向・位置関係から、1区で検出したS D108と同一遺構の可能性も考えられる。

遺物は瓦器(椀など)・土師器(皿など)・須恵器の碎片が出土した。このうち17～20・22・23を図化した。17～20は土師器の皿で、復元口径7.4cm・9.6cm・8.9cm・13.9cm、器高1.4cm・1.7cm・1.3cm・1.7cmを測る。時期は12世紀中ごろに比定できる。22は瓦器椀で、復元口径12.1cm、器高3.3cmを測る。口縁端部に段をもち、高台はその痕跡をわずかに残すのみである。時期は13世紀中頃(大和型III-C)に比定できる。23も瓦器椀で、復元口径15.1cm、器高3.4cmを測る。高台はかろうじて残るのみである。内面調整は見込み部にわずかに平行線状の暗文が見られる。時期は、13世紀中頃(和泉型IV-1)に比定できる。

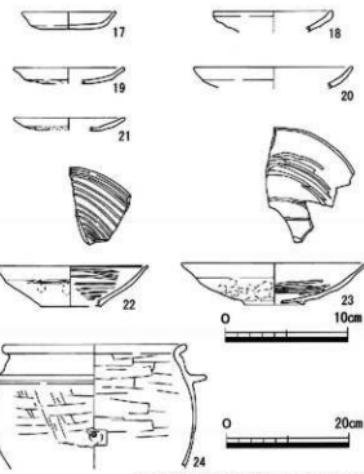
S E217(第7・9図)

当該井戸は、S O215埋土を全て除去したところ検出できた遺構であり、井戸の底部がわずかに残る状況であった。井戸側の状況を見ると、井戸側の一部に使用されていた土師質羽釜があり、周囲に曲げ物の痕跡が確認できた。遺物は瓦器・土師器(皿など)・須恵器の碎片が出土した。このうち21・24を図化した。21は土師器の小皿で、復元口径8.9cm、器高1.0cmを測る。時期は12世紀後半(III-2期)に比定できる。24は井戸側に使用されていた土師質羽釜で、口径29.0cm、残存器高20.4cmを測る。土師質羽釜は底部を意図的に欠いており、体部にも一箇所穿孔が見られる。時期は13世紀前半～中頃(III-1・2)に比定できる。

3区(第6図)

3C地区に設定した調査区である。現地表面(T.P.+9.1m前後)から約0.4～0.8mまで機械掘削し、人力掘削を約0.2m地点まで行った。

近現代の整地土層(第0層)を除去すると、中世以降の堆積土層(第3層)を確認した。調査は、これらの層を全て除去した面(第6層上面)で遺構検出を行った。当該面で検出した遺構は、切り合ひ関係や包含する遺物より、少なくとも2時期に細分することができた。以下、新しい時期の遺構から順に概要を述べたい。



S D216(17～20・22・23)、S E217(21・24)
第9図 2区出土遺物実測図-2 (S=17～23: 1/4, 24: 1/8)

・第0層下面〔15世紀以降〕

当該層を除去した面で土坑1基(S K318)を3C地区で確認した。この遺構は、後世の土地利用によって攪拌及び削平を受けており、構築時の規模及び機能時の使用方法は不明である。当該面は、現地表下0.1m(T.P.+8.93m前後)地点に広がるものと推定できる。

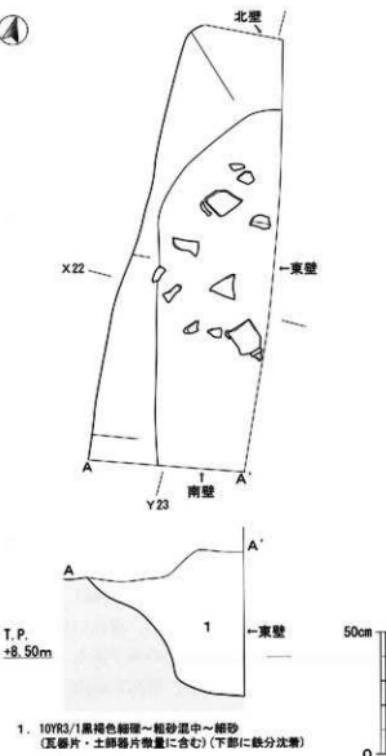
S K318 (第10・11図)

当該土坑の東・南部は調査区外にのびる為、平面形態は不明である。検出深度0.59mで、単一層の埋土をもつ。なお、埋土中のT.P.+8.45~8.77m地点から井戸側に使用したと推察できる瓦質の破片が多量に出土した。これらの碎片を精査したところ、筒型を呈する瓦質井戸側の底部片が2種類確認できた。このことから、少なくとも2個体の井戸側(37・38)が存在したと推測できる。37・38はそれぞれ底径68.8cm、70.0cmを測り、調整が内面にハケ、外面に板ナデを施す。他に遺物は、瓦質土器(羽釜・捕鉢など)・瓦器(碗など)・土師器(羽釜など)・瓦(平瓦)の碎片が出土した。このうち25~33・35・36を図化した。25~32は瓦質土器の羽釜で、法量はそれぞれ復元口径30.3cm・25.2cm・21.0cm・31.7cm・35.2cm・27.0cm・21.2cm・25.5cm、残存器高6.5cm・5.0cm・5.7cm・5.3cm・4.5cm・10.7cm・3.7cm・6.5cmを測る。内湾する口縁部

をもち、口縁部に3段の括れをもつ。25は15世紀後半(B-V類)、26・27は15世紀中頃(B-IV類)、28は14世紀後半~15世紀前半(B-III類)、29~32は15世紀後半(C-IV類)に比定できる。33は瓦質土器の捕鉢で、復元口径33.6cm、残存器高6.5cmを測る。調整は内面口縁端部より攝目が見られ、外面部にはヘラケズギが丁寧に施される。時期は14世紀後半~15世紀前半に比定できる。34は瓦器皿で、復元口径9.2cm、残存器高1.8cmを測る。調整は内面口縁部から底部まで密にヘラミガキが見られ、外面口縁部はヨコナデ、体部はナデが施される。35は土師器の羽釜で、復元口径25.0cm、残存器高4.2cmを測る。時期は13世紀後半~14世紀初頭(大和C型VI期)に比定できる。36は平瓦で、摩滅が著しい為、調整不明瞭である。以上、出土遺物及び井戸の形態(註2)より、15世紀後半以降に廃棄された井戸である可能性が高い。

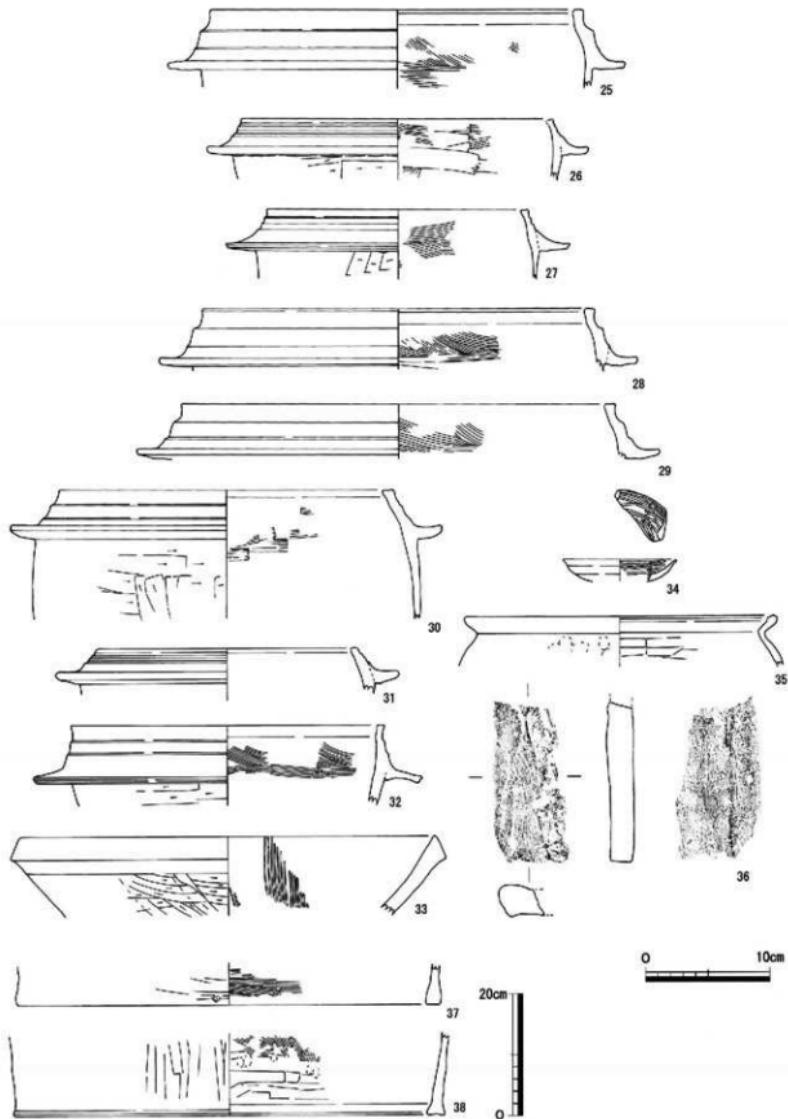
・第3層下面〔13世紀後半〕

当該層を除去した面で、土坑2基(S K319・320)を3C地区で確認した。これらの遺構は、後世の土地利用によって攪拌及び削平を受けている可能性が高く、構築時の規模は不明である。当



1. 10YR3/1黒褐色細緻～粗砂混じ細砂
(瓦器片・土師器片等量に含む)(下部に鉄分沈着)

第10図 3区S K318平面図・断面図(S=1/20)



第11図 3区SK318出土遺物実測図 (S=25~36:1/4, 37・38:1/8)

該面は、現地表面下約0.47m(T.P.+8.58m前後)地点に広がるものと推定できる。

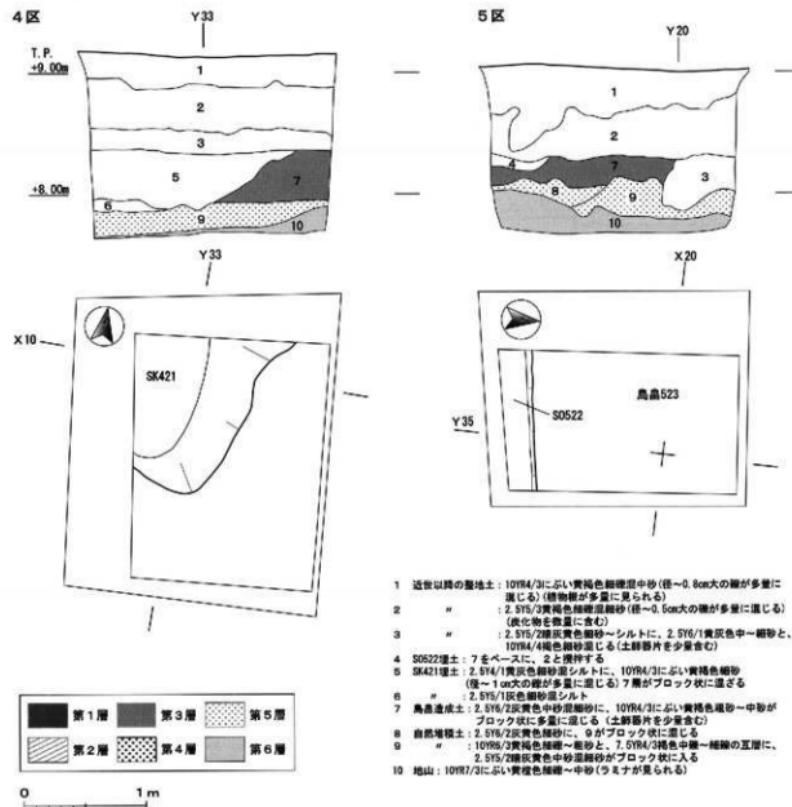
S K319(第6図)

当該土坑の北・西部は調査区外にのびる為、平面形態は不明である。検出深度0.2mで、単一層の埋土をもつ。遺物は瓦器・土師器の碎片が出土した。

S K320(第6図)

当該土坑の南・西部は調査区外にのび、東側はS K318に切られることから平面形態は不明である。検出深度0.3mで、単一層のS K319と同一の埋土をもつ。遺物は土師器の碎片が出土した。当該土坑及びS K319の廃絶期は13世紀後半以降と推測できる。

4区(第12図)



第12図 4・5区断面図・平面図(S=1/40)

1～2D地区に設定した調査区である。調査は、現地表面(T.P.+9.2m前後)から約0.8mまで機械掘削し、人力掘削を約0.1m地点まで行った。

近現代の整地土層(第0層)を除去すると、中世以降の堆積土層(第3層)を確認した。以下、当該層上面で確認した遺構について概要を述べたい。

・第3層上面〔15世紀前半〕

当該面を構築面として、土坑1基(S K421)を1～2D地区で確認した。当該面は、現地表面下約0.8m(T.P.+8.37m前後)地点に広がる。なお、他の調査区で堆積が確認できた中世耕作土は確認できず、第3層直下に第6層に対応すると推察できる堆積層を確認した。おそらく、中世以降の土地改変によって、大規模な削平を受けたものと推察できる。

S K421(第12・13図)

当該土坑の北・西部は調査区外にのびる為、平面形態は不明である。検出深度0.45mで、単一層の埋土をもつ。遺物は陶器・瓦質土器・土師器(小皿など)・須恵器(壺など)の碎片が出土した。このうち39～41を図化した。39は須恵器の壺で、復元口径19.8cm、残存器高4.2cmを測る。外面に自然釉が見られる。40は東播系須恵器の底部片で、復元底径10.0cm、残存器高3.3cmを測る。調整は内面に板ナデ、外面にタタキの痕跡が見られる。41は土師器の小皿で、復元口径13.4cm、残存器高1.6cmを測る。口縁部に強いヨコナデが見られる。時期は15世紀前半(V-3期)に比定できる。

5区(第12図)

2～3D地区に設定した調査区である。調査は、現地表面(T.P.+9.00m)から約0.6mまで機械掘削し、人力掘削を約0.1m地点まで行った。

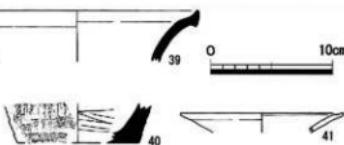
近現代の整地土層(第0層)を除去すると、中世以降の堆積土層(第3層)を確認した。以下、当該層上面で確認した遺構について概要を述べたい。

・第3層上面〔15世紀前半〕

当該面を構築面として、南方向に若干下る落ち込み状遺構(S O522)を2～3D地区で確認した。さらに西壁断面を観察したところ、調査区のはば全体に島畠(島畠522)が広がることが推測できた。なお、4区と同じく他の調査区で堆積が確認できた中世以降の盛土は確認できず、第3層直下に第6層に対応すると推察できる堆積層を確認した。おそらく、中世以降の土地改変によって、大規模な削平を受けたものと推察できる。

522島畠(第12図)

当該島畠は、東西方向にのびる。残存する島畠造成土第12図-7～9を観察した結果、人為的な攪拌の痕跡が顕著に見られる層(7)と、氾濫堆積物層(8・9)から構成されており、幅1.7m以上、厚さ0.5m以上を測る。遺物は土師器の碎片が出土した。



第13図 4区 S K421出土遺物実測図(S=1/4)

第3章 まとめ

今回の調査では、中世～近世に帰属する井戸・土坑・溝・島畠・落ち込み状遺構などが多数検出された。調査地の東半部(4・5区)は近世以降に広く土地利用による削平を受けており、検出遺構は、調査地の西半部(1～3区)に集中して検出された。以下、特筆すべき遺構について概要を述べたい。

1区北端部で検出した溝(S D108)は、埋土の特徴や包含する遺物の帰属時期から、2区南部で検出した溝(S D216)と同一遺構と推察できる。推定規模は、長さ17m以上を測り、当該溝が集落に関連する区画溝であったと考えられる。

1区南半部で検出した落ち込み状遺構(S O112)は、平面的に捉えた場合、3区でも当該落ち込み状遺構が確認できるものと思われたが、調査時には確認できなかった。事前に行われた確認調査(成海佳子2008)で検出された東側に落ち込む遺構埋土と類似することから、同一の遺構である可能性が高い。調査区を囲むようにカーブする堀の機能をもつ溝状遺構であった可能性も示唆できる。

これらの調査成果より、当該調査地一帯は、中世期は居住域として、近世期になると広く生産域として土地利用されていたことが明らかとなった。当調査地の南部で行われた既往の調査(⑩～⑫)でも、中世の井戸・土坑・溝などが多数検出されており、これらの調査地が位置する長瀬川から派生した自然堤防上は集落として広く繁栄していたことが再確認できた。

【註】

- 註1 (坂田育功2008)によると、この長瀬川から派生した自然堤防を、1時期に旧大和川の本流の1つと考える「欠作ルート」の存在を示している。
註2 瓦賀井戸舗を使用した井戸の初現は15世紀以降(鐘方正樹2003)であり、SK319もこの時期に相当すると推察できる。

【参考文献】

- 国土地理院 1983 「大阪東南部」[1:25,000土地条件図]
鐘方正樹 2003 「井戸の考古学 ものが語る歴史8」同成社
高萩千秋・米田敏幸 1983 「成法寺遺跡－八尾市光南町1丁目29番地の調査」八尾市教育委員会
棚橋利光・石部正志他 1989 「奈良街道」歴史の遺調査報告書第4集 大阪府教育委員会
成海佳子 2008 「2-9 成法寺遺跡(2007-202)の調査」「八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告57 平成19年度国庫補助事業 八尾市教育委員会

図 版



発掘作業風景



1区全景(北から)



1区SK107(西から)



1区SK103(東から)



1区SK111(南東から)



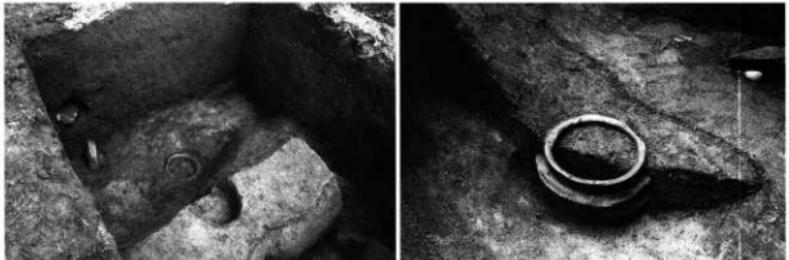
1区SO112断面(西北から)



2区全景(北東から)

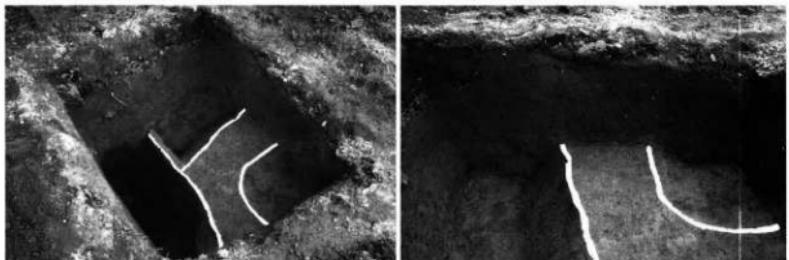


2区東壁断面(西から)



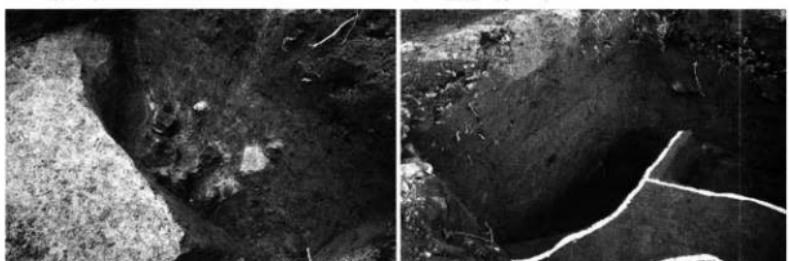
2区 S E217検出状況(南西から)

2区 S E217断面(北東から)



3区全景(北東から)

3区西壁断面(東から)



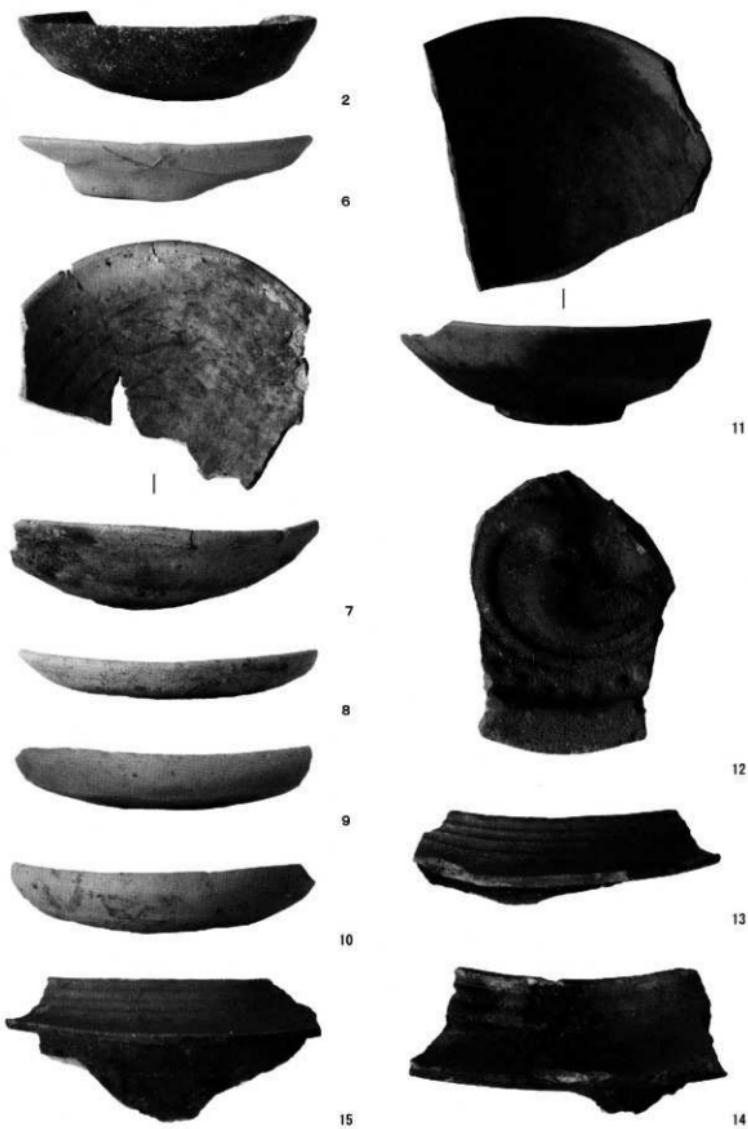
3区 S K318出土状況(南西から)

3区 S K318断面(北西から)



4区全景(南東から)

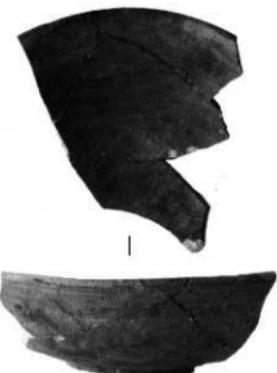
5区全景(北西から)



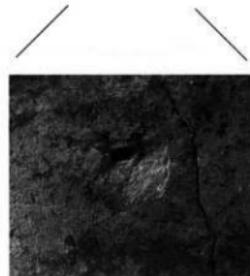
1区: SK104(2)、SO112(6)、SK111(7) 2区: SO215(8~15)出土遺物



16



23



穿孔部

24



25



26



27



28



29



30



31

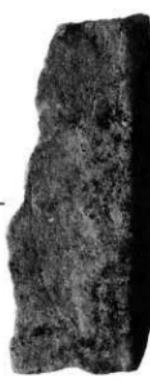


32

2区: SE213(16)、SD216(23)、SE217(24) 3区: SK318(25~32)出土遺物



33



36



35



40



—



37



—



38

3区 : SK318(33・35~38) 4区 : SK421(40)出土遺物

IV 東郷遺跡第68次調査（T G 2007-68）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市桜ヶ丘二丁目で実施した事務所建設に伴う東郷遺跡第68次調査(TG 2007-68)の発掘調査報告書である。
1. 調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成19年5月4日から6月21日(実働5日)にかけて成海佳子が担当者した。調査面積は約84m²である。現地調査においては、市森千恵子・鷹羽侑太・岩沢玲子・中浜輝志・中村百合が参加した。
1. 整理業務は、平成21年2月をもって完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－中村・村井俊子・永井律子、遺物トレース－徳谷尚子、デジタルトレース－成海、遺物写真撮影－北原清子、遺物写真図版－北原、遺構写真図版－成海が行った。
1. 本書の執筆は、3(2)は河村恵理、その他は成海、編集は河村が担当した。
1. 土器形式・縦年で基準とした文献については、P75・76に提示した。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	67
第2章 調査概要.....	68
第1節 調査の方法と経過.....	68
第2節 基本層序.....	69
第3節 検出遺構と出土遺物.....	72
第3章 まとめ.....	76

挿図目次

第1図 調査地周辺図.....	67
第2図 調査地設定図.....	69
第3図 調査地壁断面図.....	70
第4図 調査地平面図.....	71
第5図 遺構断面図.....	72
第6図 出土遺物実測図.....	73

写真目次

写真1 調査地遠景(東から).....	68
写真2 白玉(21)出土状況(西から).....	70

表目次

第1表 周辺の発掘調査一覧表.....	68
---------------------	----

図版目次

図版一 S D101	
S D103	
S D204、S P406	
S D305	
第4面全景	
図版二 第5層、S D103、S P412、S K409出土遺物	

第1章 はじめに

東郷遺跡は、八尾市中央部北寄りの北本町二丁目、光町一・二丁目、桜ヶ丘一～四丁目、本町一・七丁目、東本町一～五丁目、莊内町一・二丁目一带の東西・南北およそ1kmの範囲に展開する弥生時代中期～近世にかけての複合遺跡である。地理的には旧大和川水系の玉串川と平野川に挟まれた冲積地上に位置し、遺跡東端には、楠根川の旧河道がある。当遺跡周辺には、北に萱振遺跡、南東に小阪合遺跡、南に成法寺遺跡、西に宮町遺跡などが同様の立地条件で位置している。また、当遺跡範囲内東端には、東郷廃寺がある。当遺跡発見の契機は、1971(昭和46)年に東本町二丁目の光明寺裏で水道工事中に墨書き人面土器が出土したことによる。それ以後、近鉄大阪線高架化・八尾駅の移転・区画整理などに伴う開発も増加し、1981(昭和54)年以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの発掘調査が実施されている。これらの調査によって、弥生時代中期～古墳時代中期、平安時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物が検出されており、とくに古墳時代前期については、居住域・墓域・他地域の土器などの出土もあり、この時期を代表する遺跡といえる。

一方、調査地が位置する遺跡東部には平安時代から鎌倉時代にかけての「整地層」が認められており、層中には古墳時代～平安時代の遺物が多量に含まれている。遺跡東部に位置する東郷廃寺



第1図 調査地周辺図($S=1/2500$)

第1表 周辺の調査地一覧

※番号は地図と共通

番号	調査名(略号)	所在地 (丁目)	参考文献	調査期間
①	第6次(TG81-6)	桜ヶ丘2	角軒「秋1983 第8章 東郷遺跡周辺現状概要報告」[八尾市歴史文化財発掘調査報告書 1980・1981年度]八尾市教育委員会	19810725~19810808
②	東郷遺跡第23次(TG86-23)	莊内町1	角軒「秋1991 「第2章 第23次調査」[東郷遺跡第23次調査報告書 1~4尾市桜ヶ丘・酒匂所生1」大阪府教育委員会	19870216~19870318
③	大阪府87年度調査地	桜ヶ丘1	角軒「秋1990 「第1章 第87年度調査報告書 1~4尾市桜ヶ丘・酒匂所生1」大阪府教育委員会	198705~198711
④	第33次(TG90-33)	桜ヶ丘2	角軒「秋1999 「東郷遺跡第33次調査報告書 1~4尾市桜ヶ丘・酒匂所生1」大阪府教育委員会	19900410~19900510
⑤	第39次(TG92-39)	莊内町2	角軒「秋1993 「東郷遺跡第39次調査(TG92-39)」[田辺法人八尾市文化財調査報告書29]	19921001~1992107
⑥	第43次(TG93-43)	莊内町2	角軒「秋1994 「文部省東郷遺跡第43次調査(TG93-43)」[財团法人八尾市文化財調査報告書43]	19940110~19940126
⑦	第47次(TG94-47)	桜ヶ丘1	角軒「秋1995 「文部省東郷遺跡第47次調査(TG94-47)」[平成6年度(財)八尾市文化財調査報告書47]	19940801~19940930
⑧ 東郷遺跡	第48次(TG94-48)	桜ヶ丘1	角軒「秋1995 「文部省東郷遺跡第48次調査(TG94-48)」[平成6年度(財)八尾市文化財調査報告書48]	19941024~1994214
⑨	第52次(TG96-52)	桜ヶ丘1	角軒「秋1998 X-5 東郷遺跡第52次調査(TG96-52)」[財团法人八尾市文化財調査報告書52]	19961029~19961112
⑩	第55次(TG97-55)	莊内町2	角軒「2000 「官署跡遺跡市調査報告書(下 G99-35)」[財团法人八尾市文化財調査報告書55]	20000203~20000223
⑪	第58次(TG2002-58)	桜ヶ丘1	角軒「2002 「官署跡遺跡市調査報告書(上 G99-35)」[財团法人八尾市文化財調査報告書58]	20021202~20021224
⑫	(2002-345)	桜ヶ丘1	角軒「2004.6 反対運動(2002-345)の調査」[八尾市内遺跡平成12年度反対運動調査報告書]八尾市文化財調査報告書001	20030130
⑬	(2004-79)	莊内町2	角軒「2005.3 真理探求(2004-79)の調査」[八尾市内遺跡平成14年度反対運動調査報告書]八尾市文化財調査報告書002	20040708
⑭	(90-531)	桜ヶ丘2	角軒「2006.3 反対運動(2005-531)の調査」[八尾市内遺跡平成15年度反対運動調査報告書]八尾市文化財調査報告書003	19910422~19910501
⑮	(95-768)	桜ヶ丘2	角軒「2007.3 反対運動(2006-768)の調査」[八尾市内遺跡平成16年度反対運動調査報告書]八尾市文化財調査報告書004	19970325
⑯ 東郷寺	(TGT99-1)	桜ヶ丘2	角軒「2000 「東郷寺文化財調査報告書」[東郷寺文化財調査報告書1]八尾市教育委員会・八尾市文化財調査報告書005	19990906~19990916
⑰	八尾市85年度調査地	小阪合1	角軒「1985.4. 小阪合遺跡」[八尾市内遺跡第85年度外局調査報告書]八尾市文化財調査報告書006	19860207~19860208
⑲	第7次(TS86-7)	小阪合2	角軒「1986.5. 小阪合遺跡」[八尾市内遺跡第7次調査] [和田和牛年事務調査報告書] (財)八尾市文化財調査報告書007	19860105~19860808
⑳ 小阪合遺跡	センター-97~98年度調査地	若草町1	角軒「2000.1. 1. 進当と小阪合遺跡小阪合遺跡一帯の発掘調査報告書」[東郷寺文化財調査報告書008]	19971226~19981226

は、出土遺物から、7~8世紀に創建され、10世紀以降に廃絶したと考えられており、その廃絶と整地に何らかの関わりがあるものと考えられている。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は事務所建設に伴う調査で、当調査研究会が東郷遺跡内で行った第68次調査である。調査地の現状は駐車場であるが、それ以前は建物が建っており、事前に行った試掘調査では、3箇所の調査区(1~3区)のうち、北西の調査区(1区)のみで「遺物包含層=整地層」とよび遺構が検出された(樋口薫2008)。そこで、1区より西側の東西7m・南北12mの範囲を調査することとなった。調査地総面積は約84m²である。

調査に際しては、当初現地表下約0.7~0.9m([整地層]の上面)までを機械掘削、以下の0.3m前後([整地層])を人力掘削と予定していた。機械掘削を始めたところ、四周が建物建設・解体時

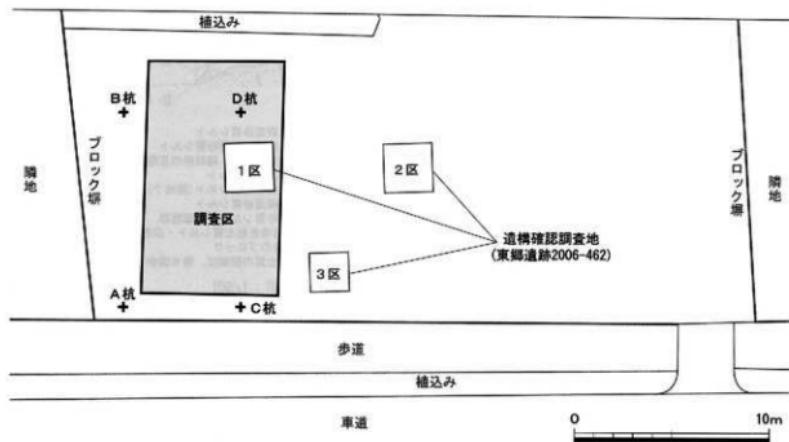


写真1 調査地遠景(東から)



河川

道路



第2図 調査地設定図(S=1/250)

に破壊されていたため、攪乱部分については現地表下1.5m程度までを先行して機械掘削とした。最終的には、南北方向の攪乱が2か所(調査区の西寄り・東端)、東西方向の攪乱が3箇所(調査区の北・中央・南)あり、その間に残った4箇所について、0.4~0.7mを人力掘削として調査を行った。

地区割については、調査区南西部に近接する地点にA杭、これを基点に、北へ10mの地点にB杭、さらにA杭から東へ5mの地点にC杭を打設し、調査を行った。

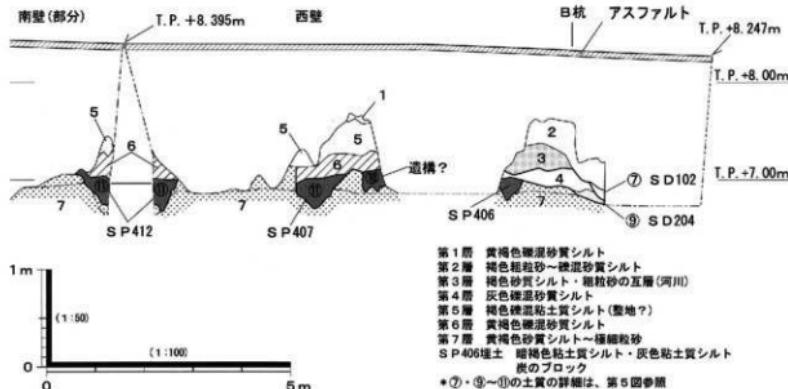
遺構名は、「遺構略号」+「三桁の通し番号」で表示し、三桁の通し番号は、前一桁で遺構検出番号(1~4面)、後二桁で遺構の検出番号を示す(例えば、第1面で検出された溝2は「S D102」)。

第2節 基本層序

前述のように、ほとんどが攪乱されていたため、良好な地層の観察はできなかったが、南側壁面西端および西側壁面を観察・図化・写真撮影した。狭小な調査区であったが、中央を東西に伸びる攪乱をはさみ、南北で層相は大きく異なっている。

第0層：既存建物建設および解体に伴う攪乱層。層厚0.4~1.5m、上面の標高はT.P. +8.2~8.4mで、南が高く北が低い。道路面からは0.3~0.4m高い。

第1層：黄褐色疊混砂質シルト、旧地表面であった耕土と考えられるが、西部でわずかに確認した。層厚は0.1m程度が遺存していた。



第3図 調査地壁面図(S=垂直:1/40、水平:1/50)

第2層：褐色粗粒砂-礫混砂質シルト、北部で確認した。層厚0.4m以上を測り、北へ落ち込む。この層下面でSD102を検出した。

第3層：褐色砂質シルト・粗砂の互層、層厚0.2~0.3m、2層同様北部で確認した。4・5層を切る河川堆積土と考えられ、2層によって削られている。遺物は、古墳時代後期以降の須恵器ほか平安時代以降の土師器や瓦器などの碎片が出土した。

第4層：灰色礫混砂質シルト、層厚0.10.2m、2・3層同様北部で確認した。北へ落ち込んでいる。この層下面でSD204を検出した。

第5層：褐色礫混粘土質シルト、層厚は0.4m前後、南部で確認した。当該層がいわゆる「整地層」で、固く叩き締められているようである。この層上面までを機械掘削とし、上面でSD101・103を検出した。遺物は、古墳時代中期～平安時代頃までの土器を多量に含んでおり、滑石製白玉もここから出土した。

第6層：黄褐色礫混砂質シルト、層厚0.2m
前後。5層同様、古墳時代以降の土器を含んでいる。この層上面では、
SD305を検出した。

第7層：黄褐色砂質シルト～極細粒砂、層厚0.2m程度までを確認した。この層上面でSP406～414を検出した。弥生時代後期～古墳時代の基盤となる層で、層中からは弥生時代中期の土器が出土している。

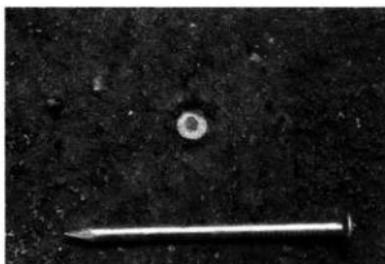
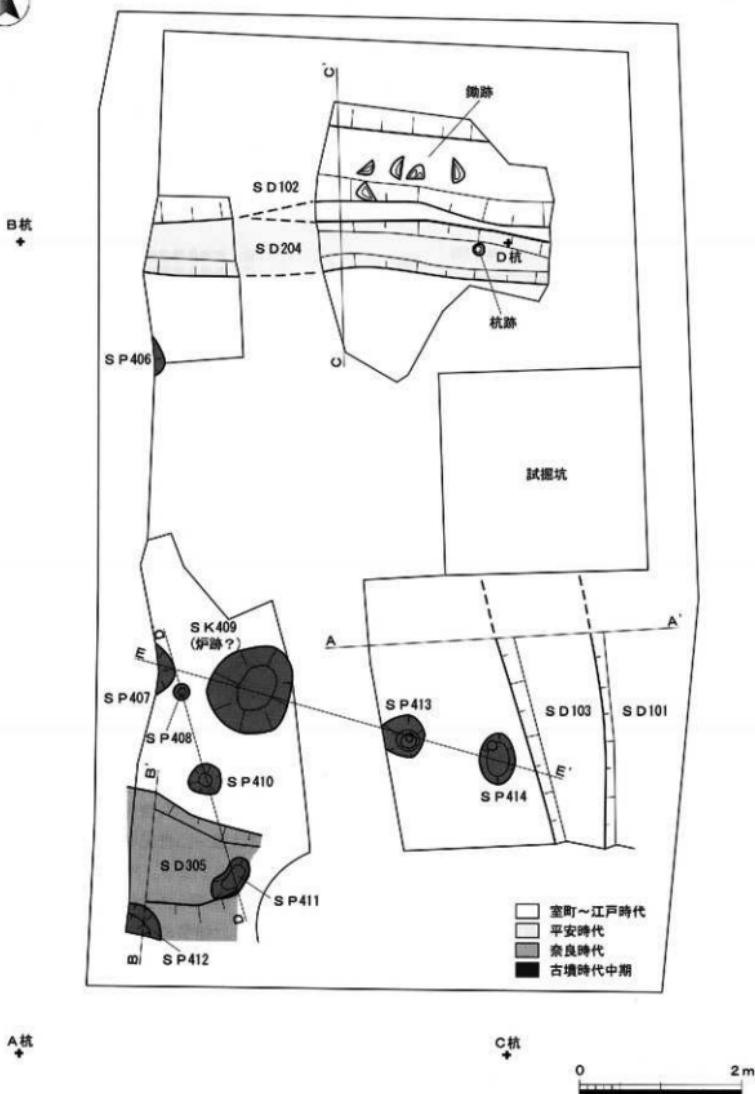
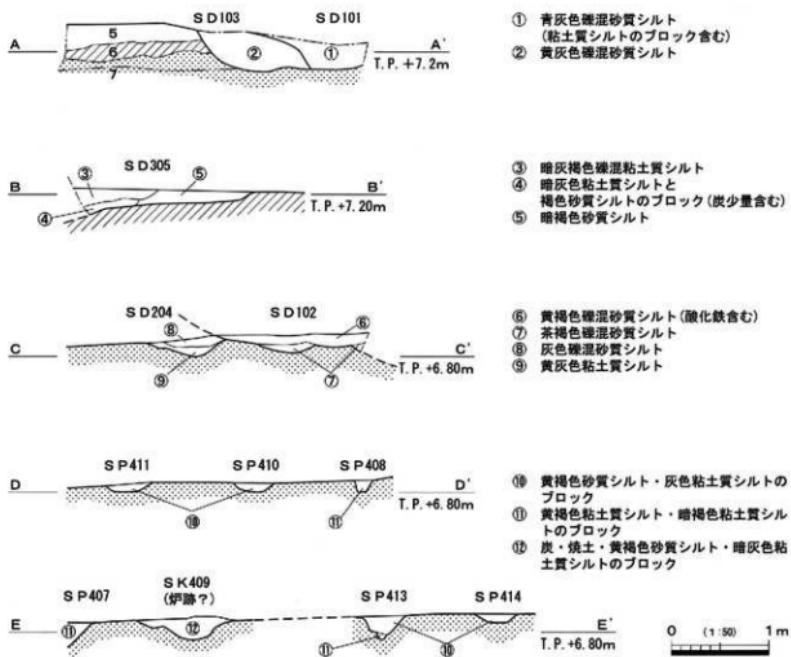


写真2 白玉(21)出土状況(西から)



第4図 調査地平面図(S=1/60)



第5図 遺構断面図(S=1/50)

第3節 検出遺構と出土遺物

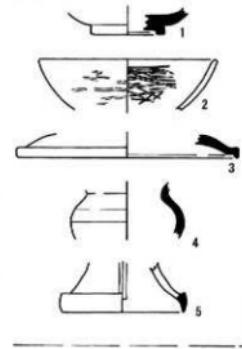
・第3層出土遺物

当該層は、第4～5層を切るように堆積した河川堆積物である為、層内より幅広い時期の遺物が出土した。このうち1～5を図化した。1は龍泉窯系青磁碗の高台部で、復元底径6.1cmを測る。内面見込みに目跡が見られる。疊付部に糸切り痕を残す。時期は12～13世紀頃に比定できる。2は黒色土器碗の口縁～体部片で、復元口径14.4cm、残存器高4.2cmを測る。内面に緻密なヘラミガキ、外面に省略化の目立つヘラミガキが見られる。内黒焼成。時期は10世紀後半(畿内系III類)に比定できる。3～5は須恵器で、3は杯B蓋で9世紀前後、4は精製の小形壺の体部で9世紀前半、5は高杯の裾部で5世紀後半にそれぞれ比定できる。5は4箇所に方形透かしが見られる。以上より、当該層は5世紀～13世紀まで時期差のある遺物を包含する。

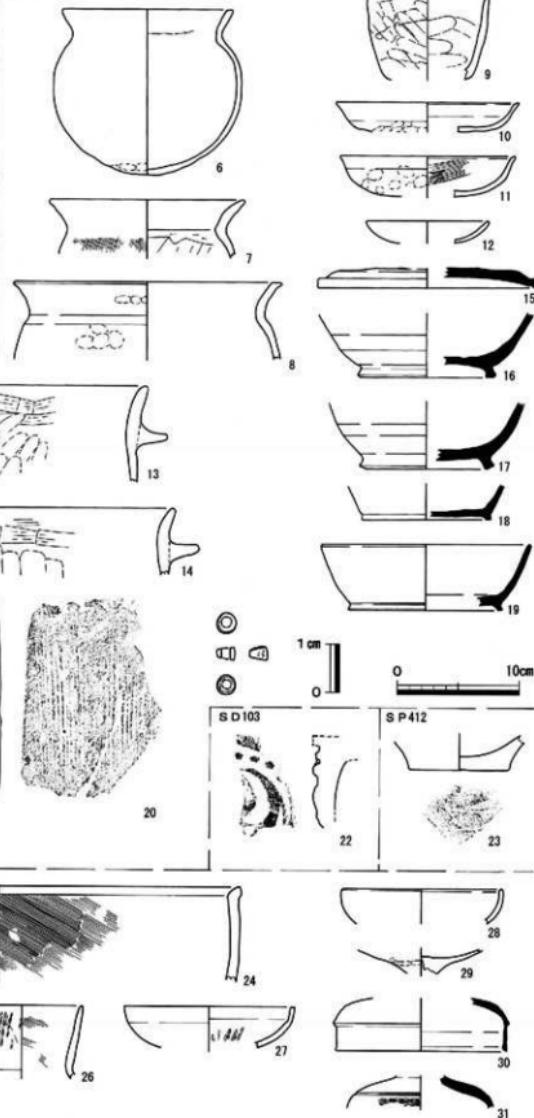
・室町時代～江戸時代(1・2層下面・4層上面・T.P. +7.0～7.4m)

S D101：調査区南東隅で検出した。ほぼ南北に伸びる。西でSD103を切っている。本来は2段の掘り形を有し、上段の幅0.6m・深さ10cm、下段の幅0.7m・深さ0.2m・検出長3.5mを検出した。底は平坦で高低差は0.15mあり、南が低い。埋土は①青灰色疊混砂質シルトで、粘土質シ

第3層



第5層



第6図 出土遺物実測図(S=1/4、白玉はS=1/1)

ルトのブロックを含む。近世の瓦片が出土している。

S D 103 : S D 101の西で検出した。ほぼ南北からやや西にふる。S D 101同様の検出状況で、検出幅1m・深さ0.4m・検出長3.5mを測る。高低差は0.1mで南が低い。埋土は②黄灰色礫混砂質シルトである。軒丸瓦・「へそ皿」のほか、土師器・須恵器・瓦器片が出土している。このうち22を図化した。22は巴文軒丸瓦で、時期は13世紀に比定できる。

S D 102 : 調査区北端で検出した。現地では4層上面で捉えたが、2層下面遺構である。東西に伸び、西部でS D 204を切っている。2段の掘り形を有し、上段の幅0.7~0.8m・深さ0.2m、下段の深さは0.1m以上である。南の肩から上段の底にかけて、鉛跡が遺存していた。埋土は⑥黄褐色礫混砂質シルト、⑦茶褐色礫混砂質シルトで、鉛跡内部には⑦が堆積している。⑥から古式土師器・土師器・須恵器、瓦器等の小片が出土しているが、近世の瓦も少量出土している。

・平安時代以降(4層下面 - T.P. +6.8~6.9m)

S D 204 : 調査区北部で検出した。幅0.7m・深さ0.25mを測る。東西に伸び、北の肩はS D 102に切られている。埋土は⑧灰色礫混砂質シルト、⑨黄灰色粘土質シルトである。東端に杭跡の小孔が残り、小孔内部には暗褐色粘土質シルトが堆積する。平安時代後期以降の土師器小皿・粗製の高杯等が出土した。

・第5層出土遺物

当該層から多量の遺物が出土した。このうち6~21を図化した。6~8は土師器の壺である。6と8は口縁端部に面をもち、内外面全体をナデで仕上げ、一部外面には指押さえの痕跡が見られる。7は内面にヘラケズリ、外面にハケ目が見られる。ともに時期は8世紀前半に比定できる。9は製塙土器で、復元口径9.7cm、器高6.7cmを測る。丸底をもち、内外面全体を指ナデによって仕上げる。接合痕が顕著に見られる。時期は8世紀前半(平安時代初頭)に比定できる。10~12は土師器杯Aである。時期は9世紀中頃に比定できる。13・14は土師質羽釜で、復元口径27.0cm・31.8cmで、残存器高2.9cm・5.5cmをそれぞれ測る。時期は8~9世紀に比定できる。15は須恵器の杯B蓋、16・17は須恵器の壺底部、18・19は削り出し高台をもつ須恵器の杯Bで、内外面全体に回転ナデが見られる。時期は9世紀中頃に比定できる。20は平瓦の碎片で、凹凸面ともにナデにより仕上げるが、凹面に布目痕、凸面に繩目タタキ痕を残す。時期は13~14世紀に比定できる。21は滑石製白玉で、径0.4cm、高さ0.3cm以下、孔径0.2cmを測る。側面に縦方向の擦痕が見られる。

・奈良時代以降(6層上面 - T.P. +7.2m前後)

S D 305 : 調査区南西端で検出した。東西からやや南にふる。2段の掘り形を有し、上段の幅0.8~1.3m・深さ0.15m、下段の幅0.1~0.4m・深さ0.1m程度を測る。埋土は③暗灰褐色礫混粘土質シルト、④暗灰色粘土質シルトと褐色砂質シルトのブロック、⑤暗褐色砂質シルトである。おもに③から奈良時代以降の土師器杯・壺、黒色土器(A類)杯等が出土した。

・古墳時代中期(6層上面 - T.P. +6.8~7.2m)

S P 406 : 調査区北西部で検出した。最大検出幅0.5m・深さ0.25mを測る。埋土は⑬暗褐色粘土質シルト・灰色粘土質シルトのブロックで、炭片を含む。

S P 407 : 調査区南西部で検出した。最大検出幅0.95m・深さ0.3mを測る。埋土は⑪黄褐色粘土質シルト・暗褐色粘土質シルトのブロックである。

S P 408 : 調査区南西部、S P 407の南東で検出した。径0.2m・深さ0.2m、埋土は⑪である。

S K 409：調査区南西部、S P 407・408の東で検出した。長径1.15m・短径1.0m・深さ0.25mを測る。埋土は⑫炭・焼土・黄褐色砂質シルト・暗灰色粘土質シルトのブロックである。内部からは、古墳時代中期(5世紀中葉)の土師器高杯・小型甕・瓶または鍋・鉢・須恵器杯身・瓦泉、製塙土器等が出土しているが、すべて二次焼成を受けている。このうち24~31を図化した。24は土師器の甕で、復元口径39.6cm、残存器高7.8cmを測る。内外面全体に丁寧にハケ目調整を施す。25は土師器で、手づくねの甕である。復元口径10.8cm、残存器高5.1cmを測る。体部から内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。調整は内面に指ナデ、外面にハケ目のちナデが見られる。26は土師器の短頸壺で、復元口径9.8cm、残存器高5.9cmを測る口縁部～頸部である。調整は内面にハケ目のちナデ、外面にハケ目のちヘラミガキが見られる。27・28は土師器の高杯で、復元口径14.0cm・13.0cm、残存器高3.3cm・2.9cmの杯部である。調整は内外面全体にナデ、27は内面に放射状の暗文が見られる。29は土師器の高杯で、杯部の底部が残存する。脚部接合時の指押さえ痕や棒状の刺突痕が顕著に見られる。30は須恵器の杯蓋で、復元口径14.0cm、残存器高4.3cmを測る。ほぼ垂直の口縁部をもち、端部に面をなす。31は須恵器の瓦泉で、体部上半が残る。ともに焼成良好。30・31はTK23型式に属する。以上の出土遺物より、当該土坑は5世紀中葉に廃絶したものと推測できる。

S P 410：調査区南西部、S P 407~408・S K 409の南で検出した。径0.4m前後・深さ0.1mを測る。埋土は⑩で、炭片を少量含む。

S P 411：調査区南西部、S P 410の南南東で検出した。長径0.65m前後・短径0.3m・深さ0.1mを測る。埋土は⑩である。

S P 412：調査区南西端、S P 411の南西で検出した。最大検出幅0.85m・深さ0.45mを測る。埋土は⑪で、柱痕が見られる。

S P 413：調査区南部中央、S P 409の東南東で検出した。長径0.6m・短径0.5m・深さ0.3mを測る。中央部には柱痕の窪みがある。埋土は⑩・⑪である。⑩から古式土師器片が数点出土している。

S P 414：調査区南東部、S P 410の東南東で検出した。長径0.65m、深さ約0.45m・深さ0.15mを測る。埋土は⑩である。古式土師器片が数点出土している。北西隅に北西へ倒れこむ柱痕が遺存している。

第3章 まとめ

今回の調査では、上部で平安時代～江戸時代、下部で古墳時代中期～奈良時代以降の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ2箱である。

上部の遺構は溝で、おむね東西・南北に伸びており、農事用・区画用のものと考えられる。層位の検証がしにくいが、北部では、第3層とした河川・S D102・204を境に「整地層」が見られず、そこより北では2層が落ち込んでいることから、整地時および整地後の土地利用の一端がうかがえる。調査地北側の道路が旧街道「立石嶺道」であることも関連しているのかもしれない。

古墳時代中期では、ピット群を検出した。遺物の出土量はわずかであるが、須恵器の特徴から5世紀中葉(ON46～TK208)の時期が与えられる。ピット群からは建物等は復元できなかったが、居住域に近接した遺構といえる。なかでも、SK409には、炭や焼土が多量に含まれ、土器類も火を受けていることから「焼土坑」と呼ぶのがふさわしく、「炉跡」の可能性もある。この時期の遺構は、当遺跡東部から小阪合遺跡北部一帯に広がっており、当地が東郷遺跡の南東端に位置していることから、小阪合遺跡との関連が明らかになった。

【参考文献】

橋口 黒2008「1~4東郷遺跡(2006~462)の調査」「八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告57 平成19年度国庫補助事業 八尾市教育委員会

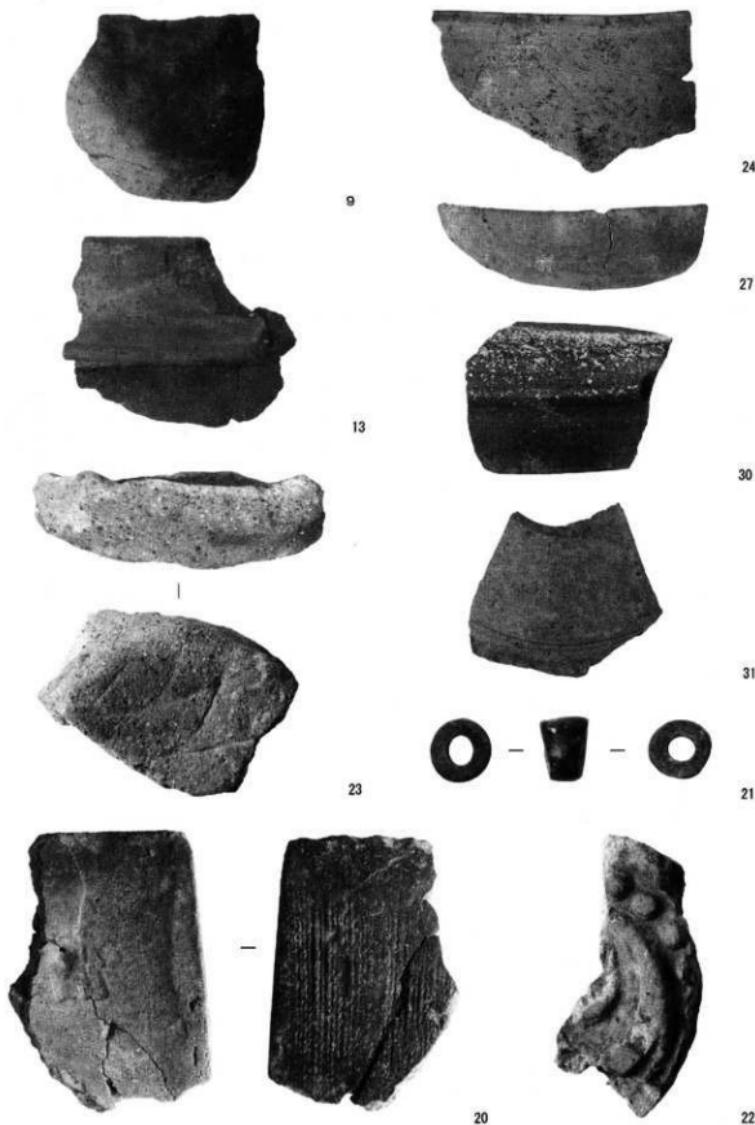
【遺物の参考文献】

尾上 実・森島康雄・近江俊秀1995「Ⅲ土器・陶磁器6. 瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
九州陶磁近世陶磁学会2000「九州陶磁の編年 -九州近世陶磁学会10周年記念-」
古代の土器研究会1993「古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ」
古代の土器研究会1994「古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ」
駒井正明1999「河内往生院出土瓦の編年とその歴史」『岩瀧山往生院六萬寺 上巻 -考古編』往生院六萬寺(財)大阪市文化財協会1982「長原遺跡発掘調査報告Ⅱ」
鶴柄俊夫1989「大阪府南部の瓦質土器生産について(1)」『大阪文化財論集-財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集-』(財)大阪文化財センター
立石賢志・鶴柄俊夫1995「Ⅲ土器・陶磁器 10瓦質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
百瀬正恒・近江俊秀1995「Ⅱ各地の土器様相7. 近畿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

図 版



圖版二
遺物



第5層(9・13・20・21)、SD 103(22)、SP 412(23)、SK 409(24・27・30・31)出土遺物

V 東鄉遺跡第69次調查 (T G 2007-69)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市北本町二丁目で実施した共同住宅建設に伴う東郷遺跡第69次調査(TG 2007-69)の発掘調査報告書である。
1. 調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成19年10月1日から10月15日(実働10日)にかけて成海住子が担当した。調査面積は約187m²である。現地調査においては、市森千恵子・飯塚直世・川崎純弘・竹田貴子・永井律子・中野一博・中村百合が参加した。
1. 整理業務は、平成21年2月をもって完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－中村・村井俊子・永井、遺物トレース－山内恵子、デジタルトレース－成海、遺物写真撮影－北原清子、遺物写真図版－北原、遺構写真図版－成海が行った。
1. 本書の執筆は成海、遺物説明及び編集は河村恵理が担当した。
1. 土器形式・編年で基準とした文献は、以下のとおりである。

川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
小浜 成2003「円筒埴輪の観察視点と編年方法」『埴輪論叢』第4号 塩輪検討会
田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店
原田昌則2003「第5章 遺構・遺物の検討」「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会報告74 財団法人八尾市文化財調査研究会

本　文　目　次

第1章　はじめに.....	77
第2章　調査概要.....	79
第1節　調査の方法と経過.....	79
第2節　基本層序.....	79
第3節　検出遺構と出土遺物.....	80
第3章.....	92

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	77
第2図	調査地設定図	79
第3図	北壁断面図、第1・2面平面図	81・82
第4図	遺構断面図	83
第5図	S D201、SK204出土遺物実測図	84
第6図	S D205出土遺物実測図①	85
第7図	S D205出土遺物実測図②	86
第8図	S D205出土遺物実測図③	87
第9図	S D205出土遺物実測図④	88

表 目 次

第1表	周辺の調査地一覧表	78
第2表	第1面検出遺構一覧表	80
第3表	第2面検出遺構一覧表	83
第4表	出土遺物観察表(1)	84
第5表	出土遺物観察表(2)	89
第6表	出土遺物観察表(3)	90
第7表	出土遺物観察表(4)	91
第8表	出土遺物観察表(5)	92

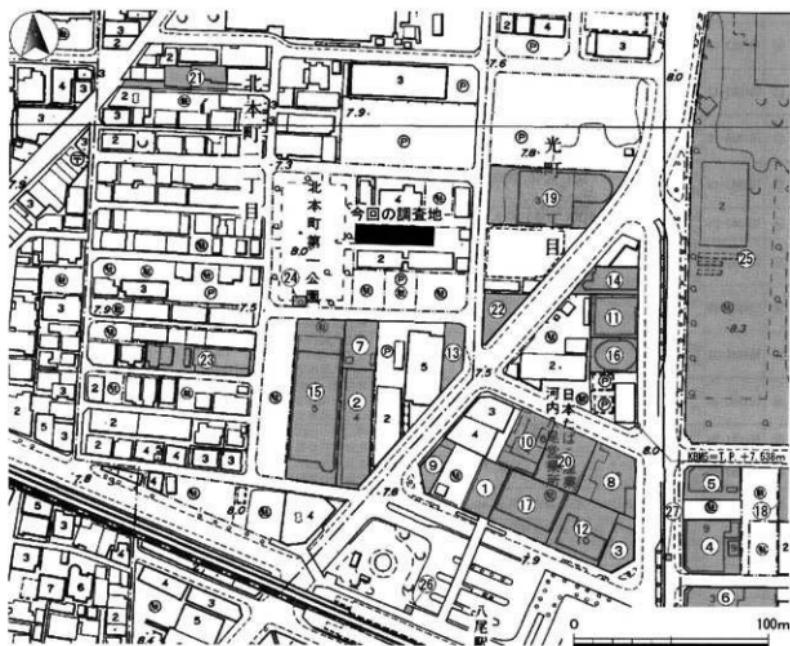
図 版 目 次

図版一	調査地遠景	図版二	C区 S D205遺物出土状況
	S E101断割り状況		A - A'断面
	第1面全景		B ~ D区第2面全景
	S D201掘削状況	図版三	S D201、SK204、S D205出土遺物
	S D201・202	図版四	S D205出土遺物
	S D201、SP203、SK204	図版五	S D205出土遺物
	S D205掘削状況	図版六	S D205出土遺物
図版二	B区 S D205遺物検出状況	図版七	S D205出土遺物
	B区 S D205遺物出土状況	図版八	S D205出土遺物
	A・B区第2面全景		

第1章 はじめに

今回の調査地は、東郷遺跡の西端に位置しており、付近では中世頃の耕作地のほか、南に位置する②・⑦・⑯調査地では古墳時代前期の沼沢地などが検出されており、東に位置する⑪・⑭調査地では古墳時代前期の墓域、⑯調査地では弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器群などを検出している。また、南西に位置する⑭調査地では、古墳時代後期の古墳副葬品と考えられる耳環や須恵器高杯などが出土している。以上の既往調査成果より、当該調査地が古墳時代を中心とする墓域に含まれる可能性が考えられた。

なお、当該遺跡の概要及び、当該遺跡発見の契機については、67頁の「IV 東郷遺跡第68次調査 1. はじめに」を参照していただきたい。



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

第1表 周辺の調査地一覧

略号:	検出遺構:	参考文献:
① TG1981-3	古墳前期(6.1m)~沼沢地、中世(6.2m)~畦畔2	高萩千秋1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書』1980~1981年度・八尾市教育委員会
② TG1981-4	古墳前期 - 井戸3・土坑1・溝1・小穴4、中世(6.3m)~畦畔	高萩千秋1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書』1980~1981年度・八尾市教育委員会
③ TG1981-5	古墳前期(6.2m)~堅穴住居1・掘立柱建物1・井戸5・溝18・小穴1・土坑11・中世~畦畔	高萩千秋1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書』1980~1981年度・八尾市教育委員会
④ TG1981-6	古墳前期(6.2m)~堅穴住居2・掘立柱建物10・溝16・小穴7・土坑13	高萩千秋1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書』1980~1981年度・八尾市教育委員会
⑤ TG1981-9	古墳前期(6.3m)~井戸2・溝3・土坑14、中世~溝2	高萩千秋1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書』1980~1981年度・八尾市教育委員会
⑥ TG1981-10	弥生(6.3m)~自然河川、古墳前期~土坑1・溝2、中世~溝5	高萩千秋1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書』1980~1981年度・八尾市教育委員会
⑦ TG1982-12	古墳前期(6.0m)~溝4・土坑3、平安末期(6.3m)~井戸1・中世(6.3m)~水田(小・溝)	高萩千秋1989「第1 東郷遺跡第12次調査」「昭和63年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会報告17(財)八尾市文化財調査研究会
⑧ TG1983-14	古墳前期(6.2m)~堅穴2・井戸1・土坑2・溝10・鍛冶(6.4m)~井戸3・土坑2・小穴2	高萩千秋1989「第1 東郷遺跡第14次調査」「昭和63年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会報告17(財)八尾市文化財調査研究会
⑨ TG1983-15	弥生中期(6.2m)~土坑2、古墳前期(6.3m)~沼沢地、平安後期(6.5m)~水田(小・溝)	高萩千秋1989「第1 東郷遺跡第15次調査」「昭和63年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会報告17(財)八尾市文化財調査研究会
⑩ TG1983-16	古墳前期(6.3m)~土坑7・溝6・小穴4、沼沢地、平安後期(6.6m)~水田遺構	高萩千秋1989「第1 東郷遺跡第16次調査」「昭和63年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会報告17(財)八尾市文化財調査研究会
⑪ TG1983-17	古墳前期(6.5m)~方形周溝墓1・上坑2・壺棺2、中世(6.8m)~小穴27	高萩千秋1985「第1 東郷遺跡発掘調査報告書」『八尾市埋蔵文化財発掘調査金銭割引制度』(財)八尾市文化財調査研究会報告6(財)八尾市文化財調査研究会
⑫ TG1984-18	室内式期(6.2m)~井戸1・土坑2・溝2、平安~鎌倉(6.5m)~土坑2	高萩千秋1989「第1 東郷遺跡第18次調査」「昭和63年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会報告17(財)八尾市文化財調査研究会
⑬ TG1989-19	古墳初頭(6.4~6.6m)~小穴8・溝15・土坑4、古墳後期~溝1	西村允子1986「第1 東郷遺跡の調査」『八尾市内連絡駅前の6年度実施調査報告書』八尾市文化財調査報告12号と60年度国庫補助事業八尾市教育委員会
⑭ TG1983-21	古墳以前(6.2m)~流路、古墳初頭(6.2m)~方形周溝墓1・土坑1、平安(6.3m)~溝1	赤坂敏幸1986「東郷遺跡第21次調査文化財発掘調査金銭割引制度」八尾市教育委員会
⑮ TG1987-25	平安後期(6.2~6.5m)~水田5筆(畦畔4)・平安~鎌倉前(6.5~6.6m)~井戸2・溝11、近世(6.6~6.8m)~井戸5	西村公助1985「第1 東郷遺跡(第25次調査)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告45」(財)八尾市文化財調査研究会
⑯ TG1988-28	布留式古相(6.25~6.35m)~溝1、平安後期(6.25~6.35m)~井戸1・土坑1・小穴4	西村公助1986「第1 東郷遺跡(第28次調査)」「八尾市文化財調査研究会年報 昭和65年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告25(財)八尾市文化財調査研究会
⑰ TG1989-31	古墳前期(6.2~6.3m)~土坑2・溝2・小穴5、近世(6.6m)~井戸1	黒田昌嗣1990「第1 東郷遺跡(第31次調査)」「八尾市文化財調査研究会年報 平成2年版」(財)八尾市文化財調査研究会報告28(財)八尾市文化財調査研究会
⑱ TG1990-35	店内式新相(6.2m)~堅穴住居2・土坑6・溝4・小穴10、近世(6.4m)~土坑2・溝4	井田典一1991「第1 東郷遺跡第35次調査(TG90-35)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会
⑲ TG1991-36	弥生時代後期(5.5~6.0m)~溝1・落込み2・河川1、古墳時代初期(5.8~6.2m)~溝4・落込み1	坪田真一1997「第1 東郷遺跡(第36次調査)」「財團法人八尾市文化財研究会報告67」(財)八尾市文化財調査研究会
⑳ TG1993-40	古墳前期(6.1~6.2m)~井戸1・土坑13・小穴31・溝44、近世(6.5~6.7m)~井戸7・溝1	高萩千秋1994「第1 東郷遺跡第40次調査」「財團法人八尾市文化財研究会報告42」(財)八尾市文化財調査研究会
㉑ TG1993-41	古墳前期(5.9m)~小穴5、鍛冶跡(6.8m)~河川1	高萩千秋1995「第1 東郷遺跡第41次調査」「財團法人八尾市文化財研究会報告42」(財)八尾市文化財調査研究会
㉒ TG1993-44	古墳前期(6.0~6.2m)~掘立柱建物1・井戸3・土坑5・小穴23・溝6、平安(6.3m)~土坑1・溝4・落込み1、近代(6.3m)~井戸1	坪田真一1998「第1 東郷遺跡(第44次調査)」「財團法人八尾市文化財研究会報告61」(財)八尾市文化財調査研究会
㉓ TG1996-53	弥生時代後期~古墳時代前期(7.2m)~土坑2・溝7・小穴12、平安時代初期~鍛冶跡(7.4m)~溝1	高萩千秋1998「第1 東郷遺跡(第53次調査)」「財團法人八尾市文化財研究会報告60」(財)八尾市文化財調査研究会
㉔ TG1997-54	弥生時代後期~古墳時代前期(6.1m)~土坑2・溝1、古墳時代後期(6.1m)~土坑1、平安時代初期(6.4m)~井戸1・溝1・落込み1	横口一彦2000「第1 東郷遺跡第54次調査」「財團法人八尾市文化財研究会報告65」(財)八尾市文化財調査研究会
㉕ TG2005-64	古墳時代前期~後期(7.2m)~土坑2・溝3・落込み4、平安時代前半~小穴69・井戸2・土坑1・中世~近世~耕作溝群・井戸50・土坑35・畦畔5	坪田真一・荒田裕弘・若井律雄・河村恵理2006「第2 東郷遺跡第64次調査(TG2005-64)」「平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
㉖ TG2005-65	古墳時代初期(6.3m)~落込み1、古墳時代中期(6.4m)~窓	川村和哉2007「第1 東郷遺跡(第65次調査)」「財團法人八尾市文化財研究会報告99」(財)八尾市文化財調査研究会
㉗ TG2005-66	なし	西村公助2007「第1 東郷遺跡(第66次調査)」「財團法人八尾市文化財研究会報告91」(財)八尾市文化財調査研究会
㉘ TG2007-69	今回の調査地	-

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

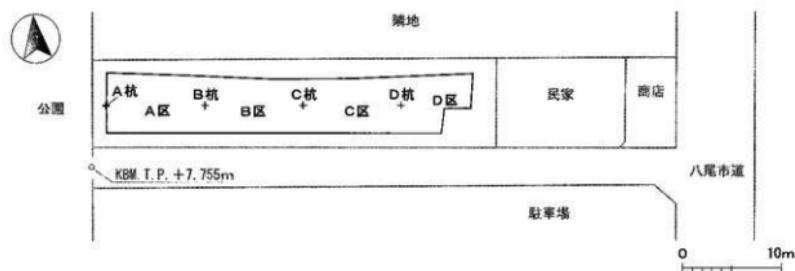
今回の調査は共同住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が東郷遺跡内で行った第69次調査である。調査地はいわゆる文化住宅を取り壊した跡地で、事前に実施した確認調査では、3箇所の調査区(1~3区)で古墳時代前~中期の遺構・遺物を検出したことから、ほぼ全域を調査することとなった。調査地総面積は約187m²である。

調査当初の予定では、古墳時代の遺構面のみを調査対象としたが、調査区西半分では、平安~鎌倉時代の遺構面も残存していた為、調査の対象とした。

掘削に際しては、現地表下約1.2~1.3mの平安~鎌倉時代の遺構面直上までを機械掘削、以下の0.3~0.5m前後を人力掘削として、遺構・遺物の検出に努めた。

地区割については、調査地西壁ライン上にA杭を打設し、これを基点に調査地南壁と並行するように東に10m間隔でB~D杭を順に打設し、各杭より東側をそれぞれA~D区と呼称した。

遺構名は、「遺構略号」+「三桁の通し番号」で表示し、三桁の通し番号は、前一桁で遺構検出面番号(1・2面)、後二桁で遺構の検出番号を示す。



第2図 調査地設定図(S=1/500)

第2節 基本層序

第0層：既存建物建設・解体に伴う搅乱・盛土層。層厚0.8~1.1m、上面の標高はT.P. +7.6~7.8mを測る。

第1層：青灰色礫混粘土質シルト、旧耕作土である。層厚は0.1~0.15m程度が遺存していた。旧地表面の標高はT.P. +6.9m前後を測る。

第2層：淡灰色礫混粘土質シルト、部分的に見られる。層厚は0.1m程度である。

第3層：茶褐色礫混砂質シルト、底土である。酸化マンガンを含む。層厚0.1~0.15mを測る。

第4層：茶褐色礫混粗砂、酸化鉄を含む。層厚0.1~0.15m、上面の標高はT.P. +6.7m前後を測る。この層上面が近世の遺構面で、井戸2基、小穴1個が構築されている。

第5層：淡褐色礫多量混粘土質シルト、平安~鎌倉時代の耕作土である。層厚は0.1~0.2m、この層上面で近世の遺構ほか、当該時期の耕作痕である溝5条を検出した。

第6層：灰色極細粒砂、層厚0.1~0.2m。古墳時代中期の遺構面で、溝2条が構築されている。

上面の標高はT.P. +6.4~6.6mで、北が高く南が低い。

第7層：青灰~黄灰色砂質シルト~極細粒砂、層厚0.1~0.2m。弥生時代終末期の遺構面で、土坑1基・小穴2個・溝6条が構築されている。

第8層：灰白色粗粒砂~疊、層厚0.2m以上。弥生時代後期以降の基盤となる層で、上面の標高はT.P. +5.8~6.2mで北が高く南が低い。

第3節 検出遺構と出土遺物

・第1面

江戸時代(第4層上面-T.P. +6.7m前後)

江戸時代の遺構(S E 101・102、S P 103)はすべて調査区西部で検出した。S E 101の井戸側は桶+瓦積みで、掘形の西寄りに据えられている。瓦は最下の1段分のみ遺存していた。桶二段分を確認しているので、深さは1.5m以上あるものと考えられる。井戸側内部から、合成樹脂・金属ゴミなどが出土している。S E 102は掘形のみの検出である。S P 103は2段掘りで、底は東が0.1m程度低い。いずれも埋土は4層を主体とするブロックからなる。

平安~鎌倉時代(第5層上面-T.P. +6.4m前後)

第5層上面は、北西部がT.P. +6.5m前後と1段高く、南東部はT.P. +6.3m前後を指す。ここでは溝6条(S D 104~109)を検出した。S D 104~108は東西方向、S D 109は南北方向に伸びる。S D 104は、断面の観察から調査地全域に伸びていることがわかる。S D 105~109の埋土はいずれも青灰色粘土質シルトを基本とする。

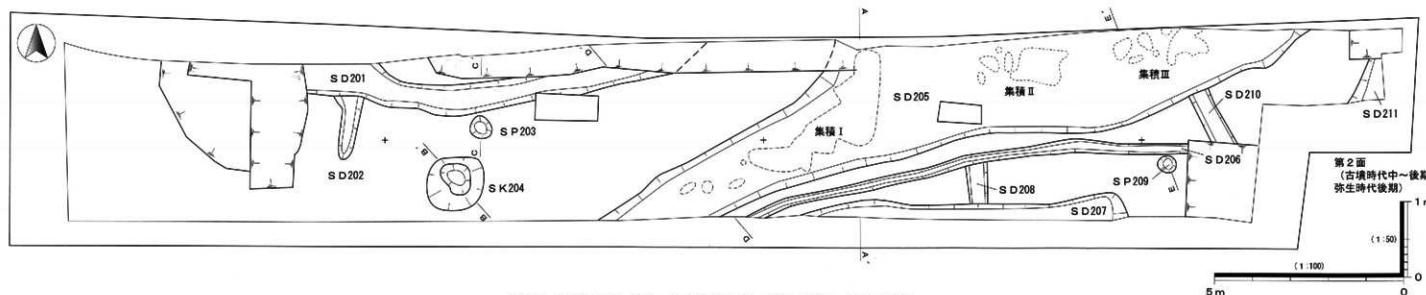
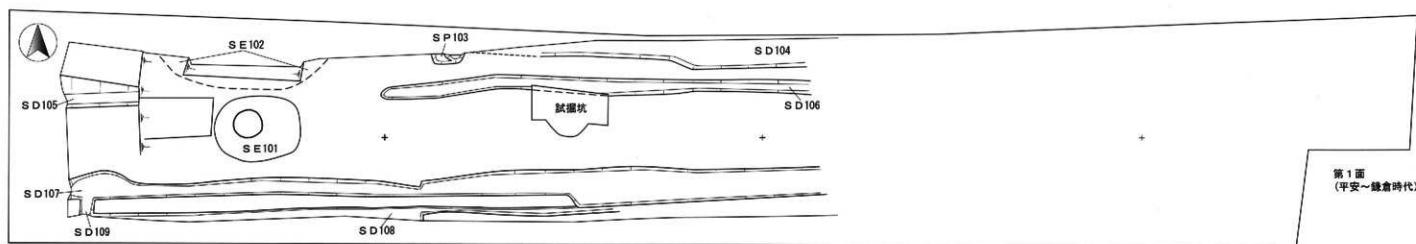
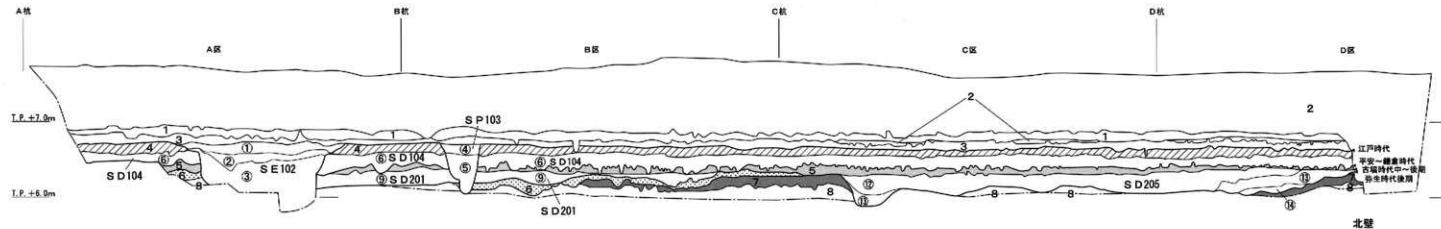
第2表 第1面検出遺構一覧表

遺構名	形状・方向	長・幅	深さ	埋土
S E 101	精円形	長径 2.3m 短径 1.8m	1.0m以上	①褐色粗粒砂に灰白色粘土質シルトのブロック ②茶褐色礫混粗砂に青灰色粘土質シルトのブロック
S E 102	-	4.5m	1.0m 以上	①茶褐色礫混粗砂に灰色砂質シルトのブロック ②茶褐色礫混粗砂に青灰色粘土質シルトのブロック ③黄褐色粗粒砂
S P 103	隅丸方形?	1.1m	0.65m	④茶褐色礫混粗砂と褐色砂質シルトのブロック ⑤茶褐色礫混粗砂と青灰色砂質シルトのブロック
S D 104	東西	1.0m以上	0.3m以上	⑥淡褐色~灰色極細粒砂~粗粒砂、5層のブロックが混入
S D 105	東西	0.9m	0.1m	⑦青灰色粘土質シルト
S D 106	東西	0.5m	0.15m	⑧青灰色礫混粘土質シルト
S D 107	東西	1.1m	0.15m	⑨青灰色粘土質シルト
S D 108	東西	0.4m以上	0.2m	⑩青灰色粘土質シルト
S D 109	南北	0.35m	0.15m	⑪青灰色粘土質シルト

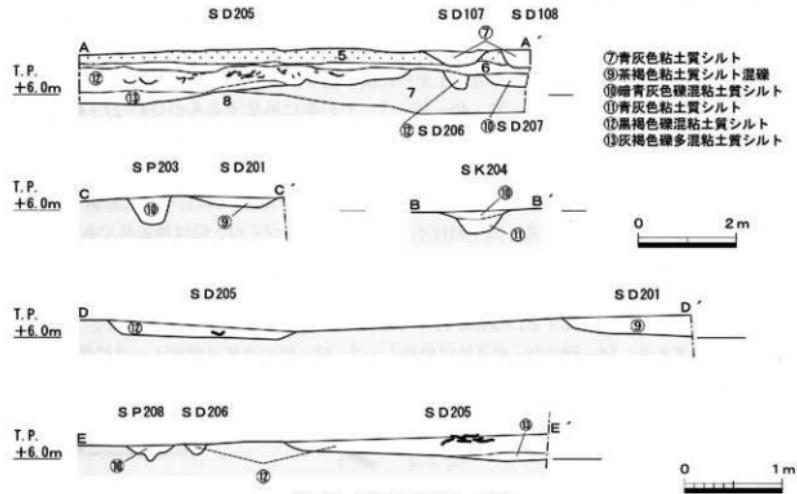
・第2面

古墳時代中~後期(第6層上面-T.P. +6.3m前後)

古墳時代中~後期の遺構は溝2条(S D 201・202)で、調査区西寄りで検出した。いずれも埋土は茶褐色粘土質シルト混疊である。S D 201は、西端をS E 102に、東端は側溝で切られているが、北へ緩く曲がるものと考えられる。内部から、埴輪・須恵器片が出土している。このうち、1~7を図化した。1・2は円筒埴輪の碎片である。2はタガの断面形態が台形で、外面に黒斑が見られる。3~7は須恵器で、3~5は杯身、6・7は高杯である。時期は6世紀後半(田辺編年TK43)に比定できる。



第3図 北壁断面図、第1・2面平面図 (S=水平:1/100、垂直:1/50)



第4図 遺構断面図(S=1/50)

第3表 第2面検出遺構一覧表

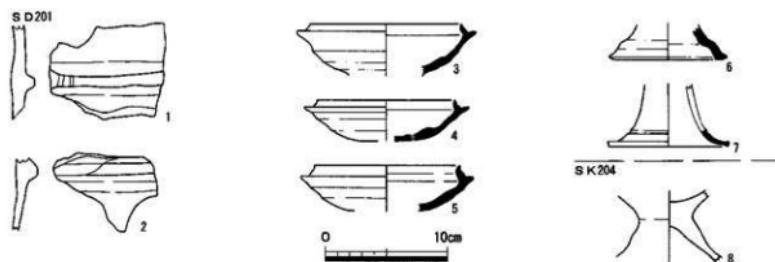
遺構名	形状・方向	径・幅	深さ	埋土
S D201	東西 (北へ曲がる)	0.9m以上	0.25m	⑨茶褐色粘土質シルト混雜
S D202	南北	0.8m	0.1m	⑨茶褐色粘土質シルト混雜
S P203	楕円形	長径 0.60m 短径 0.55m	0.65m	⑩暗青灰色礫混粘土質シルト
S K204	扇丸方形	一辺 1.5m	0.3m	⑪青灰色粘土質シルト ⑫灰褐色粘土質シルト
S D205	南西-北東	1.9~4.0m	0.4~0.5m	⑫黒褐色礫混粘土質シルト ⑬灰褐色礫多混粘土質シルト ⑭灰褐色粘土質シルトと黄褐色シルト～板細粒砂のブロック
S D206	東西 (北に振る)	0.5m	0.15m	⑫黒褐色礫混粘土質シルト
S D207	東西	1.1m	0.15m	⑮青灰色礫混粘土質シルト
S D208	南北	0.4m以上	0.2m	⑯青灰色礫混粘土質シルト
S P209	楕円	0.35m	0.15m	⑰青灰色礫混粘土質シルト
S D210	南北-北西	0.6m	0.15m	⑲青灰色礫混粘土質シルト
S D211	南北 (東に振る)	0.8m以上	0.2m	⑳黒褐色礫混粘土質シルト

弥生時代後期(第7層上面-T.P.+6.2m前後)

弥生時代後期の遺構は土坑1基(S K204)、小穴2個(S P203・209)、溝6条(S D205~208・210・211)である。埋土は主に青灰色・黒褐色礫混粘土質シルトからなる。なかでもS D205からは、夥しい量の弥生時代終末期の土器・石器類が出土した。S D205は、調査区中央南端から北東方向へ伸びるもので、北肩の側溝部分では著しく落ち込んでおり、ここから分岐するかもしれない。土器は概ね3つのグループに分かれて集積しており、個体数は100個を超える。

8~67を図化した。8はS K204、9~67はS D205からそれぞれ出土した。8は弥生土器の台付鉢または小形器台で、弥生時代後期後半~古墳時代初頭(原田編年様相2~4)に比定できる。

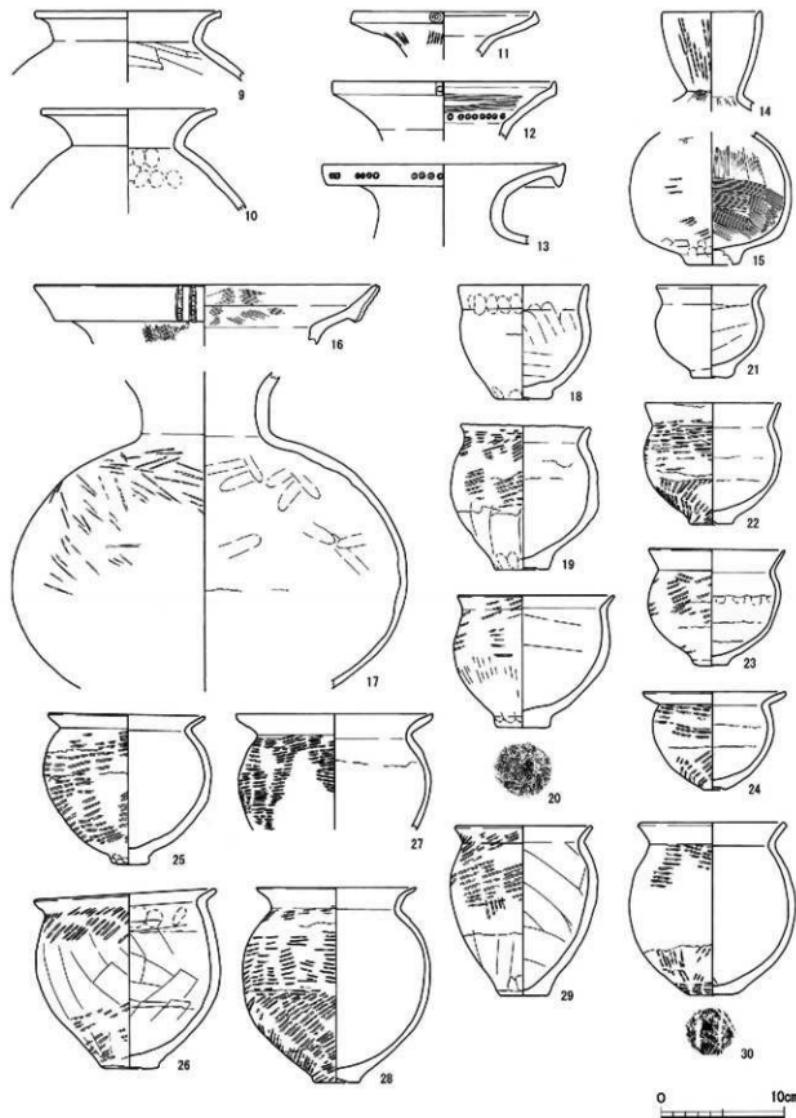
12・16はともに弥生土器の壺で、口縁部外面に棒状浮文が見られ、胎土の特徴から東海方面からの搬入品と考えられる。18~30は全て器高16cm以下の小形壺、31~50は器高16cm以上の壺である。口縁部の形態を観察すると、体部から立ち上がった後、緩やかに外反するもの(28・31~39)、体部から緩やかに外反するもの(18~23・40~45)、「く」の字に外反するもの(24~27・46~48)、内湾気味に立ち上がるものの(49・50)に分類できる。20・51・52・57については、底部外面に(木葉痕?)もしくはヘラ状工具による線刻文が顕著に見られる。18~50の壺について、内外面の調整を観察した結果、内面にヘラケズリを施す壺は確認できなかった。ともに古墳時代初頭(様相4)以前に含まれるものと推察できる。52・53は小形鉢で、52は手づくね、53は精製品である。54・55は大形鉢、54は様相1~2、55は様相2~3に含まれる。56・57は鉢で様相2、58・59は有孔鉢で様相2~3に含まれる。60・61は台付鉢で、60は手づくねである。口縁端部は摩滅などによつて不明瞭であり、さらに外反する口縁部が付く可能性も考えられる。62~65は高杯で、ともに様相1~2に含まれる。56~59の鉢・有孔鉢は様相1~3、62~65の高杯は様相1~2に含まれる。67は石で、大半が破損しており、本来の法量は不明である。工具などによる加工痕は見られない。



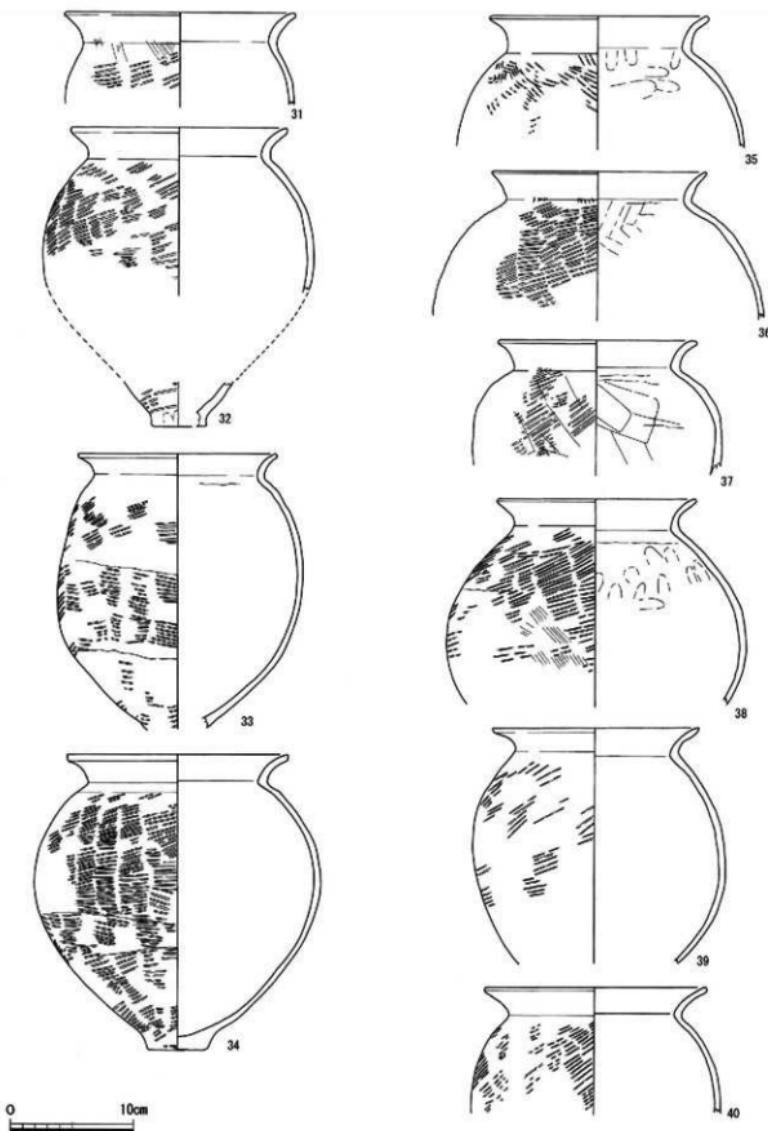
第5図 S D201、S K204出土遺物実測図(S=1/4)

第4表 出土遺物観察表(1)

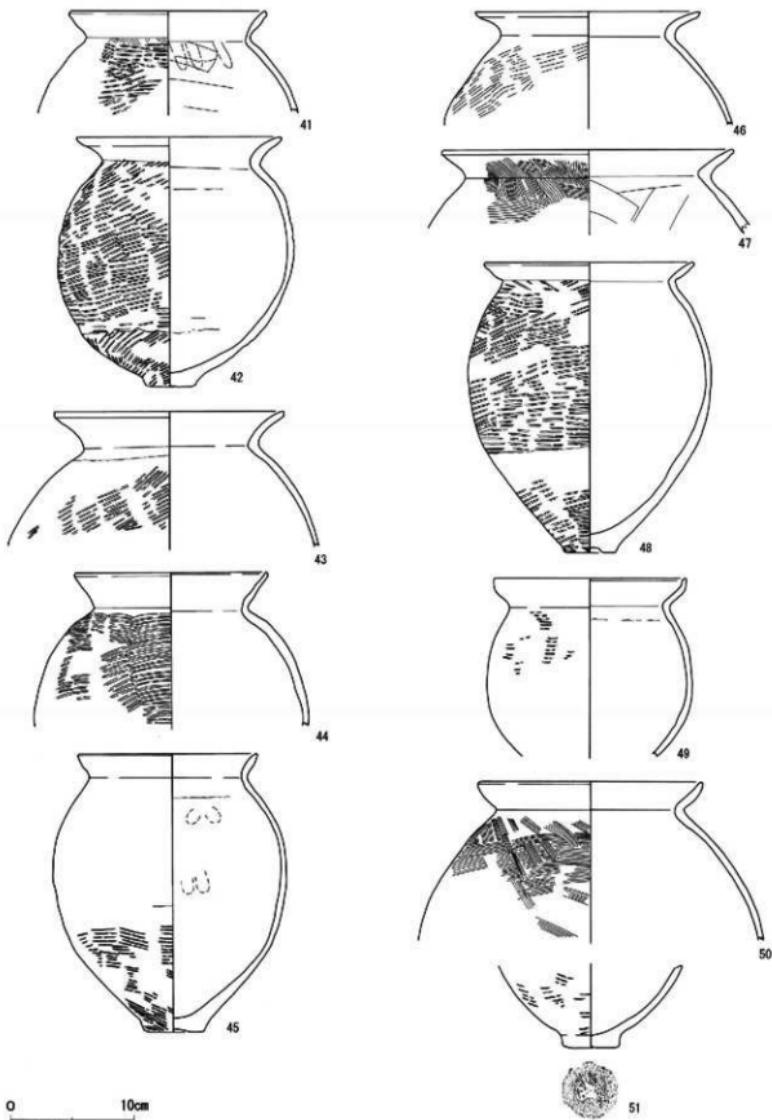
遺物 番号	器種形式	部位	法量	成形・調整・積熱	焼成・色調	備考	出土遺構
1	埴輪円筒埴輪	—	(高さ7.7)	台形のタガ。 (外)摩滅が著しく調整不明瞭。 (内)摩滅が著しく調整不明瞭。	7.5YR6/4 にぶい橙色		S D201
2	埴輪円筒埴輪	—	(高さ5.9)	台形のタガ。円形のスカシあり。	7.5YR7/4 にぶい橙色	外面に黒斑あり。	S D201
3	須恵器 有茎高杯	杯部	(口径12.8) (器高4.2)	(外)口縁部は回転ナデ。底部は回転ケズリ。 (内)回転ナデ。	良好	(田辺T K43)	S D201
4	須恵器杯身	口縁部~底部	(口径11.4) (器高3.3)	(外)口縁部は回転ナデ。底部は回転ケズリ。 (内)回転ナデ。	やや良	(田辺T K43)	S D201
5	須恵器杯身	口縁部~底部	(口径12.0) (器高3.8)	(外)口縁部は回転ナデ。底部は回転ケズリ。 (内)回転ナデ。	良好	(田辺T K43)	S D201
6	須恵器高杯	脚部~裾部	(底径8.8) (器高2.9)	スカシあり。 (外)回転ナデ。 (内)回転ナデ。	良好	(田辺T K43)	S D201
7	須恵器高杯	脚部~裾部	(底径9.6) (器高5.1)	3箇所にスカシあり。 (外)回転ナデ。 (内)回転ナデ。	良好	(田辺T K43)	S D201
8	弥生 台付鉢または小 形鉢	脚部	(器高5.9)	(外)摩滅が著しく調整不良。 (内)摩滅が著しく調整不明瞭。	10YR6/3 にぶい青褐色	(原田様相2~4)	S K204



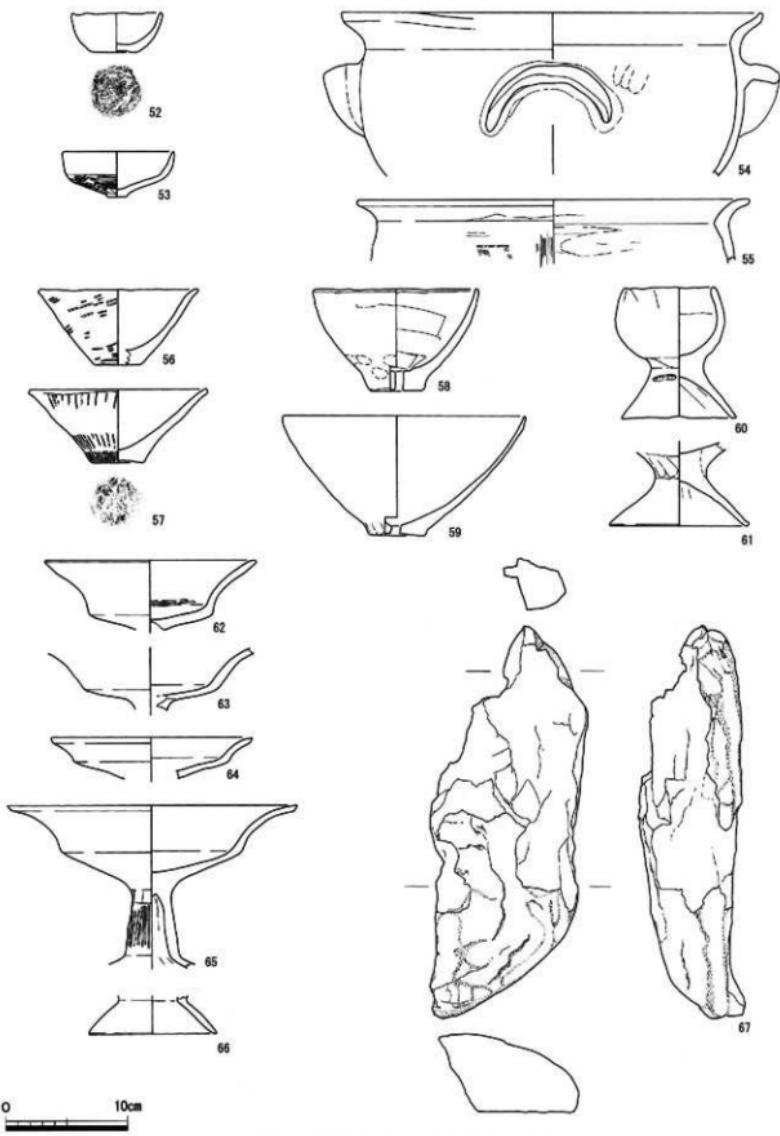
第6図 SD205出土遺物実測図①(S=1/4)



第7図 SD 205出土遺物実測図② (S=1/4)



第8図 SD 205出土遺物実測図③(S=1/4)



第9図 SD 205出土遺物実測図④ (S = 1/4)

第5表 出土遺物観察表(2)

遺物番号	器種形式	部位	法量	成形・調整・装飾	焼成・色調	備考	出土遺構・集積場所
9	発生 広口壺A2	口縁部～体部	(口径15.0) (器高5.7)	(外)口縁部はヨコナデ。頸部～体部はナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。頸部～体部は板ナデ。	10YR6/4 にぶい黄褐色	生跡四箇所。 (原田様相1)	SD205-I
10	発生 広口壺A2	口縁部～体部	(口径14.1) (器高8.4)	(外)頸部～体部は縱方向のヘラミガキか(摩滅が著しく調整不明瞭)。 (内)指捺え後ナデ。	5YR6/6橙色	(原田様相1)	SD205-II
11	発生 広口壺D1	口縁部～頸部	(口径14.6) (器高3.7)	(外)口縁端部に竹管押印円浮文を貼り付け。頸部に縱方向のヘラミガキ。 (内)全体にナデ。	7.5YR6/6橙色	(原田様相1)	SD205-III
12	発生 広口壺	口縁部～頸部	(口径17.9) (器高4.8)	(外)口縁端部に横(次浮文)貼り付け。頸部は縱方向のヘラミガキか(摩滅が著しく調整不明瞭)。 (内)横方向のハケナデ(4本/単位)後、竹管文。	5YR6/6橙色	東海系か	SD205-I
13	発生 広口壺D3	口縁部～頸部	(口径19.4) (器高6.6)	(外)口縁端部に竹管文が4つ一组で11箇所見られる。体部はヘラミガキか(摩滅が著しく調整不明瞭)。 (内)全体にナデ。	10YR6/4にぶい黄褐色	牛馬西面差。二次 焼成を受け、口縁部内面が赤色化及び黒色化。 (原田様相3)	SD205-I
14	発生 扇形底口壺	口縁部～頸部	(口径7.8) (器高8.2)	(外)全体に縱方向のヘラミガキ。 (内)全体にナデ。頸部の絞りが顯著に見られる。	10YR7/3 にぶい黄褐色	(原田様相2)	SD205-II
15	発生 壺	頸部～底部	(器高10.9) (底径4.0)	(外)タタキ後ナデか(摩滅が著しく調整不明瞭)。 (内)全体にハケ。	10YR7/2 にぶい黄褐色	外面の一部に黒斑あり。二次焼成を受け、内面全体が黒色化。	SD205-I
16	発生 壺	口縁部～頸部	(口径27.6) (器高4.8)	(外)口縁端部に横状浮文を貼り付け。頸部は縱方向のヘラミガキ。(内)頸部は板ナデか(摩滅が著しく調整不明瞭)	5YR6/6橙色	東海系か (原田様相2)	SD205-II
17	発生 壺	頸部～体部	(器高25.2)	(外)体部はヘラミガキか(摩滅が著しく調整不明瞭)。 (内)体部に指捺压痕。	10YR5/4 にぶい黄褐色	生跡西面差。内面全体に焼ける。	SD205-I
18	発生 小形壺	口縁部～底部	(口径10.2) 器高9.4底径4.0	(外)頸部に指捺压痕が目立つ。全体にナデ。 (内)全体に指ナデ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	底部外面に塗付薬。	SD205-III
19	発生 小形壺	口縁部～底部	(口径12.7) (器高12.5底径3.0)	(外)口縁部タタキ出し手法。(外)体部上半はタタキ後ナデ。 (内)下半はタタキをナデ消す。 (内)全体にナデ。	10YR7/4 にぶい黄褐色	(原田様相3)	SD205-I
20	発生 小形壺	口縁部～底部	(口径12.6) 器高6.85底径4.2	(外)口縁部タタキ出し手法。 (内)体部上半はタタキ後ナデ。中央部は粘土棒接合痕のち縦方向のタタキ。 (内)全体はナデ。体部下半～底部は板ナデ	10YR7/3 にぶい黄褐色	二次焼成を受け、体部中央～底部外側が黒色化。(原田様相3)	SD205-II
21	発生 小形壺	口縁部～底部	(口径8.7) 器高6.65底径3.0	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタタキ後ナデ消す。 (内)全体に板ナデ。底部に工具痕がクモの巣状に見られる。	10YR7/4 にぶい橙色	体部外面の一部と内面全体に黒斑あり。 (原田様相3)	SD205-II
22	発生 小形壺	口縁部～底部	(口径11.0) 器高10.0底径3.2	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタタキ後ナデ消す。 (内)全体にナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙色	(原田様相3)	SD205-I
23	発生 小形壺	口縁部～底部	(口径10.9) 器高9.5底径2.4	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタタキ後ナデ消す。 (内)口縁部はヨコナデ。全体に板ナデ。	7.5YR7/6 橙色	内面全体が塗ける。 (原田様相3)	SD205-I
24	発生 小形壺	口縁部～底部	(口径11.4) 器高6.05底径1.8	(外)口縁部は「く」の字に外反。形態化した底部をもつ。 (外)口縁部はヨコナデ。体部上半は左上がりタタキ後ナデ。 (内)全体にナデ。粘土棒接合痕目立つ。	2.5YR7/3 浅黄色	底部外面に黒斑あり。 (原田様相3)	SD205-I
25	発生 小形壺	口縁部～底部	(口径12.7) 器高12.5底径3.0	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタタキ後ナデ。 (内)全体にナデ。底部に「二」具痕が目立つ。	7.5YR7/4 にぶい橙色	底部外面を除く全体が焼ける。 (原田様相3)	SD205-I

第6表 出土遺物観察表(3)

遺物番号	器種形式	部位	法量	成形・調整・装飾	焼成・色調	備考	出土遺物一 集成番号
26	弥生小形甕	口縁部～底部 (ほぼ光沢)	口径14.5 高さ14.8 底径3.9	口縁部タキ出し手法。 (外)口縁部～体部上半はタキ(3～4条/cm)。体部下半はタキ後ナデ消す。 (内)全体に板ナデ。粘土接合痕が目だつ。	2.5V7/3 淡黄色	二次焼成を受け、 口縁部～底部が赤化。 (原田標査3)	S D 205-I
27	弥生小形甕	口縁部～体部 (器高9.6)	(口径15.8) (器高9.6)	(外)口縁部はヨコナデ。粘土接合痕のち縦方向 のタキ後体部全体にやや右上がりのタキ(5条/ cm)。 (内)口縁部はヨコナデ。粘土接合痕の指頭压 痕が見られる。	10YR7/3 にぶい黄橙色	外面体部上半が焦 ける。 (原田標査3)	S D 205-I
28	弥生小形甕	口縁部～底部 (口径13.0)	口径13.0 高さ16.0 底径3.6	口縁部タキ出し手法。底部輪台技法。 (外)口縁部はヨコナデ。体部上半はやや右上がり のタキ(4条/cm)後ナデ。体部下半は右上りの タキ(3条/cm)後ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。体部は板ナデ。	7.5V8/4 にぶい橙色	内面体部下半～底 部が焦げる。二次 焼成を受け、外面 は頭部を除く全体 が黒色化。 (原田標査3)	S D 205-II
29	弥生小形甕	口縁部～底部 (口径10.8)	口径10.8 高さ14.0 底径3.8	口縁部タキ出し手法。 (外)体部上半はタキ(3条/cm)後ナデ。体部下半 はタキ(3条/cm)を板状工具によりナデ消す。 (内)体部は板ナデ。	10Y5/3 にぶい黄褐色	内面体部下半～底 部に焦付着。 二次焼成を受け、外 面全体が黒色化。 (原田標査2)	S D 205-II
30	弥生小形甕	口縁部～底部 (器高7.9)	(口径11.6) (器高14.2 (底径3.9)	口縁部タキ出し手法。 (外)体部はタキ(3条/cm)を板状工具によりナデ 消す。 (内)体部上半はナデ。体部下半は板ナデ。	10Y5/3 にぶい黄褐色	二次焼成を受け、 外面体部上半～体 部が黒色化。 (原田標査3)	S D 205-I
31	弥生甕	口縁部～体部 (器高7.5)	(口径18.4)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタキ(3条/cm)を 板状工具によりナデ消す。(内)口縁部はヨコナデ。 体部は板ナデ。	2.5V7/3 淡黄色		S D 205-I
32	弥生甕	口縁部～底部 (一部復元)	(口径17.4) (器高24.5) (底径4.2)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタキ(3～4条/cm) 後ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。体部は板ナデ。	10Y6/3 にぶい黄褐色	体部外面に黒斑が 見られる	S D 205-I
33	弥生甕	口縁部～底部 (器高6.6)	(口径16.1)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタキ(3～4条/cm) 後ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。体部は板ナデ。	7.5V8/4 にぶい橙色	二次焼成を受け、 外面体部中央が黒 色化内面体部下半 が焦ける。	S D 205-I
34	弥生甕	口縁部～底部 (器高4.8)	(口径17.9)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタキ(5条/cm)後 ナデ。体部接合部は接合後タキ後ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。体部は板ナデ。	SYR5/4 にぶい赤褐色	二次焼成を受け、 外面体部下半と口 縁部を除く内面全 体が黒色化。	S D 205-II
35	弥生甕	口縁部～体部 (器高10.8)	(口径17.2)	(外)口縁部はヨコナデ。体部は格子状のタキ(3 本/cm)後ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。粘土接合痕のち指頭压 痕のち板ナデ。	2.5V8/3 淡黄色		S D 205-III
36	弥生甕	口縁部～体部 (器高12.1)	(口径17.0)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタキ(3本/cm) 後ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。粘土接合痕のち指頭压 痕のち板ナデ。	10Y8/3 にぶい黄褐色		S D 205-III
37	弥生甕	口縁部～体部 (器高11.0)	(口径15.6)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタキ(2～3条/cm) 後ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。体部は板ナデ。指頭压痕 立つ。	7.5V8/4 にぶい橙色	二次焼成を受け、 外面体部が黒色化。	S D 205-III
38	弥生甕	口縁部～体部 (器高16.7)	口径15.8 (器高16.7)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタキ(3条/cm)後 ナデ。接合痕はハケ状工具によってナデ消す (内)口縁部はヨコナデ。体部は板ナデ。粘土接 合痕と指頭压痕が見られる。	10Y8/3 にぶい黄褐色	二次焼成を受け、 外面体部が黒色化。	S D 205-III
39	弥生甕	口縁部～体部 (器高10.3)	(口径16.8)	(外)体部はタキ(3～4条/cm)をナデ消す。(内) 体部は粘土接合後ナデ。	10Y8/4 にぶい黄褐色	二次焼成を受け、 外面口縁～体部が 赤色化及び黒色化。	S D 205-II
40	弥生甕	口縁部～体部 (器高10.3)	(口径17.8)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタキ(2～3条/cm) 後ナデ。(内)口縁部はヨコナデ。頭部はハケナデ。体部は タキ(3～4条/cm)後ナデ。(内)口縁部はヨコナ デ。体部は板ナデ。	7.5V8/4 暗褐色	体部外面の一部に 焦付着	S D 205-I
41	弥生甕	口縁部～体部 (器高8.4)	(口径15.6) (器高8.4)	(外)口縁部はヨコナデ。頭部はハケナデ。体部は タキ(3～4条/cm)後ナデ。(内)口縁部はヨコナ デ。体部は板ナデ。	10Y8/3 にぶい黄褐色		S D 205-III

第7表 出土遺物観察表(4)

遺物番号	種類形式	部位	法量	形態・調整・被施	焼成・色調	備考	出土遺構・集積番号
42	弥生 甕	口縁部～底部 (ほぼ完形)	口径16.3cm 器高20.6cm 底径3.9cm	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタタキ(3~4条/cm)。 (内)口縁部はヨコナデ。体部は板ナデ。粘土模接着痕立つ。	2.5H7/3 浅黄色	体部外面に二次焼成。体部内面に黒斑が見られる。	S D205-I
43	弥生 甕	口縁部～底部 (ほぼ完形)	口径18.5cm (器高11.1cm)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタタキ(3~4条/cm)。 (内)口縁部はヨコナデ。体部はナデ。	7.5H6/6 橙色	口縁部内面に黒斑が見られる。	S D205-I
44	弥生 甕	口縁部～体部	口径15.4cm (器高12.6cm)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタタキ(2~3条/cm)後ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。体部はナデ。	10H7/3 にぶい黄褐色	二次焼成を受け、体部外面が黒色化。	S D205-II
45	弥生 甕	口縁部～底部	(口径13.3cm) 器高22.9cm 底径4.8cm	(外)口縁部はヨコナデ。体部上半はタタキを全て「J」字にナデ消す。体部下半は左上がりのタタキ(3条/cm)後ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。体部はナデ。指脱(?)痕が目立つ。	10H7/3 にぶい黄褐色	底部外面に木の葉痕が見られる。二次焼成を受け、内面全体が黒色化及び赤色化。	S D205-I
46	弥生 甕	口縁部～体部	(口径18.3cm) (器高9.3cm)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタタキ(3条/cm)後ナデ消す。 (内)口縁部はヨコナデ。体部は板ナデ。	10H7/3 にぶい黄褐色		S D205-II
47	弥生 甕	口縁部～体部	(口径23.4cm) (器高6.9cm)	(外)口縁部はヨコナデ後ハケメ(7~8条/cm)。体部はハケメ(7~8条/cm)。 (内)口縁部はヨコナデ。体部は板ナデ。	10H7/3 にぶい黄褐色	二次焼成を受け、内面全体が黒色化。外側は赤色化。	S D205-III
48	弥生 甕	口縁部～底部	(口径16.8cm) 器高23.9cm 底径4.0cm	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタタキ(2~3条/cm)後ナデ。接合部のみ板ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。全体に板ナデ。	7.5H6/4 にぶい褐色	二次焼成を受け、外表面～底部が黒色化。	S D205-I
49	弥生 甕	口縁部～体部	(口径15.6cm) (器高14.6cm)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はタタキ(3条/cm)を「J」字にナデ消す。 (内)口縁部はヨコナデ。体部は板ナデ。	10H8/3 にぶい黄褐色	外表面部に黒斑あり。	S D205-I
50	弥生 甕	口縁部～体部	(口径18.0cm) (器高15.1cm)	(外)口縁部はヨコナデ。体部はハケ後板ナデ。 (内)口縁部はヨコナデ。体部はナデ。	7.5H6/4 にぶい褐色		S D205-III
51	弥生 甕	体部～底部	(口径6.7cm) 器高3.5cm 底径1.6cm	(外)体部はタタキ(3条/cm)後ナデ。 (内)体部は板ナデ。	10H8/3 浅黄色	底部外面中央部に工具痕が見られる。	S D205-I
52	弥生 小形鉢	口縁部～底部 (ほぼ完形)	口径7.2cm 器高3.1cm 底径3.8cm	(外)全体にナデ。 (内)全体にナデ。	7.5H7/6 橙色	底部外面に黒斑及び木の葉痕が見られる。	S D205-II
53	弥生 小形鉢	口縁部～底部	(口径8.9cm) 器高3.75cm 底径1.6cm	(外)体部上半はナデか(摩滅が著しく調整不良)。体部下半は丁寧な横方向のヘラミガキ。 (内)全体にナデ。	2.5H3/3浅褐色	外表面部に黒斑あり。	S D205-III
54	弥生 (把手付)人形甕 B	口縁部～体部	(口径33.8cm) 器高13.6cm	(外)口縁部はヨコナデ。掌蓋が著しく調整不良。 (内)口縁部はヨコナデ全体にナデ。指脱(?)痕目立つ。	10H6/4 にぶい黄褐色	(原田標柱1~2)	S D205-II
55	弥生 大形鉢	口縁部～底部	(口径12.6cm) 器高6.2cm (底径3.8cm)	(外)タタキ後ナデ。 (内)摩滅が著しく調整不良。	10H7/3 にぶい黄褐色	(原田標柱2~3)	S D205-III
56	弥生 鉢B1	口縁部～底部	(口径12.6cm) 器高6.2cm (底径3.8cm)	(外)タタキ後ナデ。 (内)摩滅が著しく調整不良。	10H7/3 にぶい黄褐色	底部外面に黒斑が見られる。	S D205-III
57	弥生 鉢B1	口縁部～底部	(口径14.4cm) 器高6.6cm (底径4.0cm)	(外)放射状のタタキ残ナデ。 (内)全体にナデ。	10H5/2 灰黃褐色	底部外面に木の葉痕が見られる。外表面部～体部にかけて一部黒斑が見られる。	S D205-I
58	弥生 有孔鉢A	口縁部～底部	(口径13.0cm) 器高8.4cm (底径4.0cm)	(外)全体に指ナデ。 (内)全体に板ナデ。	7.5H7/4 にぶい褐色	底部外面と体部下半内面に黒斑が見られる。(原田標柱2~3)	S D205-III
59	弥生 有孔鉢A	口縁部～底部	(口径19.6cm) 器高9.8cm (底径4.4cm)	(外)摩滅が著しく調整不良。 (内)摩滅が著しく調整不良。	10H8/4 浅黄色	内面に一部黒斑が見られる。(原田標柱2~3)	S D205-II

第8表 出土遺物観察表(5)

遺物番号	器種形式	部位	法量	成形・調整・装飾	焼成・色調	備考	出土遺物-集積番号
60	弥生 台付鉢	口縁部～腹部 (はほ完形)	口径7.2 器高10.8 底径3	(外)全体にナデ。一部擦痕压痕が見られる。 (内)杯部は指ナデ。脚部は板ナデ。	10YR8/3 浅黄褐色	杯部外面に黒斑が見られる。	S D205-I
61	弥生 台付鉢	脚部～颈部	(直径6.5) 底径11.2	(外)脚部に指擦痕が目立つ。颈部はヨコナデ (内)脚部は板ナデ。	7.5YR6/3 にぶい褐色		S D205-II
62	弥生 有縫高杯B2	杯部	(口径16.9) (器高5.8)	(外)摩滅が著しく調整不明瞭。 (内)全体にヘラミガキ(口縁部は摩滅が著しく調整不明瞭)。	2.5Y8/3 淡黄色	内外面に一部黒斑が見られる。	S D205-II
63	弥生 有縫高杯	杯部	(器高5.0)	(外)摩滅が著しく調整不明瞭。 (内)摩滅が著しく調整不明瞭。	10YR7/4 にぶい黄褐色		S D205-I
64	弥生 有縫高杯B2	杯部	(口径16.3) (器高3.3)	(外)摩滅が著しく調整不明瞭。 (内)全体にヨコナデ。	10YR7/3 にぶい黄褐色		S D205-II
65	弥生 有縫高杯C2	杯部～脚部	(口径23.6) (器高14.4)	(外)杯部はヘラミガキか(摩滅が著しく調整不明瞭)。脚部は縱方向のヘラミガキ。 (内)摩滅が著しく調整不明瞭。	10YR7/3 にぶい黄褐色		S D205-I
66	弥生 高杯?	颈部	(器高3.1) (底径10.4)	(外)全体にナデか(摩滅が著しく調整不明瞭)。 (内)全体にナデか(摩滅が著しく調整不明瞭)。	2.5Y7.2 灰黄色	内外面に黒斑が見られる。	S D205-I
67	石器		(長辺32.5) (短辺11.5) (厚さ8.0)	(a面)上半は欠損。 (b面)中央部は欠損。	-		S D205-I

第3章まとめ

今回の調査では、第1面で平安～鎌倉時代・江戸時代、第2面で弥生時代後期・古墳時代中期の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ10箱である。

第1面の検出遺構は江戸時代の井戸・小穴と平安～鎌倉時代の溝である。前者の井戸内部の埋土には近年のごみなども混ざっていることから、当地に建物が建つ直前まで農事用の井戸として使用されていたことがわかる。市域の低平地では、島畠の端部に井戸が構築される例が多く、当地でも、井戸より西側は1段高くなっていることから、井戸を挟んで西が島畠、東が水田であったことが推測される。溝はおおむね東西・南北に伸びており、耕作痕・区画用のものと考えられる。これらのことから、当地付近では、平安～鎌倉時代から昭和時代中頃のいわゆる「経済成長期」まで、耕作地が踏襲されていたことがわかる。

第2面の検出遺構は古墳時代中期～後期と弥生時代後期の土坑・小穴・溝である。現地では同一面で捉えたが、構築面・埋土によって分けることができる。前者はS D201・202で6層上面を構築面としており、埋土は茶褐色系である。後者はS K204、S P203・209、S D205～208・210・211で第7層を構築面としており、埋土は黒褐色・青灰色系である。

S D201は諸般の事情により掘りすぎたが、北壁の観察から、幅は広がるものと考えられる。内部からは6世紀頃の埴輪・須恵器片が出土しており、緩くカーブして伸びることから、古墳周溝(周濠)の可能性がある。また、基盤層となる第8層粗砂～礫は、南下がりであることからも、S D201の北側に墳丘を構築しやすかったものと思われる。

S D205はいわゆる「土器廐棄溝・投棄溝」である。廐棄された土器の時期差はあまりなく、土器堆積の厚みもさほどないことから、一時に廐棄されたものと考えられる。ここでも、S D205より北西側の高まりに居住域が広がっていたものと推定できる。

図 版



調査地全景(東から)



第1面全景(東から)



S E101断面状況(南東から)



S D 201・202(南から)

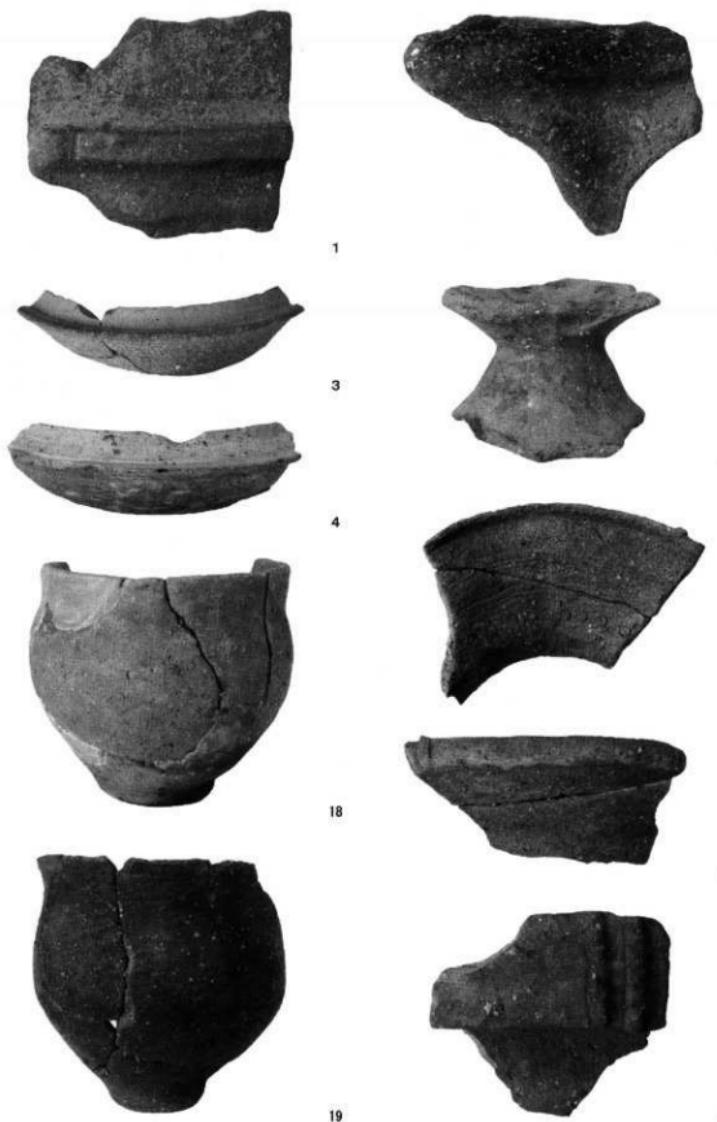


S D 201・S P 203・S K 204(南西から)

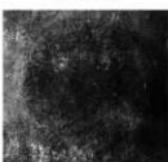


S D 205掘削状況(南西から)





S D201(1~4)、SK204(8)、SD205(12・16・18・19)出土遺物



20



23



21



24



22



25



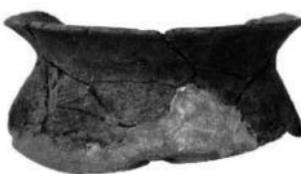
27



26



28



31



29



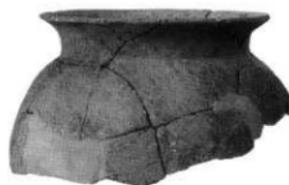
33



30



34



35

S D 205 (28~31・33~35) 出土遺物



36



42



38



43



39



44

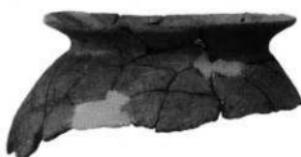


40



45

S D 205 (36・38~40・42~45) 出土遺物



46



54



48



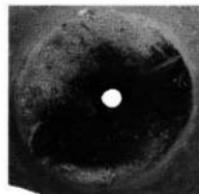
57



50



52



58

S D 205(46・48・50・52・54・57・58)出土遺物



56



61



59



62



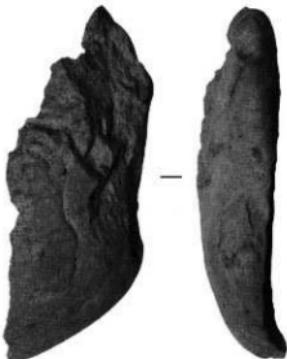
64



65



60



67

S D 205(56・59~62・64・65・67)出土遺物

VI 西郡廃寺第3次調査（NKT2006-3）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市泉町三丁目で実施した工場建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する西郡廃寺第3次（NKT2006-3）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成19年1月16日～2月23日、うち実働3日間に、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約34m²を測る。
1. 現地調査に参加した調査補助員は、垣内洋平・市森千恵子・である。
1. 内業整理は現地調査終了後に随時行い、平成21年3月をもって終了した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は高萩が行った。

本　文　目　次

第1章　はじめ	93
第2章　調査概要	94
第1節　基本層序	94
第2節　検出遺構と出土遺物	94
第3章　まとめ	94

挿　図　目　次

第1図　調査地位置及び周辺図	93
第2図　調査区設定図(S=1/250)	94
第3図　第1～6区平断面図(S=1/100)	95
第4図　第7～10区平断面図(S=1/100)	96

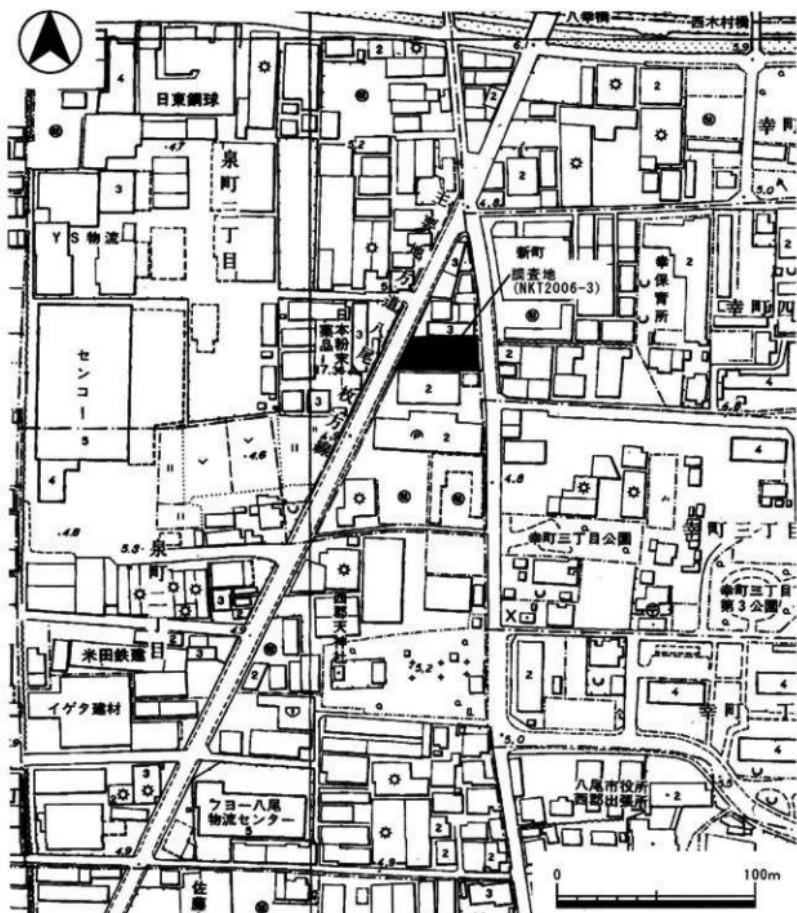
図　版　目　次

図版一　第1区(南から) 第2区(南から) 第3区(東から) 第4区(南から) 第5区(南から) 第6区(南から) 第7区(南から) 第8区(南から)	
図版二　第9区(西から) 第10区(西から) 第6区調査風景(南から) 調査地(西から)	

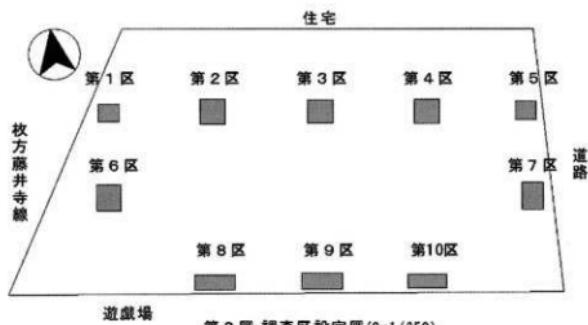
第1章 はじめに

当該地は、八尾市の北部、東大阪市との境を流れる第二寝屋川より南へ160mに位置し、旧八尾街道に面している。調査地の南へ100mにある天神社境内には、塔心礎と思われる石材があり、付近より古瓦が出土している。寺院址の中心付近と推定され、西郡廃寺範囲が設定されている。当調査研究会が行った周辺の発掘調査では弥生～中世に至る遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は工場建設に伴う発掘調査で、建物の基礎部(2×2 m 7箇所、1×2.5 m 3箇所)の10箇所を現地表下約1 mについては機械による掘削、以下は人力掘削した。



第1図 調査地位置及び周辺図



第2図 調査区設定図 ($S=1/250$)

第2章 調査概要

第1節 基本層序

調査地の基本層序は、1層盛土・擾乱。2層茶灰色シルト(微量の砂礫)～灰色粘質土と茶灰色シルトのブロック(2' 淡灰褐色細砂混シルト～暗灰褐色シルト)。3層灰褐色シルトで微量の砂礫と土師器・須恵器を少量含む。4層明茶灰色微砂混シルト、5層茶褐色細砂混シルト、6層褐色粘質シルトは、弥生時代後期末から奈良時代までの須恵器、土師器片、平瓦片等が出土。7層灰色粘土～明茶灰色微砂混シルト(7' 青灰色シルト)、8層淡灰茶色細砂・青灰色粘土で、小穴・溝の遺構を検出している。

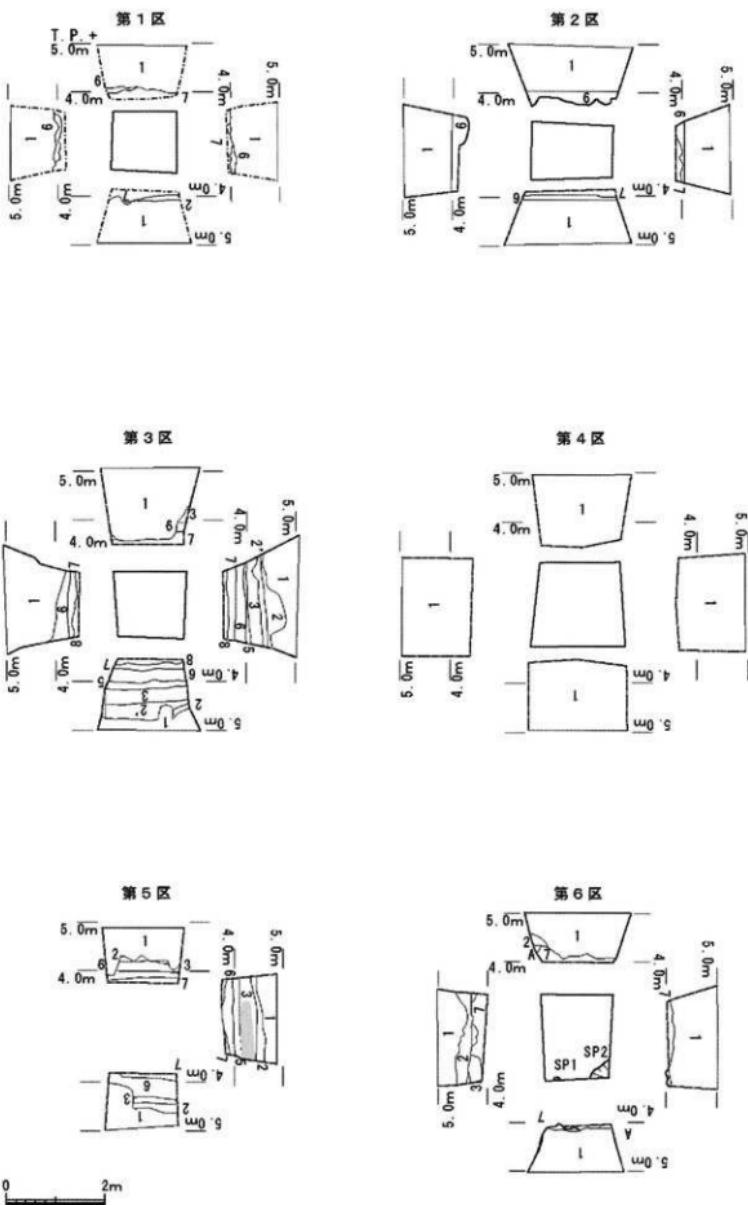
第2節 検出遺構と出土遺物

調査区で検出された遺構は、第7・8層上で小穴8個・溝1条である。時期は弥生時代後期末～奈良時代に比定される。小穴(S P 1～8)は径20～40cm、深さ10～25cmを測る。溝(S D 1)は幅30～40cmで北西から南東に続く。深さは15cmを測る。埋土は暗灰褐色シルトの單一層である。遺構内の遺物は、土師器の小片が微量に含まれているが、詳細な時期については確定しがたい。

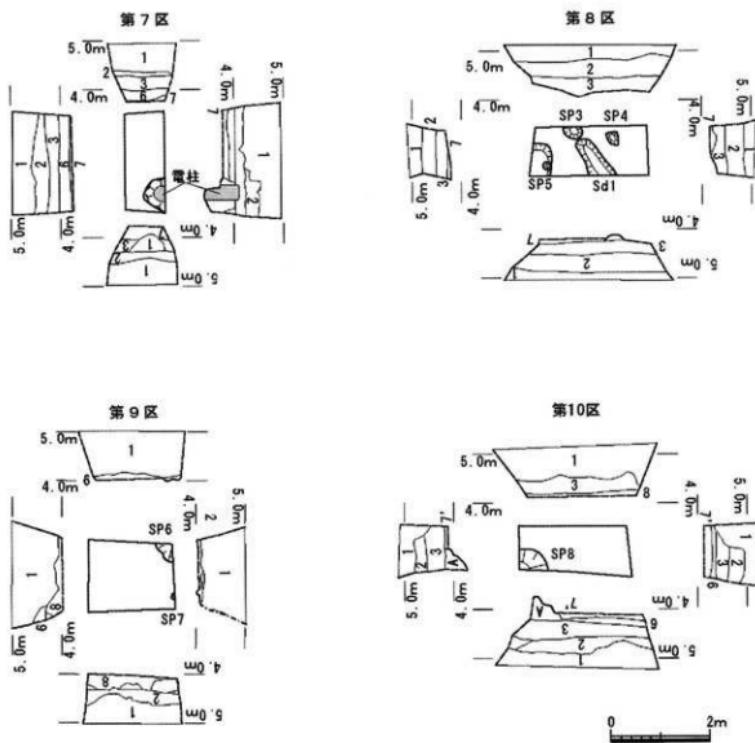
出土した遺物は、層序でも記述している第3層と6層内からで弥生時代後期末から近世に至る時期のもので、バスケット(40×30×10cm)に約1杯分である。主に第3層では中世～近世の遺物、第6層では弥生時代後期末～奈良時代の時期のものに分けられる。これらの遺物は大半が小片化したものや摩耗を受けているものであった。

第3章 まとめ

この調査は、基礎部分のグリット掘りの限られたものであったため、遺構や包含層の状況はきわめて把握しにくい状態であったものの、全体に遺物を含む層、遺構の存在が広がっていることが確認された。また、当地から100m南西で行っている第4次調査とは層位や遺構面の対応も可能であり、西郡廃寺の推定地とされる天神社の北西側の状況が若干ではあるが明らかにされたものと考える。



第3図 第1～6区平断面図 ($S=1/100$)



- 1 塵土・擾乱
- 2 茶灰色シルト(微量の砂礫)～灰色粘質土と茶灰色シルトのブロック
- 2' 淡灰褐色細砂混シルト・暗灰褐色シルト
- 3 灰褐色シルト(微量の砂礫、土師器・須恵器片微量に含む)
- 4 明茶灰色微砂混シルト
- 5 茶褐色細砂混シルト
- 6 褐灰色粘質シルト(土師器・須恵器片含む)
- 7 灰色粘土～明茶灰色微砂混シルト
- 7' 青灰色シルト
- 8 淡灰茶色細砂・青灰色粘土
- A 暗灰褐色シルト

第4図 第7～10区平面面図($S=1/100$)

図 版



第1区(南から)



第2区(南から)



第3区(東から)



第4区(南から)



第5区(南から)



第6区(南から)



第7区(南から)



第8区(南から)



第9区(西から)



第10区(西から)



第6区調査風景(南から)



調査地(西から)

報告書抄録

ふりがな	きゅうはうじいせき こさかあいいせき ジョウホウジイセキ とうごういせき にしごおりはいじ
書名	久宝寺遺跡 小阪合遺跡 成法寺遺跡 東郷遺跡 西郡廃寺
副書名	
卷次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	127
編著者名	I 荒川和哉・原田昌則・尾崎良史・II 坪出真一・三河村恵理、IV・V 成海佳子・河村・VI 高萩千秋
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2009年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
久宝寺遺跡 (第73次調査)	大阪府八尾市南久宝寺一丁目地内	27212	23	34度37分29秒	135度35分27秒	20070920～20071025	約304	共同住宅建設
小阪合遺跡 (第32次調査)	大阪府八尾市青山町4丁目	27212	40	34度37分21秒	135度36分41秒	19960701～19960724	約200	変電設備増設
成法寺遺跡 (第20次調査)	大阪府八尾市南本町2丁目	27212	73	34度37分26秒	135度36分18秒	20071127～20071204	約22	共同住宅・事務所付倉庫建設
東郷遺跡 (第68次調査)	大阪府八尾市桜ヶ丘二丁目	27212	37	34度37分44秒	135度36分38秒	20070504～20070621	約84	事務所建設
東郷遺跡 (第69次調査)	大阪府八尾市本町2丁目	27212	37	34度37分54秒	135度36分11秒	20071001～20071015	約187	共同住宅建設
西郡廃寺 (第3次調査)	大阪府八尾市泉町3丁目地内	27212	46	34度38分56秒	135度36分19秒	20070116～20070223	約34	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第73次調査)	集落	奈良時代後期～平安時代 平安時代前期～中世	溝・小穴・自然河川 溝・小穴・落込み	土師器・須恵器・銅鏡・耳環 土師器・須恵器・瓦・墨書き土器	
小阪合遺跡 (第32次調査)	集落	弥生時代後期 古墳時代前期	土器集積 井戸	弥生土器 土師器	
成法寺遺跡 (第20次調査)	集落	古墳時代中期～奈良時代 中世～近世	掘立柱建物・井戸・溝 水井・鳥糞	土師器・須恵器 土師器・須恵器・曲物	
東郷遺跡 (第68次調査)	集落	鎌倉～室町時代	井戸・土坑・溝・小穴・落込み	土師器・須恵器・瓦器・瓦	
東郷遺跡 (第69次調査)	集落	古墳時代中期 奈良～平安時代 室町～江戸時代	ピット群・土坑 溝・自然河川	土師器・須恵器 土師器・須恵器・瓦・滑石製臼 須恵器・黒色土器・龍泉窯青磁	
西郡廃寺 (第3次調査)	集落	弥生時代後期～奈良時代	土坑・溝・小穴 溝 井戸・小穴	弥生土器 須恵器・埴輪	

要約	小阪合遺跡第32次、東郷遺跡第69次では弥生時代後期の土器集積や土器窯床溝を検出した。東郷遺跡第69次の古墳時代後期の溝からは埴輪が出土しており、古墳の崩壊の可能性がある。久宝寺遺跡第73次では奈良～平安時代の墓葬から墓朝十二鏡の「隆平水質」や墨書き土器が出土した。東郷遺跡第68次調査では古墳時代中期のピット群や焼土坑を、小阪合遺跡第32次では奈良時代の掘立柱建物や井戸を、成法寺遺跡第20次調査では中世～近世の井戸等を検出した。
----	--

(財)八尾市文化財調査研究会報告127

- I 久宝寺遺跡（第73次調査）
- II 小阪合遺跡（第32次調査）
- III 成法寺遺跡（第20次調査）
- IV 東郷遺跡（第68次調査）
- V 東郷遺跡（第69次調査）
- VI 西郡廃寺（第3次調査）

発行 平成21年3月
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 株近畿印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 ニューエイジ <70Kg>

031